
悲しき勇者 異説 愚者の舞い 第2章

竜王寺 聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しき勇者 異説 愚者の舞い 第2章

【Nコード】

N0676G

【作者名】

竜王寺 聖

【あらすじ】

師の下を離れ、理想を求めて活動するルーケ。しかしそれは、崩壊への前章でもあった。

愚者の舞い 第2章 迷走する運命

「ここは・・・どこだ？」

ルーケは、目の前に広がる世界に呆然とした。

細部位置は知らないが、異次元は山の中にあつたボロ小屋に通じていた筈。

それなのに自分は今、見晴らしの良い丘に立っていた。

左前方には小さく町が見え、その町以外の場所には森が大部分を占めて広がっている。

振り返れば、今、自分の立っている場所が道のど真ん中である事は分かった。

左右に広がる木々に挟まれ、馬車1台通れる程度の道が、曲がりくねって伸びている。

ともかく情報を集めなければいけないと思い立ち、ルーケは町を目指して歩き始めた。

そこは結構新しい街らしく、城壁などもまだ綺麗なものだった。

ただ、ライヒほど魔物を警戒していないのか、周りの木々より城壁は高いが、そんなに離れてもいなかった。

もっとも、木を伝わって城壁に飛び移るには、猿程度では不可能な程度に離れていたが。

そんな外観を眺めつつ門に辿り着くと、守衛の騎士が無言で手を突き出して来た。

「・・・？ えっと・・・なに？」

「何じゃない何じゃ。 通行税を払え。」

騎士に呆れたようにそう言われ、ルーケは仰天した。

「ええ！？ なにそれ！？」

「何それじゃない。 お前旅人だろう？ 姿を見た事が無いからな。」

「えっと・・・うんそうだけど。」

「だったら通行税を払うのが当り前だろうが。」

「そんな！ ライヒじゃそんなの無かったぜ！？」

「ライヒ？？」

騎士が不思議そうに仲間を振り返り、仲間も小首を傾げる。

「あの、ちよつと聞いていいかな？ ここってどの町？」

「はあ？？ お前ここがどこかも分からんで旅しているのか？」

「実は・・・そうなんだ。 道に迷っちゃって。」

「道に迷ったってお前・・・」

そう言われて戸惑う騎士だが、ルーケの方がもっと戸惑っていた。旅をした事が無いルーケには知らない事ばかりだし、ライヒを知らないと言う事は、かなり遠くへ出てしまったようだ。

参ったなと思っていた時、ヌウツと巨木が後ろから突き出し、ビツクリして飛び退いた。

「うおっ！？」

「え？ あ、わりい。 そっち側は見えねえもんだからよ。」

そう言う男は、痩せた体形をしていた。

顔立ちは整っており、美男子と言っても言い過ぎではないだろう。年の頃は二十歳前後と言った感じに見受けられるのだが・・・どことなく雰囲気がおかしくルーケには感じられた。

ともかくそんな男に一番驚いたのは、その驚異的な筋力。

ルーケでは抱えきれないような太さで6メートルはあるその大木を、その男は一人で担いで平然としているのだ。

「ちよつとりヨウ！ 気を付けなさいよ！」

そう言いながら後ろから現れたのは、これまた美女と呼ぶに相応しい娘だった。

こちらも年の頃は二十歳くらい、抜群のプロポーションで、出るどころ、へこむところのメリハリが激しい。

その娘は小走りにルーケの下へ駆け寄ると、素早く全身を見てから、
「ごめんなさいね。 怪我はない？」

「あ、はい。 当たっていませんから。」

「俺だけ責めるのって酷くねえか？ そっち側見てるのプリの仕事
だろ？」

「いいからとっとと運びなさい。 その木が無いと進まないんだか
ら！」

「へいへい。 門番さん、通るぜ？」

「おう、ぶつけないようにな。」

騎士は気軽にそう答えると、リヨウをすんなり通した。

そんな問答をしている間に、ルーケの事を不審に思った騎士が詰め
所に行って報告したらしい。

「おい、お前。」

背後から肩を叩かれて振り返ると、精悍な顔つきをした別の騎士が
立っていた。

「お前今、ライヒから来たと言ったそうだな？」

「え？ いや、俺・・・」

「それに道に迷ったと言ったそうだが、お前のどこを見たらそうな
るんだ？ 服は汚れていないし、荷物も無い。 魔物に襲われたよ
うにも見えん。 かと言って山賊にも見えんし、帝国の密偵がこん
な間抜けとも思えんし・・・。」

疑問がさらに増す騎士だが、それよりもルーケには今の言葉の方が
引っ掛かった。

「帝国？？」

「そりゃ軽装でしょう？」

不意にルーケの背後から、プリが口を挟んだ。

「私が雇った人だもの。 宿の建設にね。 木を切りに行って一人
足りないからおかしいと思って探していたのよ。」

その騎士は、ジッとプリの目を見つめてから、

「プリ殿がそう言われるなら、そうなのでしょうな。 ですが、面
倒事は御免ですぞ？」

「分かっているわ。 ありがとう。」

プリが満面の笑みでそう騎士に頭を軽く下げると、騎士は苦笑いをしながら二人を町の中へ通した。

「あ、ありがとう・・・。」

ルーケがそう答えると、プリは急に真面目な顔になって、

「いいえ。私もあなたに聞きたい事があるの。着いて来て。」

そう言うのと、手を掴んでグイグイ引っ張って行く。

ルーケとしては問答無用な行為に不満はあったが、相手は恩人であり、特に行くべき場所も無いので黙って着いて行く。

そして、町外れの家に着くと、プリはコンコンとノックした。

「クラス、いる？」

「ああ。」

「入るわよ。」

中から返事があるなり、プリはそう言いながら戸を開けた。

ルーケは中にいた住人を見た瞬間、思わず目を見開く。

「エルフ・・・。」

プリも美人だが、それとはまた違ったタイプの美人。

整ってはいるが全体的に鋭く、体はほっそりとし、女性なのに、ほぼおうとつは無い。

エルフ独特の尖った耳が無ければ彫刻に見えたかも知れない、そんな感じの美貌。

「そんな所に突っ立ってないで入ったらどうだ？」

エルフにそう言われ、ルーケは慌てて家に入り、後から入って来たプリが戸を閉める。

「で、私の家は連れ込み宿ではないのだから？」

「・・・あんたにそんな冗談言われるとは思わなかったわ。」

「私だって冗談の一つや二つは言うさ。で、なんだこいつは？」

「門で拾ったんだけど、ちよつと不審だったから連れて来たの。」

「ちよつと不審？ 何者だ？」

「それを聞くためにね。あなた、お名前は？」

「・・・ルーケ。」

「ルーケ？ ルーケ・・・どこかで聞いた・・・名前なんだけど・・・どこだったかな・・・？」

「ところで、ライヒって町を知らないか？ 俺はそこに帰りたいんだ。」

「ライヒ？」

キョトンとしてから、プリはエルフを見る。

「また、随分古い呼び名を使うな。 本当は何者だお前。」

エルフに無表情にそう聞かれ、戸惑うのはルーケの方だ。

「古い呼び名？ どういう事だい？」

「今はライヒと言う呼び方をしないのよ。」

「その町は75年ほど前だが、帝都と名を変えた。」

愚者の舞い 2-2

ルーケはきょんとし、暫く二人の言った意味を理解するのに時間がかかった。

「え・・・？　ちょっと待ってくれ？　今は帝都？　75年前？　何言ってるんだ？」

ようやく二人の言った意味を思考が理解し始めて戸惑っていると、ノックも無しにいきなり戸が開けられた。

「何やってんだよプリ！　現場監督・・・。　本当に何やってんだ！？　現場監督が現場を放り出して若い男とイチャイ」

スコーンツと飛んで来た木製の空の湯呑に顎を直撃され、リヨウは蹲る。

「煩い。　それにノックぐらいしろ。　レディーの家だぞ。」

ただでも釣り目の目を更に吊りあげてエルフがそう言うとおもむろにリヨウは跳ね起きてエルフに詰め寄った。

「誰がレディーだ誰が！　レディーは湯呑を問答無用で投げねえよっ！」

「二人ともストップ！！」

二人がいつもの言い争いを始めようとしたので、慌てて間に割って入る。

「リヨウ、悪いけど現場に行つて、今日は解散って伝えて欲しいの。」

「なんだよそれ！？　そんなんで宿が」

犬歯の目立つ口を大きく開けて抗議するリヨウの唇に、スツと人差し指を当てて黙らせ、自らの豊かな胸をクイツと押し上げて見せて、優しく。

「後で良い事してあげるから。　お・ね・が・い。」

「お安い御用だ。」

即座に真顔でそう答えると、来た時よりも早くダッシュで戻って行った。

「あいつのあの病気はなんとかならんか？　プリ。一応師匠だろう。」

「性格だけは鍛え・・・思い出した！！」

「なんだ？」

突然プリが大声を上げたので、ルーケもエルフもギョツとする。

「あなたパパの弟子！！　ルーケでしょ！？　どっかで聞いた名前だと思ったのよ！」

「・・・アラムの弟子だと？」

「え！？　師匠の娘さん！？　え？　って事は・・・レジャンドのおかあさん？」

そうだとすると、物凄く若く見えるなあとか思ったが、師匠である始原の悪魔自体、世界を作った人物でありながらあの外見だ。

納得は出来るが・・・まったく顔立ちとか似ていない。

「残念ながらレジャンドは私の娘じゃないわ。そんな事はどうでもいいの。　すぐパパに知らせなきゃ。」

「そう言う事はお前家でやってくれんか？　私はあ奴の顔を見たくない。」

エルフはそう言うのと、無表情な顔が少し嫌そうに変化した。

「あ、そうだったわね。　お邪魔したわクラス。」

「後で結果だけ教えてくれ。」

そっけなくエルフが言い終えると、コンコンとノックする音が聞こえた。

「誰だ？」

「メレーナです。　クラスイーヴィさん、入ってもよろしいですか？」

「ああ。」

「失礼します。」

そう言いながら入って来たのは可愛い娘だったが、娘を見た瞬間ル

ルーケは思わず。

「レジャンド？」

と、口から出ていた。

服こそ一般的な庶民の着る服であったが、ドレスを着た時のレジャンドにそっくりだったからだ。

だが、そう言われて驚いたのは娘の方である。

「え？ レジャンドは私の先祖ですけど？ それがなにか？」

「ああごめんねメレーナ。今レジャンドの話をしていたから。気にしないで。さ、着いて来てルーケ。」

「あ？ ああ。」

戸惑うメレーナの横を通り過ぎ、プリはルーケの手を引っ張って家の外へ出て、戸を閉めてから再び手を引いて隣の家に連れ込む。

「そこに座っていて。詳しい話はパパが来てからすると思うから。」

「え・・・師匠が？」

飛び出して来た手前、顔を非常に合わせにくい。

「そんな事言ってる場合じゃないの。あなたが異次元から飛び出した時、80年の月日が過ぎているんだから。」

「は・・・80年！？」

驚き戸惑うルーケに構わず背を向けると、プリは思念に集中した。

「あ、パパ。ルーケを見つけたわ。・・・うん、今一緒にいる。」

「・・・うちよ、ペイネの。・・・ええ！？ 私だって仕事があるのよ！・・・わかったわよ。」

何も無い空間に独り言を言ってるように見え、思わずドンビキするルーケである。

そんなルーケに構わず、プリはクルツと振り返ってルーケに向き直った瞬間、二人の間に忽然と掌サイズの袋が現れ、ドサツと落ちる。プリはため息を一つつくと、その袋を指差し。

「パパからの伝言よ。勝手に出て行ったお前に今更会う気もおきん。その金は恵んでやるから勝手に生きろ。ですって。」

会わなくて済み、ホツとしつつも言い草に戸惑うルーケである。

「ともかく、あなたの身に起きた事を教えてあげるわ。あなたが異次元から飛び出した時、運良く80年後にリンクしたの。」

「運良く?・・・80年後に現れてかい!？」

「普通なら飛び出した途端に挽肉よ、あなた。」

「え・・・? だって、でも、プリンさん普通に入って来てたし・・・。」

「あれは、パパがプリンちゃんが入って来る時にリンクさせていたから安全だったのよ。あなたは飛び出してしまったから、パパが世界にリンクする暇が無かったの。確率で言ったら、恐らく1000億分の1程度しか成功しないと思うわよ。 生きているだけで。」

説明を受けて、やっとルーケは恐ろしい事をしたのだと自覚し、青ざめる。

「じゃ・・・じゃあ、過去に戻る方法はないのか!？」

「無いわよ。 パパなら出来るかも知れないけど、頼み込んでもやらないでしょうね。」

「なんで!？」

「今が変わってしまうからよ。 あなたは80年前に消えた人間よ? それが戻ったらどうなるか、パパの図書館で勉強したでしょう? 多分だけど。」

ルーケはその答えを知っているだけに、なんとも答えようがなかった。

「ともかく、今の時代に慣れる事ね。 色々変わってると思うし、好きに生きたらいいわ。」

元々身寄りの無かったルーケだけに親兄弟の心配はないが、未来に来てしまったと言う事が非常に心許無い。

「それと、さっき会った女の子、レジャンドに似ているでしょう?」

「え? ああ、そうだったな。」

「あの子、レジャンドの子孫だからね。 玄孫になるんだっけかな

？」

そう言われ、ルーケは本当に未来に來たのだと、しみじみ感じた。
あのレジャンドに玄孫がいるなど・・・。

「今日はうちに泊まっていつて。宿は今建設中で、泊まれないから。」

「・・・ありがとう。」

「そう落ち込んでもしょうがないわよ。元氣を出しなさい。」
そう言った時、コンコンと戸をノックする音がし、

「メレーナです。入っていいですか？ プリさん。」

「いいわよ。」

何度見てもレジャンドそっくりな顔立ちに、ルーケは戸惑いを覚える。

もっともスタイルは全く似ていない。

年頃の娘らしい成長具合だ。

レジャンドと違って、男物の服を着ても男には見えないだろう。

「プリさん、私明日不在しますので、両親をよろしくお願いします。」

「

「あら。どこに行くの？」

「帝都です。手紙の宅配を頼まれました。」

「そっか。同時に、冒険者として登録しに行くのね？」

プリがそう聞くと、メレーナははにかんだ笑顔を浮かべた。

愚者の舞い 2-3

そんな二人の会話を聞くとはなしに聞きつつ、自分の今後を考える。

平和に導きたかった世界は既に過去となり、どのように生きるべきか思いつかない。

今と言う時代が平和なのかどうかは分からないが、魔王が倒されてから200年が過ぎたと言う事になる。

流石に誰かしら、統一なり平和なりをもたらしているように思えるのだ。

だが、レジャンドの子孫は冒険者に成ると言う。

（俺が平和をもたらしたかったのは何のためだ？）

改めて自分に問いかけ、ルーケは答えをやっと導き出した。

80年も経った今、自分はもう、冒険者としての登録は抹消されているだろう。

だったら改めてなればいい、と。

どうせ冒険者以外に成りたいものも無ければ出来る事も無いのだ。

「なんだ、簡単な答えじゃないか。」

悩んでいたのが馬鹿らしく思えるほど、答えは簡単だった。

自分が自分であるために、冒険者になる。

ただ、それだけの事。

時代など関係はなく、たとえ世の中が平和になったとしても、困っている人はどこかにいる筈なのだから。

ルーケはそう呟くと、自分の愚かさがおかしくなって、ハハハと軽く笑った。

だが。

「ちょっとあなた！ 人が悩んでいるのに答えは簡単だなんて、馬鹿にしているの！？」

ズイツとメレーナに詰め寄られ、ルーケはギョツとした。

「いや待ったレジャンド！　そういうんじゃないんだ！」

「何が違うのよ！　それに私はメレーナよ！　一々有名なレジャンド様の名前を出して！　私じゃそんな偉大な事なんて出来やしないって言うの！？」

「ああごめん！　そうじゃなくてだね・・・。」

「なにがそうじゃないのよ！？」

「ちよっとメレーナ、落ち着きなさいよ。」

「俺は君達の話聞いていなかったんだ。」

真剣に答えたルーケに、しかし、メレーナはさらに激怒した。

「嘘おっしやい！　聞いて無くてあんなタイミグ！　いい訳ならもっと言い訳っぽいましな事を言いなさいよ！」

この剣幕、この気の強さ、間違いなくレジャンドの子孫だなと思わなくも無い。

一旦は仲裁に入ろうとしたプリだが、呆れてメレーナの後ろで苦笑いを浮かべていた。

「本当さ。　俺は過去から今に飛んで来てしまった人間でね。　自分の事で手一杯なのさ。」

自嘲気味にそう言うと、プリが驚いた顔をし、メレーナの答えは拳だった。

「ぶっ殺すよ？」

頭にきすぎて、声は静かだがメレーナの目はかなり本気だ。

「それが本当なのよ。」

そう言いながらプリにポンと肩を叩かれて、メレーナはキョトンとして振り返る。

「まったく、自分でばらすかなあ、そう言う事。　メレーナだからまだ良かったけど、他の人には言わない方がいいわよ。」

「あたしだからよかった??？」

「そうですね。　でも、そう言うしか無いでしょう？」

そう言いながら殴られた左頬に手を当てつつ、ルーケは起き上がる。とても若い娘とは思えない、強烈なパンチだった。

プリはため息をつくど、メレーナにルーケの事を知っている限り教えた。

「じゃあ・・・本当に本物のレジャンド様に会った事あるんだ。」

「それ言ったら、私もクラスもだけどね。あとはたぶん、エギーユもまだ生きているんじゃないかな。」

「そんな訳で、俺も改めて冒険者に成りたいんだ。明日、出来れば同行させてもらえないかな？」

「いいですよ。その代わり、色々レジャンド様の事教えて下さいね。それと・・・報酬はあてにしないで下さい。」

「報酬？・・・ああ、手紙を運ぶ依頼の事？」

「ええ。安いですよ賃金。」

「だろうね。俺は道が分からないから同行するだけで、依頼を共にこなしたいわけじゃないから心配しないで。」

「よかった。二人で割ったら赤字になっちゃう。」

真顔で答えるメレーナに、ルーケとプリは可愛らしくて笑った。

そんな時、突然戸が開いた。

「お、メレーナちゃん。相変わらず可愛いねえ。」

「あらリヨウさん、こんにちは。柱の切り出しはもう終わったんですか？」

「現場監督がサボってるのに進むわけないじゃん？それより俺とお茶でもない？」

「ごめんなさい、明日帝都に行かなければならないので、準備をするの。」

「へえ。最近、また魔物が活発になって来ているそうだから、気を付けてね。」

「はい、ありがとうございます。それではプリさん、よろしくお願いします。」

「はいはい。腕によりをかけて面倒見ておくわ。」

力瘤を作って答えるプリに、メレーナは苦笑いを浮かべつつ帰って行った。

「で、なんでおめえがここにいるんだ？　おお？」

メレーナがいなくなるなり突然態度を急変させて詰め寄るリヨウに、ルーケは思わず一步後ずさり、プリが首根っこを掴んで止める。

「今晚この人泊めるからいるのよ。」

「なにい！？　プリが・・・若い男を泊めるう！？　・・・明日は雨か？」

驚くと同時にプリの手から逃れ、木製の窓を上げて身を乗り出し空を見る。

その尻をプリは蹴り飛ばして家から追い出すと、慌てて戻って来ようと窓に手をかけたのを見計らってバーン！　と、窓を閉じる。

「ギャハアゝ！！！！！！」

「あんたはそういう発想しかできないの！？」

「だってプリもそうだがクラスだって、そういう事しないじゃんか！」

閉ざされた窓でハッキリとは分からないが、手に息を吹きかけている様子が物音で分かる。

「当たり前でしょうがっ！！　私達は娼婦じゃないの！」

「だったら・・・あれ？　いつもの騎士様だ。」

「え？」

ゴスッ。　と、立ち上がっていたリヨウの側頭部に窓をぶつけて倒しつつ、プリが開け放った窓からクラスの家を見る。

確かにいつも来る騎士だった。

「ふおおおお・・・。」

「・・・まあ、潮時だものね・・・。」

切なげにそう言うと、プリは側頭部を押えて蹲るリヨウを気にも留めず、パターンと窓を閉める。

「ちよつとまてえ！　一言ぐらいあってもいいんじゃないか！？」

「あ、そうだ。　リヨウ！」

「なんだよ！？」

「良い事してあげる約束だったよね。」

「うんうんそうだよ。 やっとおも」

「じゃあ、稽古しようか。」

ニッコリと笑いながらそう言われ、リョウの動きがピタリと止まる。

「・・・稽古？」

「うん、そうよ。 あなたにとってはこれ以上も無いご褒美じゃないの。」

プリはあくまで笑顔だ。

「え・・・っと、今日はそうだ、斜向かいのリリカちゃんとデートの予定だった。 じゃ。」

そう言って、シュタツと手を上げると、リョウはダツシュで去って行った。

「・・・本当に、なんで私ったら・・・。」

そう呟きながら自嘲気味に笑うプリは、今にも消えそうなほど儚げに見えた。

「あの・・・プリさん？ お聞きしてもよろしいですか？」

「・・・な〜に？」

窓を閉めて振り向いたプリは、にこやかに笑う、いつものプリだった。

愚者の舞い 2-4

「先ほどあの人が魔物がと言っていましたけど……今は平和ではないのですか？　俺はてっきり80年も過ぎたから、統一国家か平和が訪れているものと思っていたんですが……」

プリはちよっとキョトンとすると、苦笑いを浮かべた。

「変わらないわ、何も。　ただ、元ライヒが近隣国を支配下に収めて一大勢力になり、帝国と名を改めて覇を唱えているけどね。　それでも、大陸統一には至っていないわ。　元々野心が強かった一族だから、あまり信用されていないし。　でも、80年前に即位した皇帝と、現皇帝であるその息子は優秀でね。　3大国に肩を並べる領土にまで広げたわ。」

「80年前……。　そう言えば、国王が危ないかもとは聞いていましたが……」

「でも、今以上に領土を広げるためにはクラスのようには強力な力を持った協力者が必要だから、ああして毎日顔を見せに来ているのよ。

あの子はあまり、乗り気じゃないようだけどね。」

「クラスって、あのエルフ？」

「ええ。　クラスィーヴィが本当の名前なんだけどね。　本当の意味で英雄よ。　魔王を倒した一人で、レジャンドと共に魔獣討伐にも貢献した。　性格が合わないんだけど、どうも巡り合わせがパパに近いらしくて、しょっちゅう顔を合わせるのよね。」

そう言って苦笑いを浮かべる。

クラスィーヴィにとって、アラムは天敵に近い。

強い敵と戦う時、必ず味方が敵にいるのだから仲良く出来る筈もない。

聖魔戦争の時は敵の親玉、魔王戦争の時はそのもの魔王として降臨したので直接戦い倒し、魔獣討伐時は仲間として。

世界の節目となるような戦いに、クラスィーヴィが引き寄せられる

ように参加し、画策するのがアラムなのだから当然と言えば当然なのだが……。

「そんな英雄が補佐にいたら、そりゃ、心強いですね。」

「でも、クラスはそういう人間同士の争いに興味無いから。」

「ところで今更ですけど、この町に冒険者の宿は無いんですか？」

「無いわよ。今作っている宿も普通の宿。この国には冒険者の活躍する場所が無いのよ。遺跡や洞窟があるわけでもないし、魔物討伐は騎士が率先してやるし。私達もそれなりに協力しているしね。」

確かに、魔王討伐を成し遂げたクラスイーヴィにその仲間のプリがいるだけで、かなりの戦力になる。

その上あのリヨウと言う若者。

同じ年くらいに見えるが、身のこなしからかなりの手練れなのは間違いが無い。

交易も盛んでなければ護衛もそんなに必要ではないし、確かに出番はないかもしれない。

「さてっと、私は今晚クラスの所に泊まるから、今日はここに泊まって。ちょっと用事があって遅くなるから。」

「そ、そんな追い出すような事できませんよ！」

「あら、私に夜のお相手をして欲しいの？ 命がけになるわよ？」

「そうではなくて、女性を追い出してまで屋根の下に寝たいとは思いません。」

「真面目な性格ねえ。気にしないでいいわ。本当に夜遅くなってしまうし、クラスも一緒だからそのまま泊めてもらうのよ。それにあなた、その辺に寝てると騎士にしょっ引かれるわよ？」

いわくつきな身分だけに、ぐうの音も出ないルーケであった。

80年前と何も変わっていないと言っていたプリの言葉はだいぶ違った。

街道はかなり整備され、行き交う人の数も大幅に多くなっている。

あの時、このくらい街道が整備されていたら、あの馬車のような悲劇は起きなかったのに。

ルーケは改めて、世界に平和は必要だと感じた。

ゴブリンになぶり殺されたあの幼い男の子の、絶望と苦痛に満ちた眼差しは、忘れる事が出来ない。

力は元魔王であるアラムにだいぶ鍛えられ、十分に強くなったと思う。

あとは、この力を生かして英雄になるだけだ。

「・・・それで、ルーケさんは、なんで冒険者に成ろうと思ったんですか？」

「え？」

少女、メレーナの話を聞いているうちに自分の考えに深く沈みこんでいたルーケは、まったく話を聞いていなかった事に気が付いた。

「もー！ 人に聞いておいて、聞いて無いなんて！」

そう言えば、ペイネを出てすぐに何で冒険者になりたいか尋ねたんだっけと思い出す。

「ごめんごめん。 ちょっと、昔を思い出しちゃってね。」

「昔過ぎです。」

「ハハハ・・・。 俺が冒険者に成りたかったのは、世界に平和をもたらしたかったからさ。 シーフギルドの構成員として、養育ててくれた事には感謝している。 でも、非道な行いにはどうしても納得できなかった。 だから、あんな悲劇が起きない世界にしたかったんだ。」

「・・・また、遠大な夢ですね・・・。」

「でも、やる価値はあるだろう？」

「そうですね！ 私もそんな冒険者になりたいな。」

成人したてのメレーナには、なんでも真新しい世界に見える事だろう。

「スライム倒しても有名に成れないですしね。」

「スライム？ あの洞窟に生息する？」

「ええ。ペイネと隣のノウム（南の王国領）の間にある山に、生息する場所があるそうなんです。被害が無いから放置されているんです。ノールススライムって珍しいスライムもいるそうですけどね。でも、所詮はスライムと思われますし。」

「へえ、でも、そんな珍しいスライムなら、有名に成れるんじゃないの？」

「そんな有名に成れるなら、とつくに誰か倒していますよ。なかり昔から住んでいるそうですから。」

「それもそうか。」

それにしても、と、ルーケは思う。

腰にショートソードを差しただけで、普段着と変わらないこの娘。冒険者に成ると言うのは本気なのか冗談なのか。

見たところ、鎧も荷物も持たない手ぶらである。

そんなこんなで半日以上歩き、結局魔物に襲われる事も無く帝都についたルーケは、あまりの変わりように目を見開いた。

まず人の多さ。

記憶にあるライヒに比べ、3倍は多い。

それにあちこちに散見される店。

あの頃は中央にある市場でしか商売できなかったのに、今では建物内に店を構えている人が多く、中央の市場はかなり廃れていた。

そんな市場を横目に見て、懐かしき冒険者の宿に辿り着き、建物を見上げる。

80年前、冒険者を志して来た時は、建物など気にしなかった。

そんな心の余裕などなかったからだ。

その後も特に気にしていなかったから、どこか変わったかと聞かれなくても違いが分からない。

ただ、寂れた感が否めなかった。

そんなルーケに構わず、メレーナは宿の戸を開けて入って行った。

「マスター、いますか？」

宿の主人に手紙を渡すメレーナを一応気にしつつ、ルーケは壁に付

けられた依頼票を眺めてため息をつく。

内容的には80年前と変わらない、ルーケにしてみれば下らない内容ばかり。

だが、その数は半分以下だ。

「ルーケさんはどうするんですか？」

登録し終えたメレーナがそう聞くと、ルーケは首を横に振った。

「・・・俺はとりあえずいいや。暫く旅をする事にする。」

「そうですか？ 宿泊はどうしますか？」

「今日は泊まるよ。」

登録してから別の町で登録し直し、そこを拠点にしてもなんら問題はないのだが、何となくルーケはやめた。

ただ、宿泊費が割高になるのがちょっと難点だが。

「じゃあマスター、二人部屋を一つ。」

愚者の舞い 2-5

「あいよ。」

メレーナの言った言葉にギョツとし、平然と答えるマスターに驚き振り返る。

「ちょっと待った！一緒に寝る気か！？」

「え？ 当り前じゃないですか。」

女性であるメレーナがそう平然と答え、マスターもルーケの驚きように訝しげな顔をする。

一緒にここまで来たとは言っても、見知らぬ二人なのである。

ルーケには信じられないが、二人の態度を見る限り、それが普通に成っているのかもしれない。

（そう言えば、冒険者は異性と気にしてたら冒険者をやってられないって言ってたな・・・。）

「・・・私じゃ嫌ですか？」

物凄く悲しげにそう言われ、慌てて全身で否定した。

「いやいやいやいやそうじゃなくって！」

「じゃあいいますよね・・・？」

見上げるようにそう言われると、ルーケとしては断る理由も無い。

「俺は構わないんだが・・・。」

「じゃあ2人部屋でおねがいます。」

コロツと態度を変えてそう言うのと、宿の主人は物凄く不安そうな顔に成るが、メレーナが平然とそう言うので頷くしかなく、とりあえずメレーナに部屋の鍵を渡した。

「新人だから一応言っておくが、ここは冒険者の宿だ。荒くれ者も多いから、心しろよ。トラブルがあっても知らんからな？」

「はい！父と母にその辺は良く教えられています！」

「まあ、メレーナは慣れたもんだからな。」

そう言うのと、苦笑いを浮かべる宿の主人である。

「ルーケさん、まだ夕飯まで時間がありますが、どこか行きますか？　ある程度なら案内できますけど？」

「そうだな・・・いや、ちょっと一人で出歩いて来る。」

「そうですか？　じゃあ、マスター、私の装備一式出してもらえますか？　点検しないといけないので。」

「あいよ。裏の倉庫だから。」

そう言いながら裏口から店主は出て行き、メレーナも付いて行くが不意に振り返り、

「ルーケさん、夕飯は一緒に食べましょう！　帰って来たら、部屋に寄って下さいね！　あ、そうだ、マスターちょっと待っててね。」
外の主人にそう断わると、メレーナはルーケに駆け寄って来て、そのままの勢いで飛び付いて来た。

「うおっと!？」

「合言葉は『愛してる』ですよ。」

耳元でそう囁くと、メレーナは再び駆け戻って裏庭に消えた。

「・・・なんだそれ？」

ルーケは小首を傾げつつも、宿を出て、町をふらつく事にした。

町の中は冒険者風の者は少なく、その代り傭兵らしい姿が散見された。

ルーケが予想した通り、この町では冒険者はあまり必要とされていないらしい。

依頼の数でなんとなく予想出来たので、別の町に行こうと思ったのだ。

ブラブラとしつつ、結局前と同じく孤児院の方へ来てしまった。

あの少女を預けた孤児院は改装されて、前よりも綺麗に成っていた。それから、プレシヤス邸へと足を向け、門の見える所まで来てから足を止める。

プレシヤス邸とその周辺は、80年前と何ら変わりが無いように見える。

館の主人であるプレシヤスはいるかどうかは分からないが、今更顔

を合わせるのも面倒だし、知り合いがいる筈も無い。

ガードの墓参りでもしようかと思っただが、80年も前に亡くなった守衛の墓など、今の守衛が知る筈も無いだろう。

やはり、80年という年月は、あまりにも多くのものを失わせるに十分だ。

その事を肌身に感じて実感すると、ルーケは宿に戻るべく歩き出し、すぐに足を止めた。

目の前に、見慣れたメイドの姿があったから。

「・・・プリン・・・さん？」

「あら・・・。お久しぶりですの。でも、変な事言ったら殴りますの。」

「うそ・・・なんで??」

「ここで詳しい説明は出来ませんの。館に来て下さいですの。」
そう言うのと、問答無用でルーケを引っ張って行った。

が、驚いたのは守衛である。

「おお!? 珍しいじゃないかプリン! お前が男を連れ込むなんて!?!」

「勘違いしないで下さいですの! ご主人様の弟子ですの!」
プリンが不機嫌そうにそう言うのと、守衛の顔が真顔になった。

「なに? お前がルーケか?」

「無駄話は怒られますの! 通しますの!」

「ああ。急いでな。」

二人のやり取りで猛烈な不安がこみ上げて来るが、プリンは既に推察しているようで、

「ご主人様は今はいないですの。安心して下さいですの。」

「え・・・なんで・・・。」

「あんな馬鹿な事したら、私でも分かりますの。とにかく早く入って下さいですの。」

そう言うのと、問答無用で屋敷に引っ張り込み、客室の一つにルーケを押し込んだ。

「ちょっと待ってて下さいです。 お茶と荷物を持って来ますの。」

そう言うと、返事も待たずにプリンは出て行った。

「・・・な、なんなんだ・・・いたい・・・。」

ルーケは頭の中がゴチャゴチャだった。

80年の年月が経った実感は、あちこち見て分かった。

なのに、エルフのクラスイーヴィならともかく、プリンは全然年を取っていない。

なんだかこの屋敷だけ時が止まっているような錯覚を覚えたが、南の王国の屋敷に再就職したと言っていたではないか？

それに守衛もまったく違うから、時は流れているのだろう。

「あゝ！ わけわからんっ！」

考えれば考えるほど訳が分からなくなり、そう叫んだ瞬間戸が開いて、お茶セットを持ったプリンが荷物を持った男と共に戻って来た。

「忘れ物の荷物ですの。」

そう言って荷物持ちの男を指し示されて見て、それはれいのサーバントだと思い出す。

荷物を受け取ると、プリンはサーバントを人形に戻し、近くのテーブルの上に置いた。

「プリンさん。 あなたは・・・何者？」

「私の正体を知ってどうしますの？」

「どうって・・・。」

お茶を入れつつ、平然と逆に聞かれて戸惑う。

確かに知ったところで何がどうなるわけでもない。

寿命の無い種族も長寿の種族もそれなりにいる。

だが、それらはどれもこれも特徴的な容姿が必ずある。

エルフなら美しくほっそりとした体形で、耳が長く尖っている。

小人族は背が小さいし、ドワーフは横幅がある。

だが、ルーケの知るどの種族にも、人間と全く同じ容姿で長寿の種族はいない。

知らないだけかも知れないが。

「もし私が魔物だったら、殺しますの？」

お茶を差し出しながらそう聞かれて、その可能性がある事に思い至った。

ルーケの師匠は元魔王。

その配下は当然魔物。

人間そっくりの魔物は知識にある限り知らないが、容姿は魔法で変える事が出来る。

それが魔族なら、歩くより簡単に変えられるだろう。

「・・・いや、聞かない方がいいね。君と敵対したくない。」

「それが利口ですの。それと、私の事は誰にも話さないで欲しいですの。じゃないと、私・・・あなたを殺さなければならなくなりますの。」

「物騒な話ですね。ですが、俺はどのみちこの町を明日出て行きます。この町に、俺は居場所が無い。」

愚者の舞い 2-6

ジッとプリンはルーケの目を見詰め、やがて目を逸らしてため息をついた。

「またいつか、どこかで会えるといいですよ。」

そう言うってから改めてルーケを見て、ニコッと笑った。

「縁があれば、また。」

ルーケも笑顔でそう返し、荷物を背負って屋敷を後にした。

その荷物は、ルーケが師匠であるモリオンから貰った装備一式。

異次元へ置いて来たのを、プリンが取っておいてくれたのだろう。

改めて買い直す必要も無くなり、ルーケは改めて心を一新する事にした。

自分が出来事、成せる事、それを念頭に新しい人生を歩む。

そう決意を新たにしたのだ。

冒険者の宿に戻り、部屋に入ろうとしたら鍵がかかっていた。

あれ？ と、思いつつも、コンコンとノックを試してみる。

「だれ？」

「ルーケです。」

「合言葉！」

「・・・愛してる。」

ガチャッと鍵が開き、ルーケはため息と共に戸を開け、キョトンとする。

居る筈のメレーナの姿が無かったからだ。

「早く閉めてください。」

開けた戸の影からそう言われ、ルーケは納得しつつ戸を閉め、硬直する。

「ジャーン！ どうです？ 似合います？」

そこにいたのは、女性用の部分金属鎧を着込んだメレーナだった。

腰には片手でも両手でも扱えるように柄の長く工夫された長剣バスタードソード。

「・・・これは驚いた・・・。」

「へっへえ♪ ママのお下がりなんですけどね♪」

「へえ・・・凛々しいね。 かつこいいよ。」

メレーナはテヘへと照れて笑った。

「さてと、脱いだら食事に行きましょう。 この宿はご飯も美味しいんですよ。」

「へえ。 そう言えばマスターと馴染みみたいだったけど、ご両親と？」

「はい。 このマスターは、うちの両親とパーティ組んでたんですよ。 小さい頃からよく遊んでもらいました。」

「そうか・・・。」

そんな思い出も、俺には・・・。

（いやいかん。 思い出も過去も、俺が選んだ選択で失ったんだ。

誰のせいでもない。）

ルーケは自分にそう言い聞かせ、いつの間にか俯いていた顔を上げギョツとする。

「ちよっと!？」

目の前には下着姿のメレーナ。

「はい？ どうしました？」

平然と振り返るメレーナに驚きつつ、慌てて後ろを向く。

ちなみにこの時代、この大陸に胸の下着はない。

「着替えるなら一言言ってくれよ！」

「ちゃんと脱ぐって言いましたよ？」

「それは鎧だろ!？ 服まで脱がなくても！」

「だって鎧下はゴワゴワしてて。 やっぱり普段着が気楽でいいじゃないですか？」

（完璧に俺、男だっと思われて無いな。）

背後で服を着る物音を聞きつつそう思ったが、もっと根本的な事に

気が付いた。

（そうか、この子はまだ子供なんだ。）

男も女も無く、ただ純粹で子供のままなのだ。

年齢的には成人していても、心が子供のままなら気にはなるまい。

己の愚かさにおかしくなるが、ここで笑ってはまたメレーナに激怒されかねない。

腹筋に力を込めて、なんとか耐えた。

「おまたせっ！」

不意にそう言いながら腕を取られ、ムギユツと抱き抱えられる。

（とはいえ、体は大人なんだからっ！）

なんとも困った旅のお供だと、ルーケとしてはまいるのであった。

翌朝、ルーケはメレーナに別れを告げて、西の王国へ旅立った。

メレーナはペイネ王国お抱えの冒険者に成るため、ペイネに帰らねばならないからだ。

それに帰らないと報酬も貰えない。

ルーケが西の王国へ向かう理由は、そっちなら冒険者を常時必要とされているからだ。

利便上そう呼ばれるが、実際は小国家の複合体であり、西の王国と言う国は無い。

常にどこかで国家間の争いがあるため、冒険者の仕事は山ほどあるのだ。

そういう話を聞いたルーケは、とりあえず向かう事にしたのである。

「ルーケさん！ ペイネに来たらうちにも寄って下さいね！ プリさんだけじゃなく！」

「分かった！ 元気でな！」

宿の入口からそう言って見送ってくれたメレーナが、宿に戻るなり涙を零したのをルーケは知らない。

メレーナが一人の娘として、ルーケを慕っていた事に気が付かなかったから。

一つの恋がこうして終わり、ルーケは新たな地へと旅立って行った。もしルーケがメレーナの恋心に気が付き、共にペイネで過ごしたなら、運命はまた変わっていただろう。

しかし、ルーケには恋よりも、達成したい夢があった。

それが破滅へ向かうと知っていたなら、また、別の運命もあったのだろうか・・・。

渋い顔をして、副所長は目の前の男を見詰めていた。

「どうしても辞めるのか、ロスカ。」

何か月も前からそう言っただけに、今更意思を変える事はあるまい。

そう分かっている、副所長はあくまでそう言った。

ロスカは長年この魔術研究所に真面目に勤務して来た功労者の一人だ。

所持する魔力が低い、普通の魔法使いとしては無能の域なのだが、勤勉さでは追従を許さないものがあつた。

だからこそ、ロスカが冒険者に成りたくて研究所を辞めると言った時、副所長は耳を疑ったものだ。

「今までお世話になりました。しかし、私も魔法使いの端くれなのです。ご理解下さい。」

普通、ロスカ程の年齢になれば、一般的な攻撃魔法、火炎球なら十数発撃てる。

しかし、ロスカは長年の技術向上を持っても、3・4発程度で打ち止めなのだ。

それほど魔力が低いのに冒険者に成る。

ハッキリ言って自殺行為に等しい。

それでも本人がやりたがる以上、無理に止める事も出来ないため、副所長はある条件を出した。

もし仲間が見つかったら、その時は冒険者に成るがいい、と。

なまじ魔力が少ないため、ロスカの知識は相当なものだ。

普通の魔術師が魔法と言う技術をいかに早く、または楽に、または数を撃てるか、そう研鑽するのを、ロスカは知識で補おうとして来たためだ。

もしロスカに魔力が最低でも人並みにあれば、今頃オリジナル魔法を作り上げていたに違いない。

魔法の根本、異界の方程式を読み解いていたこの男なら。

（ルーケめ・・・。）

副所長としては、あの若者を恨むしかなかった。

ロスカに内緒でルーケに会い、ロスカは魔法使いだが魔力が少ないと教えた時、ルーケは笑顔でハッキリと答えた。

「魔力が少ない魔法使いでも良いではないですか。 彼にはやる気と、少ない魔力を補う知識があります。」

あの器なら、きつとロスカを成功に導いてくれるだろうとは思ったのだが。

皮肉なものだ、と、副所長はロスカの手を握り、握手しながら諦めるしかなかった。

愚者の舞い 2-7

ルーケがロスカとパーティを組み、その後、ラテルと言う戦士とフーニスと言う女盗賊と出会いパーティを組み、冒険者として順調なスタートが始まった。

もともと、4人はいつも一緒にいるわけではない。

ルーケ以外はリセ国内に家があるため、必要に応じてルーケが呼び集めるか、情報交換がてら毎日夕食時に集合する事に成っている。

「で、結局お宝は無かったってさ。」

クスクス笑いながらそう言うと、ラテルが渋い顔をした。

「おいおいフーニスよ。 笑い事じゃないだろ？ 俺達だってそんなお宝手に入れられたらこれほどおいしい話は無いんだからよ。」

「ハーレム作れたのにつて？ ばっかじゃないのあんた。 そもそもその面でどうやって女を集めんのさ？」

「金さえあれば顔なんて関係ねえのよ。 お前も入れてやるぜ？」

「冗談。 そんなときゃあたしだって金持ちなんだ。 好き好んであんなの性奴隷に成る気はないさ。」

「しかし、この国には娼婦自体いませんし、この国でそんなもの作ろうものなら討伐されますよ？」

ロスカが非常に真面目な顔でそう言うと、ラテルが吹き出した。

「相変わらず真面目だなおっさん！」

「あんたもおっさんだろう？」

「俺はまだ若い！ それに、この国に限らず西の王国はその辺煩いからな。 北の王国で作るさ。 あそこなら力さえあればなんでも

OKだからな。」

「その力があれば、だろ？」

「あるに決まってるだろ！？」

「どうか。 まだ若いルーケにだって負けるじゃないか、あんた。」

「やめろよ2人とも。獲らぬ狸の皮算用は空しいぜ。それにラテル。そう言ったものを作るなら、南の王国だろ。あそこなら奴隷もいる。」

「馬鹿言ってるんじゃないよルーケ。何でも言う事聞く奴隷なんて面白くもねえ。」

息が合ってるんだか合っていないんだか、と、ルーケとしては心配にもなるが、これが戦いの場面に成ると、ピタリと合うのだから不思議だ。

鋭い目つきに抜群のスタイルを誇り、動きやすさをとことん追求したため露出が多いが、フーニスのシーフとしての技能は一流だ。二十代半ばで、ショートカットの金髪、猫のように静かに俊敏に動く。

ラテルは、今や標準的な剣、バスタードソードを装備し、プレートメールを着込む重戦士。

ちょっと品格に欠けるところがあるし、女とギャンブルと酒が大好きではあるが、その辺は普通の戦士なら大概好きだから特におかしくは無い。

ガツシリとした体形で、角刈りにした黒髪の三十路だ。

ロスカは中年の魔術師で、肩くらいまでの長さの茶髪、瘦身長身で体力があまりないのが欠点だ。

魔力もあまりないが、知識は豊富だ。

冒険者として、色々な冒険が出来ると言うだけで嬉しいのだろう、ロスカはいつも穏やかに、笑顔でラテルとフーニスの言い争いを眺めている。

実際、親子ほども年が離れているので、やんちゃな子供に見えてい
るのかもしれないが。

「ところで、何か仕事は入ったか？」

「残念ながら、たいしたものはない。とりあえず俺は、明日荷物の宅配を頼まれているから不在するよ。」

「じゃあ、あたしはギルドで小遣い稼ぎでもしてようかね。」

そう言うフーニスは、ニヤリと笑う。

ギルドで後輩に指導すると、一日の生活費くらいは稼げるから、その事を言っているのだろう。

ちなみにこのリセは、優秀な忍者と侍で名を売っている古い国だが、シーフギルドもある。

忍者は王家専属で、主として敵の暗殺や護衛など影の任務につくため、その他の裏業務はシーフが賄っているのだ。

そう言うと、シーフは悪役に聞こえるかも知れないが、シーフと忍者と王家、三者の仲は悪くはない。

忍者の戦闘力は下手な戦士より遥かに高いが、いかんせん人数が少ない。

他国などの情報はシーフギルドの方が優秀で、違法行為さえしなければ王家も忍者も黙認しているからだ。

それに、忍者も国内の平穏のために治安活動しているが、シーフも縄張りを守るために活動する。

必要悪として存在を認められているのだ。

「俺はどうすっかなあ。 おっさんは？」

「私は本でも読んでおりますよ。 昨日、新しい書物が手に入りましたので。」

「へえ？ 魔術書か？」

「残念ながら。」

そうラテルに答えつつ、ロスカは苦笑いを浮かべる。

魔術書は貴重な物で、一個人で買えるような物ではない。

金額も高いが市場で売られる事も無いからだ。

そんな仲間達のやり取りを聞きつつ、ルーケは明日の仕事を考えないようになっていた。

ずーずーと、ルーケの吐く荒い吐息が木々に吸い込まれて消え失せる。

だが、吐いている本人には耳障りなほど煩く聞こえる。

「なんだ、もうばてたか？」

気軽に言ってくるオーガーのような肉体を持つ依頼主は、荷車を曳いていないだけに余裕があった。

「し……し……しょ……う……。」

「なんだ？」

ルーケは一生懸命息を整えると、嘔みつくように怒鳴った。

「なんでこんな大荷物なんですか！？ 人力ではなく馬で曳けばいいでしょう！？」

「馬が可哀相じゃないか。」

真顔で即座にそう返され、一瞬言葉に詰まる。

「俺って、馬以下……？」

「それに、馬や牛では都合が悪いんだよ。」

「だったら師匠も手伝って下さいよ！」

「依頼主をあてにするな。それに、お前をそんなやわに鍛えたつもりも無い。」

やわもなにもないだろう！ と、叫びたくもなるが、破格の依頼料だけに文句も言えない。

元魔王でルーケの師匠、冒険者・行商人の時はこのいかつい体格に平凡な顔の中年、名を冒険者の時モリオン、行商人の時プレシャス。本当の名は、世界を作った双子の神の弟、始原の悪魔アラム。

彼が接触して来たのは、冒険者として登録した直後だった。

「ここにいたか。 お前に依頼だ。」

「げっ！？ 師匠！？」

「数日後、荷物がある場所に運びたい。 力があって信用できる相手にしか頼めない内容だ。 受けるか？」

「……断ってもいいの？」

「だめだ。」

「最初から選択肢無いじゃないですか！？」

「あるわけないだろそんなもの。」

「じゃあなんで聞くんですか！」

「気分の問題だ。もし死んでも気にならないじゃないか。」

「ええっ!?!? そんな危険な荷物運び!?!?」

「マスター、これ仲介料。」

そう言いながら、カウンターにいたマスターの目の前に、ドンと袋を置く。

「これが前金。」

ズシッと、手に袋を落とされる。

「依頼料は1Gだ。口止め料も含んでいる。マスターも口外無用にな。」

二人が揃って目を白黒させるのもおかしくはない。

1Gとは、普通の豪邸が建てられる金額なのだから。

愚者の舞い 2-8

ともかく、破格の金額の依頼である事に間違いはないのだが、内容が酷過ぎた。

グラン大陸は北・西・東の王国領土の9割が山岳地帯で、南の王国は逆に平地が多い。

ようは、山岳地帯に囲まれた盆地の大陸なのだ。

急斜面こそ無いものの、常に上りばかりの道を、ひたすら荷物満載の荷車を引っ張っていれば文句も出よう。

しかも荷物の半分以上が酒樽とくれば、平地でも引くのはきつい。

「ししょきゅうけい。」

「・・・もう少しだし、まあ、いいか。」

「ふええ・・・。つ・・・疲れた・・・。」

荷車が勝手に下って行かないように横にして止め、ルーケは近くの木に寄りかかってへたり込む。

「ところで師匠お、どこにこんな荷物運ぶんですかあ？ この方角だと、隣の町まであと一日くらいかかりますよお。」

「だからもう少しだって言ったじゃないか。ちゃんと人の話を聞いておけ。」

「もう少しって、何もないじゃないですかあ。」

「いいから黙って着いて来い。滅多に飲めない新鮮で冷たい水くらい飲ませてくれるだろうから。」

「新鮮な水う？」

ありがたみがあるのかどうかわからないが、喉が渴いているのは確かだ。

ルーケはため息をつく、諦めて立ち上がった。

「じゃあ、サッサと行きますか？」

「そうしてくれると助かるな。相手は気が短いんだ。」

「気が短い・・・？」

荷車を再び引きながら、ルーケは相手が何者か考える。

こんな山の中でもうすぐと言うからには、訳ありの人間か魔物が相手だろう。

（人間なら犯罪者などで、隠れ住むしかない人物であり、魔物なら・
・なんでもありのような気もするな。しかし、わざわざ荷物を
運んで会いに行くほどの相手であるなら、トレントである確率が一
番高いだろうけど・・トレントって気が長い筈だよな。）

どっちにしろ、人間達と交われないのだから、口止めされる筈だと
納得する。

トレントとは、数千年生きた樹木が魂を昇華させた存在で、神みた
いなものだ。

物凄くのんびり屋で、「おはよう。元気?」「元気だよ。」程度の
会話を、一週間かけてすると言う話もあるくらいだ。

その代り、怒らせると物凄い力を発揮し、町一つなど簡単に滅ぼす
そうな。

（って事は俺、明日までにリセに帰れるのか?）

そうも思うが、今更引き返すわけにもいかないし、そもそも前を歩
く人物が許してくれる筈も無い。

（心底帰ってえ・・・。）

そう思った瞬間、モリオンが立ち止った。

「ここだ。」

「・・・は?」

そこは何の変哲も無い、左右を木々に囲まれた山道のと真ん中。

（・・・あ、そうか。ここで待ち合わせなんだ。）

そう自分で結論を出して納得した瞬間、モリオンがおもむろに左側
にある木に向かって歩き出し、ぶつかると思った瞬間、木に入り込
んで消え失せる。

「・・・ええ!? 師匠!？」

ビククリして叫んだ瞬間、木からヒョコツとモリオンが顔を出した。
「騒いでないで早く来い。人目についたら意味が無いんだ。」

何か意味がある筈だと理解し、とにかく慌ててモリオンの消えた木に近寄って、腕を伸ばして手を触れさせる。

その瞬間、視界いっぱいに広がっていた木が消え失せ、代わりに見晴らしの良い崖っぷちが目の前に広がっていた。

「・・・なんとお!？」

振り返れば道は無く、ただ木があるだけ。

前を向けば、あと3歩も歩けば谷で、物凄く見晴らしがいい。

「なにボケっと突っ立ってんだ。早く来い。」

振り向けば、左の崖に沿って一本の丈夫そうな道が伸びており、突き当りに洞窟の入り口が見えた。

何が何だか分からなかったが、そこに会う人がいるのだと思い、ゴールは近いと安堵しつつ荷車を引っ張って後に続いた。

目の前に置かれた、バレーボール程の大きさの水晶玉。

その中に、木の中へ消えて行くルーケと荷車が映っていた。

「シヨコラ様。」

それを間近で見ていた少女が振り返ると、シヨコラは艶然えんぜんと微笑んだ。

「でかしたポシス。褒めてやるよ。」

その言葉に、少女は心底嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「それで、どうなされますか？」

「そうだな・・・。」

シヨコラは暫く顎に指を当てて考え込むと、やがて、ニンマリと笑った。

洞窟の中は暗い。

それが普通だ。

外にいるように明るく、しかも荷車が通るので精一杯の幅しかかったすぐ先に綺麗な神殿が広がっているなど、非常識と言うべきか予想外と言うべきか悩める。

「あれ？ 魔王様だ。」

「おう、メレンダ。荷物を持って来たぜ。」

「わぁーい！ ルパちゃん！ クーナちゃん！」

とても外見に似合わぬ子供っぽさで、メレンダは仲間を呼びながら奥に走って行った。

「師匠・・・ここは？」

「リセを守護する竜がいるって話を聞かなかったか？」

「じゃあ、ここが・・・？」

「そうだ。銀竜アクティースの神殿だ。訳あって結界の中に住んでいるのさ。表向きは黒竜が守護している事になっているがな。」

そう説明し終えた時、メレンダが二人の仲間を連れて現れた。

「わーい魔王様！ 今日は何を持って来たんですか！？」

「これ、落ち着きなさいルパさん。お久しぶりでございます、始原の悪魔様。」

「お前らなあ、俺はもう魔王じゃないっての。とりあえず荷物を受領してくれねえか？」

「はい。あら？ 始原の悪魔様・・・そちらの方は？」

クーナの疑問に、ルパとメレンダもやっと気が付いた。

「ぎゃー！ 男っ！ 男よお！！！！」

「落ち着いてルパちゃん！！ 蠅叩きならここにあるからっ！」

「そんなんじゃ駄目よ！ 火！ 火を！！」

「無理よルパちゃん！ まだ吹けないもんっ！！」

猛烈にパニックになったルパとメレンダを見て、ルーケはガックリとする。

「俺って・・・馬の次は蠅以下か・・・？」

「おだまりっ！！」

クーナの一喝で、ピシッ！ と直立不動の姿勢で硬直する二人。

「お騒がせしました、始原の悪魔様。それで、あの方はどこの誰様ですか？ アクティース様の不在間ゆえに、勝手に男性を神殿内

に入れる事は出来ませんが？」

相手が誰であれ揺るがない精神力は大したものだと、ルーケは感心する。

（だけど・・・美人が怒ると、滅茶苦茶怖いなあ。）

「そう怒るな。アクティースに会わせようと連れて来たが・・・。
珍しいな、留守か。」

「はい。」

「おいルーケ。お前は外に出ておけ。ここは女の園だから男は駄目だってよ。」

「・・・師匠は男じゃないと？」

「俺は特別だからいいんだ。早く出ないと、このクーナに焼かれるぞ。」

愚者の舞い 2-9

そう言いながらポンと頭を叩かれ、クーナがモリオンを睨むが本人は全く意に介さない。

ともかく、焼かれると言う意味が分からないが、わざわざ相手を怒らせる事も無い。

ルーケはガックリしつつも神殿の外へ出て、

「この辺ならいいですか？ それとも森に戻っていきましょうか？」と、問いかけると、クーナが駆け寄って来て、その手を掴んで共に視界から消えた。

「最近の若い奴は大胆だな。 女が男を物陰に連れ込むとは。」

「「クーナちゃんはそんな事しません！」」

二人の美女が同時にそう言い、モリオンは苦笑いを浮かべた。

「まあ、真実はともかく、早く荷物を確認してくれ。 不足した物があれば、次回持って来るからさ。」

「あ、そうだった。」

「足りない物ってなにかあったかな？ ルパちゃん。」

二人はなんだかんだと騒ぎつつ、荷物を次々に奥へと運び込んで行く。

「酒樽はどこに置こっか？ 食糧庫？」

「それでいいと思うよ？」

そう言いながら、二人はそれぞれ空のお盆を持つように軽々と、片手に一つづつ酒樽を載せて奥へと運んで行く。

ちなみにこの酒樽、普通の人間なら二人で持ち上げるのがやっとの物体である。

「ところでお前達。 最近武術の練習しているんだって？」

「はい。 私達は普通の武器ではもたないので。」

「このパワーを生かした方がいいもんね。」

「へえ。 ちょっと見せてごらん。」

「えー。 まだ、お見せするようなものじゃないですよ？」

「いいから見せてみ。 もし俺から1本取ったら、いいもんやるぜ。」

「「いいもの？」」

2人は顔を見合わせると、小首を傾げた。

「欲しい物を、出来るだけ揃えてやろう。 どうだい？」

2人としては特に欲しい物は無いのだが、そう言われると興味が湧く。

「手加減は無用でいいぜ。 竜巫女のお前らに力いっぱい殴られても、俺は平気だし。」

そこまで言われ、なおかつ本当に平気な相手である。

2人は興味津々でかかっていた。

クーナはルーケの手を引っ張って、森への入口付近まで戻って来ると、手を放すと同時にクルッと振り返りつつ頭を深々と下げた。

「申し訳ありません。 ですが、あまり男性の匂いを神殿に残すと、アクティース様がお怒りになれますので。」

「そうなんだ。 でも、そこまで気にしなくていいですよ。」

ルーケが苦笑いを浮かべてそう言うと、クーナは頭を上げた。

真黒い髪は腰の辺りまであり、どこかの貴族か王族だったのかもしれないと思わせる、高貴な雰囲気身をまとった美しい娘。

簡素な巫女服ながらスタイルは抜群で、社交界などに着飾って出たら、主賓より目立つ事間違いなしだ。

少しきつい目つきと顔立ちだが、美人である事に間違いはない。

だがそれゆえに、怒った時は物凄い威圧感がある。

きっと、あの二人もそんなクーナだからこそ、頭が上がないんだろうなど、ルーケは推測した。

「あの、そんなにジロジロ見ないでもらえますか？」

少し恥ずかしそうにクーナに言われ、つぶさに観察していた自分が付いた。

「あ、すいません。ついその・・・綺麗だったもので。」

一瞬キョトンとした後、クーナはクスクスと笑った。

「お世辞を言っても何も・・・あ、そうだ。少し待っていて貰えますか？」

「え？ ああはい。どうせ師匠が帰ると言わないと、俺も帰れないですから。」

クーナは一旦神殿に駆け戻って行くと、やがてコップと水差しを持って帰って来た。

「あれだけの荷物を引いて来られたから喉が渴いているでしょう？
どうぞ。」

そう言いながらコップに水を注いで差し出され、ルーケは遠慮なく受け取って飲み干した。

「うお！？　なんて冷たい水なんだ！　地下水でも汲み上げているのかい？」

普通、こんな山中では川の水を汲んで来て、瓶などに溜めておくものだ。

当然、水は温くなる。

神殿がどういう構造になっているか知らないが、神殿の中に水を引き込む事は不可能ではない筈だが、そんな近くに川が流れている様子はない。

そうなると井戸の可能性が高いのだが・・・。

クーナは微笑みながら事情を説明し、ルーケは納得した。

考えてみれば結界の中なのだから、何があってもおかしくはない。ましてや世界を作った人物の作る結界だ。

「ところで、クーナさんはなんでここに住んでいるんですか？」
「・・・？　どういう事ですか？」

「顔立ちから、この大陸の人間ではないでしょう？　三人とも。」

「ああ、そう言う事ですか。私達はアクティース様に命を助けられたのです。その恩返しも兼ねて、お仕えしているのですよ。」

「へえ・・・。」

「すみませんね、立ち話で。今度来られた時のために、椅子くらい用意しておきます。」

「いえいえ、そんな。こんな山の中では、それこそ安易には出来ないでしょう？ 気にしないでいいですよ。それに俺は冒険者ですから。」

「冒険者……。」

クーナはそう呟きながら、眉をしかめた。

「どうしました？」

「いえ、冒険者の方とは何度か……。」

そう言われて、ルーケは何となく事情を理解した。

中級である地竜・翼竜などを倒しただけで、冒険者としてはドラゴンスレイヤーの称号を手に入れられるのだ。

人の手に負えないと言われる銀竜なら尚の事、腕自慢の冒険者が命を狙う事だろう。

称号だけではない。

竜は普通、莫大な財宝もため込んでいる。

地竜や翼竜でも一生遊んで暮らせる財宝を貯めているのが常なのだ。知能が高い銀竜ともなれば、その財宝の価値も計り知れないに違いない。

「俺はそんな気が無いので気が付かなかったですが。大丈夫です。

あなた達に危害を加える気はありませんよ。俺は生きてやりたい夢がありますから。」

「それが本当ならよろしいのですが、皆さんそう言いますから。でも、あなたの夢とはなんですか？」

「俺は大陸を統一し、平和をもたらしたい。金や名誉が欲しくてやりたいわけではありません。俺は、シーフギルドで育てられました。だから、人の醜さや残酷さを見て育って来ました。あんな世界は、無くさないといけない。だから、俺は平和を望みます。その過程で、竜を倒す必要は無いでしょう？」

本当にそうだろうか。

そう疑問も感じるが、真っ直ぐな目をした青年だけに、クーナは信じたいと思った。

「おいしい、ルーケ。いつまでクーナといちゃついてんだ。帰るぞ。」

「ちょっと師匠!! 人を追い出した拳句に待たせておいてその言い草は酷いですよ!？」

「じゃあないだろ。死にたかったら追い出さねえがな。ほれ、帰りは空身だ。存分に引け。」

「ったく、人使いが荒いんだから。」

ブツブツ文句を言いながら神殿へ向かうルーケに、クスクスと笑いながら着いて行き、神殿の入口から二人を見送った。

そして神殿に戻ると・・・ぐったりとした2人を発見し、驚いた。

「どうしたの!？ 2人とも!!」

「「っ・・・強い・・・。」」

そう同時に言って2人は力尽き、ガックリと倒れ伏した。

愚者の舞い 2-10

プリがスライムの里に用事があると言うので付き合い、その帰り道に山賊に襲われた馬車を救出し。

その後、完成した宿の祝賀会がささやかながら開かれた。

プリとリヨウ、それにクラスイーヴィ。

それぞれ参加したが、プリもクラスイーヴィもいつものように浮いた存在だった。

クラスイーヴィはエルフなだけに、最初こそ真新しい存在として目立つが、見慣れると正直、関わりたくない人物なのである。

クラスイーヴィは特に人を遠ざけたりしてはいないのだが、いかんせんぶつきらぼうで無愛想すぎる。

しかも言い方がきついので、次第に人が離れて行ってしまうのだ。

この町に住むまっとうな人間でクラスイーヴィと関わるのは、メレーナ達、レジャンドの子孫だけしかないのが現状だ。

そしてプリは、どこをどう見ても人間にしか見えないのに外見がまったく変わらない。

リヨウもそうだが、呪いで年を取らないのだと説明しても、やはり気味悪がられる。

特に2人とも美人だったり可愛かったりするから、女性は嫉妬する。リヨウは別の意味で浮いた存在なのだが、本人が気にしない上に祝宴などそっちのけで既に姿は無い。

今頃どこかの馬小屋辺りにでもしけこんでいる事だろう。

更に、2人は国家特別顧問のような存在でベテラン冒険者だ。

困った時には頼りに成るのだが、怒らせると後が怖いと言うのもある。

そんなわけで、2人は祝宴もたけなわな頃、早々に帰宅していた。

丁度2人が着替え終えた頃、リヨウも合流し、3人揃う事になった。

「で、なんで毎回毎回私の家に集まるのだ？」

不満そうに聞こえるが、それでもクラスィーヴィは嫌がっているわけではない。

「そう言えばなんでかな？」

毎度の事ながら、プリも改めてそう考えてみる。

「そんなの簡単だろ。クラスが俺達の家に来ないからだ。」

「あ、そうか。」

考えてみれば簡単な話であった。

「それで、今度どうするんだい？」

実を言うと、大まかな事は決めてあった。

次の冒険を最後に、パーティは解散すると。

プリには長らく誰かと行動する事を避けたい理由があったし、クラスィーヴィはその理由を詳しく知っていた。

そして、プリはその事を、リヨウには秘密にしておきたいと言う事も。

かつて知ったるなんとやらで、プリが勝手にお茶を淹れて持ってきた。

「はい、クラス。」

「ありがとう。」

「はい、リヨウ。」

「サンキュー、プリ。ところで、プリって人間だよね？」

「ど、どうしたの？ 急に。」

思わず笑顔が引きつるプリである。

「だって、すんげえ長生きじゃん？ 俺達出会ってから30年経ってるんだぜ？ クラスが変わらないのはエルフだから分かるけど、プリもまったく変わって無いじゃないか。俺みたいになにか呪いでもかけられているのか？」

実はこのリヨウ、30年前にプリとクラスィーヴィと出会う直前、マギサという魔女に呪われているのだ。

それも、不死と獣人化という、白魔法の達人プリでさえ解除出来ないほど強力な呪いだ。

もつとも、普通のワーウルフは感染するが、リヨウの場合、呪いなので感染はしない。

しかし、そんな事他の人には分からないので、もしばれたら確実に狩られるだろうが。

「・・・そうね。呪いと言えば呪いかもね。」

プリはそつと目を逸らし、寂しげにそう言うと言った。

「かもって。」

「女には秘密が多いのよ。フフフ。」

そう言って笑うプリは、今にも消えてしまいそうなほど、影が薄く感じられた。

「確かに。私も隠している事はあのフォスルほどある。」

クラスイーヴィがそう言うのと、おもむろにリヨウは席を立ち、窓を押し上げてフォスルを見上げた。

「・・・なるほど、雨が降るわけだ。」

いつの間にか、外は雨が降り始めていた。

「ん？　　どういうことだ？」

「あの仏頂面のクラスが冗談イツ!!!!!!!!!!!!!!」

「刺し殺すぞ。」

「ダガーぶん投げるのは刺すって言わんのか!?!」

足に突き刺さったダガーを指差しつつ、リヨウは憤慨する。

「その程度避ける。ワーウルフだろう。」

「無理言うなっ!!」

「まあまあ。そう怒らないの。クラス、寝室ちよつと借りるわよ。」

クラス「・・・わかった。」

クラスイーヴィはプリが何をしようとしているのか察し、ため息と共にそう答える。

リヨウ「・・・!?!　まさか!?!」

プリ「痛みを忘れるおまじないをして、あ・げ・る♪」
リヨウ「!?!」

そう言いながら急に抱き付いて来て見上げるプリに、リヨウはドギマギした。

今まで何度か夜這いしては撃退されてきたのに、なんで急に？　と、疑問も浮かぶ。

押し付けられるかなりでかい胸の弾力に、不覚にも思考が真っ白になる。

そしてプリは背伸びして、そっとリヨウに顔を寄せると。

ちよっといたずらっ子みたいな笑みを浮かべてから唇を合わせて来た。

プリの柔らかい唇の感触に、リヨウはもう、何がなんだか分からない状態だった。

ギョツと無意識にプリを抱き返しながら、脳裏に浮かんできたのは、幼くしてリヨウを庇って亡くなった、幼馴染のピロスの笑顔。

ちよっと裏切ったような気持ちになって、リヨウは思考が戻って来た。

だが、動揺は収まらない。

なぜ急にプリから迫ってきたのか？

ずっと前から俺の事を好きだったのか？

永遠に死ねない者同士の寂しさゆえか？

などなど、答えの出ない疑問が次々浮かんでくる。

ただ一つ分かっているのは、プリが先もってクラスィーヴィにベツドルームを借りる旨を伝えてある事だ。

リヨウ（と、言う事は。　据え膳食わねば男がす）

ゴンッ！　と、突然強烈な激痛が後頭部に走り、リヨウは一瞬意識が飛ぶ。

完全に無防備だったためにモロに食らった。

だが、意識が戻るなり周囲を見回す。

襲撃かと思ったのだ。

だが、呆れた顔のクラスィーヴィ以外、部屋には誰もいなかった。ではクラスィーヴィがやったのか？　と、険しい表情で一瞬睨んで

から己の馬鹿さかげんに気が付く。

クラスイーヴィの位置からではリヨウの背後に回れない。

ついでに彼女は、さっきから一步も動いていない。

じゃあ誰が？ と、思ったとき、バンッ！ と、勢い良くプリが寝室に駆け込み鍵をかけた。

リヨウ「・・・プリ???」

クラス「やめろ。行くんじゃない。」

なにがなんだか分からず、ともかくプリの様子を見ようと寝室に向かいかけたリヨウを、クラスイーヴィが制止する。

リヨウ「なんでだよ？」

愚者の舞い 2-11

クラス「さっきも言ったが、女には女の秘密がある。なんでも知ろうとしないことだ。」

リョウ「そういう問題か!?!」

クラス「げんに痛みを忘れているではないか。効果はあっただろう?」

リョウ「あ、そう言えばってそんな問題でも無いだろ!?!」

実際、ダガーはいつの間にか抜け落ちて、怪我はほぼ完治している。もっとも、キスが無くてワールフの回復力なら普通の事なのだが。

クラス「そもそも善行積みねばならん身の上で、女性に手を出しすぎなのだお前は。ボニート様が泣くぞ。ピロスと言う娘もな。」

ピロスは女神ボニートを信仰する神官の娘だった。

そのピロスが幼いながらも彫ってプレゼントしてくれた木の神像。それと、たまたま転がっていた水晶玉が加わり、女神ボニートが降臨した。

「常日頃、善行を積むのはもちろんですが、長い時を経た後、世界を破壊が襲うでしょう。その時、立ち向かう者に協力しなさい。

あなたの努力次第で天界も認めるでしょう。さすれば、私も呪いを解く事が出来ます。」

そう言って、獣人化を抑えるネックレスを渡してくれた女神。

おかげで満月を見ても変身する事は無くなったが・・・。

プリはリョウを突き飛ばし寝室に駆け込むと、グツと全身に力を込めた。

ほどなく背中が盛り上がり、グニョンとスライムが出て来てボトリと落ち、そのスライムが盛り上がって人の形になり、もう1人のプリが現れた。

もつとも、こちらはまだ少女の姿であったが。

プリの正体はノーブルスライム。

知能は人並みにある特殊なスライムで、始原の悪魔の娘の1人である。

「ふう。名前を決めなきゃね。なにがいい？」

「ん。フィリアでいいやママ。」

フィリアはそう言うのと、勝手に自分で木製の窓を押し上げると外に出た。

シトシトと降る雨に、あつという間に濡れそぼるがフィリアは気にも止めない。

そもそもプリもフィリアも、服に見えるが自分の体を変形させているだけだし、正体がスライムだけに雨に濡れても気にもならない。

「あたしは見られない方がいいんでしょ？ 里に行ってる。」

「ごめんね。」

フィリアはプリの記憶を完全に引き継いでいるので、プリが何を望んでいるのか理解していた。

「あたしにはママの考えに賛同は出来ないけど、後悔しないようにね。」

「余計なお世話よ。気を付けてね。」

フィリアは片手を挙げて返事とすると、そのまま左手の指先を変化させて傘にし、歩き去って行った。

その姿が見えなくなるまで見送ってから、プリは窓を閉め、隣の居間で飛び交う怒声に気が付いた。

プリ「あら。またやってるの。好きねえ、あの二人。」

原因が自分にある事を、既に忘れているプリである。

ともかく、本格的な戦いになる前に止めようと戸を開くと。

「お前などそのまま永遠に彷徨うがいい！！」

「ハッ！勝手に自分で治すわ！！」

「ハイッ！そこまでっ！」

「まったく、これだから人間の男はダメなんだ。」

「なんだとずん胴!!」

「やめなさいってば。」

「……。」

珍しくクラスィーヴィの瞳に殺気が漲り、無言で腰の剣を抜く。

「やろうってのか？　ハリエルフと違って俺は不死だぜ。勝てる
と思っているのか。」

「言わせておけばよくもずん胴などと。　たとえボニート様が許し
ても私が許さん。」

「そうかい。　で、どうすんだい。」

「微塵切りにしてくれる。」

「やめなさいってば!」

「やれるもんなら」

ゴキッ。

ギョツとしたクラスィーヴィの眼前には、既にプリがいた。

「喧嘩両成敗。」

避ける余裕さえ無く、クラスィーヴィも昏倒させられたのであった。
プリは白魔法だけではなく、拳闘^{けんどうし}志の達人でもあった。

ゴキッゴキッと、プリにへし折られた首の調整を両手でしつつ、
調子が戻ってからプリの入れてくれたお茶を一口飲む。

「キャインッ。　あつつつつ……。」

「狼でも猫舌なのか。」

「こっちはワーウルフとは関係ねえよ。　元からだ。」

「そうか。」

そのまま暫く、沈黙が場を支配する。

プリはそんな二人に構わず、窓にもたれてシトシトと降る雨を眺め
ていた。

「雨ってさあ。」

「ん?」

「なんかいいよね。」

「そうか？ 濡れるしムワツとするし、俺は好きじゃないな。」

「プリは雨でも関係ないからそんな事が言えるのだ。今は建物の中にいるからあまり問題はないが、野営中の雨ほど嫌なものはない。」

確かに、と、リヨウもそれは納得する。

雨中では焚き火も出来ないし、深夜に飢えた狼の襲撃など数え切れないだけ経験がある。

それだけ根無し草で旅をしていたのだから仕方がないと言えばそれまでだが、やはり快適な生活をしたいのは確かな願望だ。ただ、プリは雨でも関係ないというのが引っ掛かったが。

「ところで、仕官の話はどうなったの？ ここ数日、騎士様の姿が見えなかったようだけど。諦めたの？」

プリが何気に聞くと、クラスィーヴィはいつもの無表情のまま。

「ああ。諦めて受けた。」

「やっぱあき・・・マジか？」

ずっと断り続けて来た、帝国宮廷魔術師への仕官。

なんの心境変化か分からないが、引き受けたらしい。

もつとも、次の依頼を受けた後、解散する予定だったから、そのためかもしれない。

「私達はこの国の建国に関わったが、代が変わり、疎んじられているからな。」

それはプリも感じていた。

今の王家、つまりモルレの子孫だが、ハッキリ言って2人に友好的ではない。

特にクラスィーヴィは、いつも通りの無表情のままズバズバ言いたい事を言うので、嫌われていると言っても過言ではない。

だが、先祖代々のご意見番なので、余程の過失でもなければクビにも出来ない目障りな存在なのだ。

もつとも一番の理由は、現存する騎士で二人に勝てる者がいないというのもあるだろうが。

この二人が暴れる事は無いのだが、下手に怒らせて暴れられたら勝てる者がいない。

それは十分脅威である。

「でもなんで仕える気になったんだ？ あれほど仕官するのを嫌がっていたじゃないか。」

「先日、私は鬱陶しいから、直^{じか}にもう来るなど断りに行ったんだ。

だが、大陸を統一し、平和をもたらしたいと言う熱意に、頷かざるをえなかった。」

なるほど、と、2人は納得した。

魔物をこの世からせん滅する事は不可能に近い。

しかし、人間同士の争いを収める事が出来れば、各段に平和は近づく。

現状では、町と町を繋ぐ街道は、馬車が通れる広さがあるとは言っても獣道に毛が生えた程度の代物だ。

愚者の舞い 2-12

街道というものは、何も商人や旅人だけが通るわけではない。軍隊だって通るのだ。

街道を広げれば、それだけ多くの軍勢が通行できるようになるし、食料などの運搬も安易になる。

国と国が争う限り、街道の整備など夢のまた夢だ。

現在、帝国が支配下に置いた4つの町は、大々的に街道整備が行われ、内乱などの鎮圧に大いに貢献している事実もある。

「そっか。クラスは次の仕事を決めたか。俺はどうしようかな。プリは別の奴らと組むって言ってたよな？」

プリが申し訳なさそうに頷くと、リヨウは大きく背伸びした。

「俺は気ままに旅暮らししようかな。暫くは、だけど。」

「いい加減、お前もどこかに落ち着いたらどうだ？ お前の行動を見る限り、善行とはほど遠い。いい加減、ボニート様も愛想を尽かすのではないか？」

「何言ってるんだクラス。ちゃんと自殺とかしないように、良い思い出になる様に付き合ってるんだぜ？ 幸せになれるひと時を提供しているんだから善行だろ？」

「そのどこが善行だ？」

「はいストップ。2人ともすぐエキサイトしちゃうんだから。」
プリが笑いながらそう言うと、リヨウとクラスィーヴィはため息を吐いて口論を止めた。

「とりあえず、雨が止むまで足止めかな。」

「そうだな。わざわざ濡れて行くほど金に困っているわけじゃないし。」

リヨウは国の争いや世界平和に興味はない。

女の子と楽しく時を過ごし、眼前の邪魔を排除できればそれでいいという考えだからだ。

プリは元々永遠の命があるために、長らく誰かと一緒にいる事を避けていた。

人間の姿でいる以上、定まった地に定住する事は危険だからだ。

今回はリヨウの呪いの事もあり、また、師匠として拳闘志技術を教えていた事もあり、結果、30年もの付き合いになってしまった。

いい加減潮時だと考えていたのだ。

リヨウには秘密にしていたが、ノーブルスライムはハイエルフと一緒に寿命が無い。

正体をなんとなく知られたくなくて、黙っていたが。

「そう言えば・・・ やっぱそうなのかな。」

不意に思い出し、リヨウがそう呟くと、プリが不思議そうに聞いて来た。

「なにが？」

「クラスさ。」

「私がなんだ？」

「雨の時、クラスって不機嫌な事が多いじゃん。最初はせ〇りのせいかと思ってたが、エルフだからなんだな、と。」

「・・・何が言いたい？」

「やっぱ光合成できないから不機嫌なんだなと。」

ズダ〜ン！ と、意表を付かれ過ぎてプリと珍しくクラスィーヴィまで椅子から落ちるほどコケた。

「私は植物か!？」

「どうしてそういう発想になるのよ!!！」

二人揃って、上半身だけ即座に起き上がり叫ぶ。

「あれ？ 違うのか？ エルフって植物の妖精だろ？ 子供だって種撒いて水かけると生まれてくると聞いたが。」

「あんな。それだとハーフエルフはどうやって生まれてくるのだ？」

「エルフもドワーフも小人族も、みんな人間と基本的な体の構造は違わないんだけど。」

呆れ果てたと言わんばかりにそう言いながら、2人は椅子を直して座り直す。

「ええ！？　そうなのか！？」

「当たり前だ。根本的な違いは、人間は自然界で作られたが我々妖精は妖精界で生まれただけに過ぎん。大体、今まで何度も人の水浴びを覗いておいて気が付かんのかお前は。」

「ごめん。プリしか見て無かった。」

「・・・。」

即答にムカついて、無言で睨み付けながら剣の柄に手をかけるクラスィーヴィである。

「わあまでまで！　クラスはその、なんちゅうか、人外の美しさがあつて。水が弾けた時なんて、本当に綺麗で妖精なんだなあって思つて、性的対象にならなかつたんだ。」

そう言われると、流石にまんざらでもなく、顔が赤くなってしまう。

「あ、照れてる。」

「うるさい。そもそも私は性的対象にならんと言っておきながら、何度夜這いしに来たのだお前は。」

「いやゝ寝顔が可愛くてつい。」

「・・・プリ。」

「うん。止めない。」

満面の笑顔でプリがうなづいた瞬間、リョウは脱兎の如き速さで家から飛び出した。

「さてっと！　夜更かしは肌に悪からねよっと！　お休みゝ！！」

「チッ。　討ち損じたか。」

本気でやるつもりだった様子に、プリは苦笑いを浮かべるしかかなかった。

数日後、クラスィーヴィとプリは、暗闇の中で杯を交わしていた。二人とも暗視の能力があるので、明かりは必要ではない。

「ところで、お前はどうするのだ？　あいつと一緒に旅を続けるの

か？」

「その気はないわ。だって、私が一緒にいたら、あの子、人生を
楽しめないでしょう？」

「楽しんでいたら呪いは解けぬと思うが？」

「それはそれで、巡り合う楽しみがあるじゃない。」

そう言って、クスクスと笑う。

「私にはお前の気持ちが分かん。あいつを好きになる要素が見
つからん。」

「あら、気が付いてた？」

「付き合いが長いからな。まして、好きになった相手を自由にす
るために別れるなど私には理解できん。」

「だって、一緒になれないじゃない。どんなに好きになっても。

私はあなたと違って人間との子は産めない。だから、代わりに
思い出はいただいたわ。時々、本当の人間に生まれたかったと思
うけどね。」

「・・・そうか。辛いな・・・。」

ふと、クラスイーヴィはアクティースの言っていた事を思い出した。
彼女は美しいものが好きで、次第に人間女性を興味の対象とした。
しかし、異種族である彼女は人間と子をなす事は出来ない。

寂しいものだと言っていたが、それと同じ感情をプリも抱いて
いるのだろう。

もつともプリの場合は、繁殖でリョウとの思い出を作れるだけアク
ティースよりましではあるが。

「それにしても、降り続くねえ。雨。」

「ああ、そうだな。だが、晴れ・・・。」

ガタンッ、と、クラスイーヴィは急に立ち上がると、濡れるのも構
わずに窓を全開に開け放った。

「どうしたの??」

「お前も自然魔法を使うなら、土砂崩れのシステムは知っているだ
ろう?」

「まさか？」

自然魔法とは、精霊魔法とも似ているが少し違う魔法系統だ。天候などを司る強大な魔法が多いため、人間では扱えない。妖精など、極一部の種族のみ扱える特殊魔法に分類される。

「さつき外を見た時に、何か景色に違和感を感じていたのだ。見ろ、あの雲を。」

見れば霊峰とまで呼ばれ、突き上げた剣のように高い山の大半が厚い雲に覆われている。

プリ「これは・・・やばいかな？」

クラス「そうでなければいいが・・・。一応晴れたら調査してみよう。」

プリ「雨量次第だもんね・・・。」

しかし、結局二人の願いは天に届かなかった。

3日間降り続けた雨が夜に上がった翌日、見事な晴天になった。だがそれは、土砂崩れを引き起こす最高の条件にもなる。

愚者の舞い 2-13

霊峰ファレーズは、切り立った休火山であるため、雨中に行く事は自殺行為に等しい。

そのため、不安に思いつつも雨が晴れるのを待つしかなかったのだ。

雨の中、わざわざ出向く気が失せたのか、はたまた旅館に泊まっていた若い娘に手を出していたのかは分からないが、朝と言うには少し遅い時間に来たりヨウを引き連れて、三人はフォスルに向かった。

「シヨコラ様あゝ。」

暇そうに寝そべっていたシヨコラが顔を向けると、ポシスが不安そうに見ていた。

「どうした？」

サラサラと流れる髪の毛の音と衣擦れの音が、無音の室内に良く響く。正確には室内しつと言うより室内むろなのだが。

ポシスの覗いていた水晶球をそのままの姿勢で見て、シヨコラは鼻で笑った。

「エルフと人間程度に何が出来る？ 捨てておけ。」

「でもおゝ。 このエルフ、ク拉斯ィーヴィですよ？」

「そうか。 では監視を続けておけ。 私は水浴びでもして来る。」

そう言うのと、スリりと着ていた衣服を脱ぎ棄て、見事な裸体を惜しげも無く晒し出す。

アクティースのように完璧な美貌とスタイルを誇る美女シヨコラであったが、その身に纏う闇の雰囲気は、見た者に恐怖を与える。

もつとも、人前に現れる事などほぼ無いが。

その後ろ姿を見送った後、ポシスはため息をついた。

もつとも、気紛れなのは今に始まった事ではないので、慣れたものではあったが。

「やばいな。いつ起こってもおかしくはない。」

「いえ、今すぐと言うわけでもないわ。多分、今夜深夜ね。」

現地を見て、二人がそう結論付けるが、蚊帳の外のリョウには訳が分からない。

「いったいどうしたってんだ?? 何かあるのか? 辺りで変な音が聞こえるけど。」

リョウはワーウルフであるため、嗅覚も聴覚も人の数倍鋭い。

「簡単に説明する。良く聞け。」

「おう。」

「雨降って土砂崩れが起きる。以上。」

「本気で簡単ね。」

「細かく話しても理解出来まい。」

そう小声で返した途端、

「そりゃ大変だ! 早く逃げなきゃ!」

と、思いつきり動揺した。

「な?」

プリとしては苦笑いしか浮かばない。

「逃げたきゃ逃げろ。私はなんとか塞き止める。」

「正気なの!? 一個人に何とかなるレベルじゃないわよ! この

広大な範囲をどうやって塞き止める気!？」

「しかし、この地形を見ろ。このまま放つといたらペイネは壊滅だ。いや、下手すれば跡形も残らん。なんとかしなければなるまい。」

「それこそ騎士に任せりゃいいじゃんよ。」

「騎士に何とかできる程度ならそうしている。」

「でも、一応報告して避難させてもらわなきゃ。リョウ、お願いね。」

「はあ!? 俺だけかよ!」

「お前がここに残って何が出来る? 私とプリはそれぞれ魔法で対

処できる。だが、お前は上位まで扱えるようになったとは言っても白だけ。お呼びじゃない。」

「そりゃそうかもしれないけど、邪魔あつか・・・」
スイツとすぐ目の前にプリが立ちほだかり、言葉を遮る。

「私とクラスはここで、出来る限りの事をするわ。だから、あなたは王家にこの事を知らせて来て。私とクラスなら、寸前までここにいてもテレポートで逃げる事が出来るわ。でも、町はそういうわけにいかないでしょう？　お願い。行つて。」

いつもの優しげなプリの眼差しが珍しく真剣なため、リヨウは説得を諦めた。

「分かった。とにかく無茶はしないでくれ。知らせたらすぐに戻って来る。」

「いいえ。あなたも避難を手伝つて。一人でも多い方がいいわ。あなたは私達と違って力持ちだし。」

何か言い返そうとしたが、今は一刻を争うと判断し、リヨウは無言で引き返した。

雨が降り濡れた地面は、下へ下へと水を染み込ませて行く。

そして晴れば、地表の表面は乾くがその下は泥になったまま。

泥のままなら互いに粘着し合うが、表面が乾いてしまえば蓋に成る。そして、滲み込んだ水は下へ下へと進み、固い岩盤などに行き当たった場合、弱い所弱い所を侵食し、移動して行く事になる。

草木が水分を吸収するとは言っても、急激に吸い上げるわけでもなく、限界はある。

鉄板の上に泥を塗れば滑りやすくなるのと同じ事だ。

スッポリと覆い隠すほどの雲は、フォスルを激しい雨で濡らした。

その結果、川は氾濫寸前にまで上昇し、山に囲まれたペイネはあちこちで起きた土砂崩れなどで陸の孤島と化していたのだ。

まるで、誰かが意図したように。

そんな混乱の中、リヨウは何とか王城に辿り着いたが、門前払いさ

れて目通りさえ出来なかった。

どんなに叫んでも固く城門は閉ざされて、拒絶された。

それもその筈、王城には最小限の騎士を残してあるだけで、全力で道を塞ぐ土砂の撤去などに追われていたのだ。

今、下手に門を開けようものなら苦情や訴えを持った住民が雪崩れ込んでしまう。

そのため、食糧支援などの必要最小限しか国としても関わらなかったのだ。

この使者が、クラスイーヴィやプリならまた、結果は違ったのだろうが……。

リヨウ「くそお！　こんな門で守りきれないかもしれないってのに……。」

しかし、忍び込んでもうにもならないだろう事は推測できたし、問答無用で捕まる可能性が高い。

そうなれば二人の下に戻る事も出来なければ、話も聞いてもらえない。

リヨウは報告を諦め、クラスイーヴィ達の下へ戻る事にした。

最悪、二人さえ守ればいいと考えたのと、町を救った英雄になれば言い寄る女の子も数知れずと下心もあった。

ただ、リヨウには何が何でも町を救おうと言う気は微塵も無かった。リヨウの故郷でもなければ縁があるわけでもないのだから当然と言えば当然だろう。

だが、あの二人は違う。

恩人でもあり仲間でもあるのだから。

リヨウが二人と別れた場所に戻って来た時、付近に二人の姿は無かった。

リヨウは付近に残された匂いと足跡で二人を探し、やっと見つけた時には夜になっていた。

「おい！　二人とも！！」

「何しに來たのだ？ 避難はもう終わったのか。」

「それどころじゃねえ。 あちこちで崖崩れとかあったらしくて
門前払い。 話さえ聞いてもらえねえ。」

「そうか。」

平然と答えつつ唇を噛みしめる。

もし陸の孤島となっっているなら、どっちにしろ逃げ場所はあるまい。

「仕方が無いわね。 私達でやれるだけやるしかないわ。」

「だが、どうやる。 私の全魔力を使っても、この規模の土石流は
塞ぎきれない。」

「それは私も同じ。 でも、2人で力を合わせれば何とかなると思
う。」

「いや、2人じゃない。 3人だ。」

「だがどうやる？ 私はアースウォールで止めるつもりだったが。」

「それでも不十分だし、防ぎきれないわ。 私が地脈を通じて、地
下から乾燥させようと思うの。 それなら規模もかなり減るわ。」

「どのくらい乾燥できる？」

愚者の舞い 2-14

「さっきからやっているんだけど、時間がかかるわ。とにかく寸前までやってみる。」

「分かった。発生したら後は私が引き受けよう。」

「なあ。」

「なんだ？」

「一人でアースウォール作って、どんくらいできるんだ？」

「範囲を拡大させてあそこからあそこまでだな。」

「そう言いながら指で指し示す範囲を目で追い。」

「防ぎ切れてないじゃんよ。」

「町の無い方へ受け流すしかあるまい？ まさかお前、全部受け止めるとでも思っていたのか？」

「もちろんそうだ。」

「馬鹿言うな。神でもなければ不可能だ。」

「そうでもないだろ。」

「お前の寝言に付き合ってられん。」

「プリは地下から乾燥させて、土石流の規模を抑えている。後は受け止める壁さえもっと大きく出来れば完全に止められるんじゃないか？」

「それはそうだが、私では気絶するほど限界まで魔力を使って、今言った範囲で限界だ。それ以上はとも作れない。」

「魔力さえ継ぎ足せばまだ作れるんだろ？」

「それはそうだが・・・何が言いたい？」

「俺の魔力を使えよ。」

「・・・正気か？」

「おたくら2人ほど錯乱しちゃいねえよ。十分勝算があるだろ？」
「リヨウは不死と獣人化の呪いを受けた際、同時に体内魔力も飛躍的に上昇していた。」

それはハイエルフのクラスイーヴィさえ凌ぐほどの量だ。

「嬉しい申し出だが、お前は逃げろ。」

「なんでだよ!!」

「お前には関係の無い事だ。　ペイネは私の仲間の作った町。　プリも同じ事。」

「プリも!？」

「私もプリも、レジャンドと共に戦い、共にこの町を作ったのだ。だが、お前は縁えんも縁ゆかりもない。　命をかける必要は無い。」

「馬鹿言うな!　命をかける必要は無いだと!？　俺はお前らの仲間だ!　掛け替えの無い仲間だ!!　二度と言うなそんなこと!　クラス達が命がけでやってるのに、俺が命欲しさに見捨てて逃げるとも思っているのか!？　逃げるなら一緒だ!!」

「馬鹿者。　そのために」

「どっちにしろもう遅いようよ。」

「来るか？」

「ダメだわ、受け流すのも無理なほどかも。　大地が悲鳴を上げてる。　クラス、こうなったら一か八か。　私達二人の魔力を使ってやって。」

「・・・馬鹿者が。　プリ。」

プリはクスツと笑うと頷いた。

二人の思いは一緒だった。

レジャンドと共に戦い、命をかけて築いた平和、そしてこの町。

そして、若く頼りないところもあるが、次世代に繋がる希望の仲間。町もリヨウも、失うわけにはいかない。

「2人とも私の背に手を。　もう時間は無い筈だ。　魔力をリンクしてくれ。」

「分かった。」

プリは無言でクラスイーヴィの背に手を当て、リヨウもそれに倣う。

「大地の全ての精霊よ、我が元に集え。　精霊王シャルバーンよ、我に力を・・・。」

「フウウウウウ・・・」

「ボニート様。 慈愛の女神ボニート様。 俺達に力を・・・！」
ノーブルスライムであるプリは、神に匹敵するほどの魔力を持っている。

そしてワーウルフのリョウの魔力もまた、人間などとは比べ物にならないほどある。

それらが一気にクラスィーヴィに流入してくる。

それをなんとか調節し、アースウォールの魔法を完成させていく。そしてあと少しで完成と言うところで、大地が悲鳴を上げた。

ずっと聞こえていた草木の根の切れる音や、地鳴りがどんどん大きく頻繁になっていく。

「大地の精霊よ！！ 我が命に応えよ！！ アースウォール！！！！」

完成と同時に土砂崩れも発生した。

ズンと突き上がった強大な壁に、一気に土石流が激突する。

リョウは間に合ったと安堵した。

だが、プリは逆に焦った。

長年の付き合いで、クラスィーヴィの体が緊張しているのを感じたからだ。

プリは無言でさらに魔力をクラスィーヴィに流し込んだ。

クラスィーヴィもプリの意図を察し、心の中で感謝しつつ再び魔法を構成する。

「ん？ どうしたんだ2人と・・・なに！？」

緊張を解かない2人を不可解に思ったリョウがそう声をかけたとき、ビシィッ！ と、3人のいる場所から少し離れた所に亀裂が走った。

「チィッ！ クラス！ もっとだ！」

だが、クラスィーヴィは既に魔法に集中し、プリも魔力の供給に全力を注いでいたので2人の返事は無い。

リョウも急いでクラスィーヴィに再び魔力を流し込んだ。

クラスィーヴィは今ある壁の補強の他に、中間にもいくつか壁を作

り出し多少緩和させる。

即席で作った土の緩和壁はもろくも粉碎されたが、それでも今度こそ土石流はなんとか止める事に成功した。

3人はホッと一息つき、安堵した。

だが、ここで力尽きるわけにはいかなかった。

アースウォールは長時間存続する魔法では無い。

もはや土石流としての力は無いが、壁が無くなれば今溜まっている土砂が崩れ落ち、3人を飲み込んでしまう。

急いでここから離れる必要が合った。

ここまで力を削いでしまえば、もう町に被害はほとんど及ばない筈である。

「急ごう。そんなに長持ちはしない。」

プリとリョウは頷くと、急いでその場を離れようとした。

闇でそれらを見つめる目が、スッと細まった。

「ポシス。奴らに絶望と共に死を与えてやろう。」

「はい、シヨコラ様。」

ズンツと突き上げるような振動が突如襲い、3人は慌てて近くにあった木にしがみ付く。

「そんな！ こんな時に地震だなんて！！」

「いかん！ このままでは・・・！」

「どうすんだ！？」

トンツと、プリは揺れる大地もお構いなしにしがみ付いていた木を蹴ると、クラスィーヴィの傍へ跳躍し、しっかり踏ん張ると背後から持ち上げた。

「クラス！」

「舌を噛まないことを祈っていてくれ。」

プリは自分の体で振動を極力吸収しつつ、クラスィーヴィに魔力をリンクさせて流し込む。

「くそお!!」

リヨウも慌ててクラスィーヴィの元へ向かうが、プリのようにはいかない。

収まりかけてはいるが、揺れる地面を走り、なんとか駆けつけた時には、先に作ったアースウォールが効力を失い、地震により更に発生した土石流共々流出した瞬間だった。

（だめか!?!）

リヨウがそう思いつつもクラスィーヴィに魔力を注入した瞬間、クラスィーヴィのすぐ目の前に土の壁が猛烈な速さで突き出し、ドーンッ! と、一瞬激しい振動が辺りを襲う。

「もっと補強を!!!!!!」

「プリ!? それ以上魔力を注入したらお前、枯渇するぞ!!!!!!」

愚者の舞い 2-15

だがプリは、リヨウを一瞥しただけで、再び魔力を注ぎ始めた。

「チィ！ 女の子はなあ、もつと男に頼っていいんだよ！！ こんちくしょお！！！」

リヨウは気絶覚悟で魔力をクラスィーヴィに注ぎ込んだ。

一瞬、プリがリヨウを見た瞬間浮かべていたのは、柔らかな微笑。

それは愛する者へ向ける微笑だった。

（今まで見慣れてて気にも止めなかったがっ！ そういう笑顔は普段見せろお！！！）

内心絶叫しつつ、リヨウは覚悟を決めて、一気にクラスィーヴィに全魔力を注ぎ込んだ。

たとえ魔力が枯渇しても、リヨウはあくまで人間だ。

自然に回復するまで気絶する事になるが、後は仲間が何とかしてくれる。

信頼しているからこそ、最後の一滴まで魔力を注ぎ込んだ。

そして、クラスィーヴィが驚いた顔で振り返ったのを見た瞬間、意識を失ったのだった。

完全に土石流を防ぎとめたと確信した瞬間、クラスィーヴィが慌てて振り返ると、リヨウは満足げな顔をして気絶し、倒れてしまった。

そして、プリも・・・。

「馬鹿者！ お前は・・・！」

プリは本来の姿、スライムに戻っていた。

それは、姿を維持出来なくなっているほど魔力が枯渇した事を示す。そして、ノーブルスライムは魔力が枯渇すると・・・消滅する。

「いいの。 もう、誰かを死なせたく無いから。」

口も無いのにそう言うと、プリは体をプルンと弱く震わせた。

そこへ、バサツと翼を一打ちして、一人の男が姿を現した。

「貴様・・・！ 今頃！！」

食ってかかろうとしたクラスィーヴィを突き出した手で止め、プリの傍らに片膝を付く。

「・・・プリ。」

「やっぱり来たのね。 パパ。」

「一生に一度だけ、手助けしてやるって言っただろ。 何故もっと早く俺を呼ばなかった？ 先に逝きやがって親不孝者が。」

「ごめんね。 自分の力で、成し遂げたかったの。 どうしても・・・。」

「・・・強情な奴め。 で、どうすんだ？ クラス。 このままここで、3人共死ぬか？」

「フン、お前の知った事か！」

「クラス・・・。 お願い、リヨウには・・・。」

「分かっている。 後の事は心配するな。」

「フフ・・・。 最後に、仲間に見守られて逝けるって、幸せだね。」

「馬鹿者。 そう言ってみんな私を置いて逝きおって。 残ったのはこいつだけでは無いか。 腹立たしい。」

「随分な言われようだな。」

「ごめんね・・・。」

そう言うのと、プリはただの水のようになって、大地に広がった。

頬笑みながらそう言うプリの姿を、感じさせながら。

「クッ。」

涙を堪えて顔を背けた瞬間、クラスィーヴィも倒れそうになる。

クラスィーヴィも枯渇寸前まで魔力を消耗し、尚且つ魔法の行使で精神も衰弱し切っていたのだ。

その体を素早く抱き止めると、クラスィーヴィは抗って離れようとしたが放さなかった。

「ムウツ・・・！ 放せ！」

「強がりはいきかねえよ。 今送ってやる。」

「余計な事を・・・！」

「強情張って、このあんちゃんまで一緒に死なす気か。」

そう言うのと、問答無用で2人をレポートさせ。

その少し後、壁のなくなつた土砂は3人のいた辺りを埋め尽くし、そこで力尽きたのを確認した後、羽ばたきもせずに飛んで見守っていた始原の悪魔も姿を消した。

後日、土砂崩れの報告を受けて調査に来た騎士は、なんだか不自然な形で終わつた状態の土砂崩れに驚きながらも、町に被害が出なかつた事に安堵した。

それだけ広範囲に渡っていたのだ。

そして、それを阻止した英雄が静かにそこで眠っている事を、知る事も無かつた。

沈黙が室内を支配していたが、不意に笑い声で打ち消される。

「シヨコラ様？」

「ハッハッハ！ やるもんだな。 しかし、これでまた一人消せやし、まあ、良しとしようか。 出来れば土砂崩れで街を飲み込み、数多の命を吸った大地を使って魔獣を復活させようと思ったがな。」

「残念です。」

「まあ良いではないか。 我らが受けた人間どもの仕打ち。 そう簡単に恨みを晴らせてはつまらぬというものよ。 クククク。」

目を覚ますと、そこはクラスィーヴィの家の寝室だった。

床に寝ていたために、冷えて強張る体に鞭打ちつつなんとか体を起こすと、横のベッドでクラスィーヴィが静かに横たわっていた。

一瞬死んでいるのでは無いかと心配になって、ソツと指を舐めてからクラスィーヴィの唇付近に持ってゆき、確認しようとしたが、まだ、体の感覚が麻痺しているようで、サッパリ分らない。

全魔力を枯渇するまで使った後遺症だ。

ならば直接聞くまでと、クラスィーヴィにかけられていた毛布を捲ると、その胸に耳を押し当てた。

「なんだ。性的対象にならないんじゃないのか。」

「クラス！ よかった、死んでいるのかと。」

ホッと安心したが。

「抱きたければ抱くがいい。今の私は体が麻痺して抵抗できん。好きにしろ。」

その言い様に、猛烈な不安が込み上げた。

「馬鹿いえ。そんな強姦じみた事できねえよ。それよりプリは？」

「なんだ。私の初めてをやるって言っておるのに、お前らしくも無いな。」

「なにい！？・・・嘘だろ？」

「お前は私を娼婦とでも思っていたのか？」

「いや、そういう問題じゃないだろ。で、プリは？」

「ユニコーンに触ったら信じてもらえるか？ まあ、無理に証明する必要もないが。」

「そんなの今ちよいつとあそこを見れば分かるけどってだからプリは??？」

「ならば見たらどうだ？ 私は抵抗できん。」

「・・・プリはどうした？」

「ふん。私の貞操よりプリの方が大事か。つれないものだな。」

「いや、エルフとする機会はないかもしれんし、興味はあるんだけど。」

「ならやればいいではないか？」

「ああもう誤魔化すな！ プリはどうした！？ どこだ!？」

ガシッとクラスィーヴィの両肩に手を置き、激しく揺さぶる。

クラスィーヴィが話を逸らしている時点でなんとなく悟ってはいた。

だから、否定して欲しかったのだ、事実を。

だが・・・。

クラス「放せ。首がもげる。」

無表情のままそう言ったクラスイーヴィの、閉じた目から零れた一筋の涙が・・・。

リヨウ「クラス・・・教えてくれ。プリは・・・プリはどこだ・・・！？」

もう、結果は聞かなくても分かっていた。

だから、揺さぶる手を止め、改めて抱え上げると、ギュッと抱きしめて泣いた。

クラスイーヴィも、あえて言葉にしなかった。

たった4人の心にだけ、その偉大な功績を残し、プリは密かに逝った。

フィリアは何となく嫌な予感がしたので、その日、プリと感覚を共感し、全てを知った。

やがて、その記憶は子のルウへと伝えられていき。

そして、人々は誰も、その勇者の存在を知る事は無かった。

愚者の舞い 2-16

プリ達と別れてから約3か月経っていた。

昨日までまったく思い出さなかったのに、急にどうしたんだろうと自分の心に問いかける。

「ちょっと、何ボケっとしてんの？」

プリの顔、姿、それらを鮮明に思い出していたら、急にフーニスの顔がドアップで現れ仰天する。

「どああ！ 驚かすなよフーニス！」

「ふん。 どうかの女の子でも思い出してたんじゃないのおく？」
鋭い。

まさしくその通りだったので、ルーケは返答に詰まった。

「おいフーニス。 痴話喧嘩は帰ってからにしてくれねえか？ もう着くぞ。」

「誰が痴話喧嘩だい。」

魔眼があつたら呪い殺していたと言わんばかりに睨まれ、ラテルは慌てて前を向いてから肩を竦めた。

「さあ、ふざけるのもここまでにしましょう。 ラミアの住む洞窟はもう少しです。 ラミアは盲目で、下半身が蛇、上半身は美しい人間女性の魔物ですが、盲目ゆえに罠を設置してはいないと思います。」

「分かった。 俺とラテルが前衛、フーニスとロスカは後衛で支援を。 罠が無いなら、フーニスを先頭にする必要が無いしな。」

ルーケがそう指示を出すと、それぞれ無言で頷いた。

師匠の娘で、命の恩人と言うと少し大袈裟だが、そのプリがまさか前夜命を失っていたとは、流石にルーケは想像さえしなかった。

丸一日休養を取った翌日、まだ靄のかかっている早朝。

クラスイーヴィは前日を買っておいた馬を馬小屋から引き出し、荷

物を背に括りつけようとした。

だが、非力なエルフには簡単な作業では無い。

旅の荷物という物はなんだかんだと必要で、けっこう重くなる。

今まではプリが持ち上げてくれていたので忘れていたが、クラスイーヴィでは馬の背まで、まとめた荷物を持ち上げる事が出来なかった。

仕方なく覆い袋だけ先に乗せて、後から中身を詰め込むかと思案しているとき。

「クラスまで黙って行っちゃもう気か？」

その荷物をヒョイツと持ち上げると、リヨウは手馴れた感じで馬に括りつけた。

「○○ちゃんとか寝言言ってる奴を、起こしては悪いからな。」

「あれ？ 俺、寝言言ってた？」

「冗談だ。」

相変わらずの無表情でそう言い切られ、言葉に詰まる。

「・・・ま、元気でやってくれ。このまま帝国に行くのか？」

「いや。何人か知人に会ってからだ。お前はどうするんだ？」

「俺はまた、旅に出るさ。世の中にはまだまだ困っているかわい子ちゃんがいるからな。」

「そうか。」

「んで、教えてやるんだ。 2人にさ。 世の中こんな事もあるんだぞって。」

「女性二人に女性との冒険譚を話しても、仕方があるまいに。」

「もちろんそこは、秘密にしておくさ。」

「では、後に私が逝ったらばらしてやろう。」

「うわひでえ。」

クラスはそう言いながら、ソツとリヨウのそばによると、その頬に素早く口付けした。

「おお！？ なんの呪いだ!？」

即座にドスツと腹に拳を叩き込んでから、そっぽを向きつつ、

「これは秘密にしておいてやる。あまりボニート様を困らせるなよ。」

「イツツツツ・・・じゃあ、元気だな。」

「ああ、お前もな。ハッ！」

クラスは馬に素早く跨ると同時に、腹を蹴って出発した。

リヨウはその背を見送った後、自分もその日のうちに旅に出た。

プリから受け継いだ拳闘志の力、白魔法の力。

それらを使い、来たる日に備えるために。

30年前までと違い、一人旅ではあっても背負っているものが違った。

プリへの想い、クラスへの想い、ピロスへの想い、そして、ボニートへの信仰。

それぞれを背負い、リヨウは100年もの間、大陸各地を巡った。

そしてある日、たまたま立ち寄ったプエルラで魔物の襲撃にあい、戦いの最中ファムに出会った。

親の決めた結婚のため、愛情はそれなりにしか無かったが、それでも夫婦としてやってきたファム。

しかし、目の前で夫を魔物に殺された瞬間、自暴自棄になって戦っていた時、リヨウが助けに入ったのだ。

その後、流された噂をリヨウはたいして信じなかったが、ファムにとっては絶対になった。

まるで死にたがっているようにしか見えないファムを放って置く事も出来ず、新たに出現した魔王を倒せる仲間を求めて旅に出、そして、黄金竜メガロスの元へ辿り着くのであったが・・・それはまた、別の物語である。

向かい合って座る、父と娘。

娘は先日、13歳になったばかり。

暫く無言で見詰め合った後、父であるユウジは覚悟を決めて、口を開いた。

「今までお世話になりました。 父上。」

が、先に娘に喋られて再び言葉に詰まる。

出来れば行かせたくない。

だが、それは出来ない。

真っ白い婚姻衣装を着る娘に、かけるべき言葉も思い付かず、ユウジは涙を堪える事しか出来なかった。

父親の葛藤に気が付いたのだろう、無表情だった娘がニコリと笑った。

「悲しまないで下さい、父上。 私は覚悟が出来ております。」
たった13歳の娘にそう言われては、愚にもつかない思考を止める
しかなかった。

せめて父親としてこれだけは、と、ユウジが即位して以来、全員に
渡して来た小さな壺を、我が娘に差し出した。

「・・・？ これは・・・？」

娘は小首を傾げながら、その壺を凝視した。

「睡眠薬だ、ミカ。 人気ひとけが無くなったら飲むがいい。 苦しまず
に済む。」

ミカは急に実感したのか、表情を強張らせた。

だが、無理やり笑顔を作ると、ユウジからその壺を受け取り、懷に
入れた。

「リセ国王として、汝に命ずる。 黒竜への花嫁として、立派に務
めてまいれ。」

「ご命令、仰せつかりました。・・・父上、さらば・・・です。」

ミカは最後にもう一度ユウジに微笑むと、クルッと身を翻し、歩き
ながら涙を拭った。

そして、グッと後の涙をこらえると、戸を開けて、待っていた神官
と巫女に一礼した。

「本日は、よろしくお願い申し上げます。」

ミカが生贄となるべく準備していたその頃、受け取り手であるア

クティースは、音を立ててお茶を啜っていた。

「ズズズズ。美味しい。相変わらずクーナの淹れたお茶は美味しいのお。」

「ありがとうございます。」

横に座っていたクーナが、ニコニコと笑って軽く一礼する。

「ルパとメレンダの焼いた菓子も美味しいし、やはり自然界はいいのお。」

三人の巫女とお茶をしながら、アクティースはご満悦だった。

「お前も一緒にどうじゃ？ 戦友。」

何気ない一言で、巫女の三人はハツとして入口の方を向く。

そこに立っていたのは、美しい一人のエルフ女性。

「いただこう。」

クラスイーヴィはそう答えながら、アクティースが指先をちよつと振って出した椅子に腰掛け、手際よく出されたお茶を優雅に一口含む。

愚者の舞い 2-17

「で、久しいがどうしたのじゃ？ わざわざ出向いて来るなど。」
「今度、帝国の宮廷魔術師になるのな。暫く来たくても来れなくなる。それゆえ少ない友人を回っているのだ。」

クラスィーヴィがそう答えると、アクティースは少し目を見開いた。
「・・・という風の吹き回しじゃ？ エンシェントエルフであるお前は、現存するエルフの指導者ではないか。前から人間に関わり、風変わりではあったが・・・一国に加担するなどお前らしくもない。何か目的でもあるのか？」

「皇帝の理想を叶えなくなった、それだけの事。他意はない。」

「それが他意と言わずにどれを言うのやら。まあよい、わらわにはお前を縛る権利もないゆえな。あの大戦のように活躍するがよいわ。」

「・・・何かあったか？」

「何がじゃ？」

「珍しく上機嫌ではないか？」

「わかるものじゃのお。実はの。今日、新しい巫女が入るのじゃ。」

こぼれんばかりの笑みを湛えて言うアクティースに、クラスィーヴィは思わずガックリとうな垂れる。

「貴公の女好きも変わらん・・・。竜種族は性別が無いだろうに。」

「好みのもんだいじゃな。それに、お前がわらわの熱烈な求愛に応じぬからじゃ。」

「生憎私は女性に興味がないのな。さて、お暇しよう。ここですゆっくりしている暇も無いのでな。」

「それは残念じゃ。新しい巫女をできれば見てほしかったのじゃが。」

「それはモリオンにでも見せるのだな。」

クラスイーヴィはそう言うのと、皮肉気に笑みを浮かべ、去って行った。

「・・・あの方・・・凄く寂しそうな・・・？」

クーナがそう呟くと、ルパとメレンダが顔を見合わせ、アクティースは鼻を鳴らした。

「プリが死んだそうじゃからな。それでじゃろ。」

クーナ達はプリを知らないのも何とも答えようがないのだが、大事な人であったのだらうと推測は出来た。

クーナ達も家族などを失っているのも、気持ちとは良く理解出来たから。

「ともかく、今日は新しい巫女を迎える予定なのじゃ。準備をよろしくの。」

「「かしこまりました。」」

クーナ達はそう答えながら一礼しつつ、毎年恒例になった行事の準備に取り掛かった。

一抹の不安を胸に抱えながら。

侍や巫女、神官に囲まれ導かれる、ミカの乗った輿^{こし}。

目的地は貢ぎの神殿と呼ばれる、白い石作りの神殿。

そこまで、見物人の持つ松明に照らし出された道が続いていた。

見物人も、侍も、巫女も、全てそこに集った人々は、神官が唱える呪文を続いて唱え続けていた。

もつとも、誰もその意味を理解してはいまい。

古代神聖語と呼ばれる天界の標準語という話だが、その意味を理解する人間は、とうの昔にいなかった。

もしここに始原の悪魔がいたら、クスクスと笑っていただろう。

その意味を理解出来るだけに。

いや、伝えた本人だからかもしれない。

「若くて可愛い娘を差し上げます。どうか嫁にして下さいませ。」

その代り、我らの安全をお守り下さいませ。」

このような意味だが、正確に言い表せばかなり砕けた内容だ。しかもその後は、卑猥な行為を露骨に言い表していた。

その当時、生贄は死して天界へ昇った。

それゆえ、真摯な神官や巫女が生贄として捧げられていた、神聖な儀式だったのだ。

それなのに、そんなふざけた言葉を儀式に使うようにと伝えるあたり、流石は悪魔と言うべきか。

ボニートが聞いたら、呆れつつも顔をしかめる事間違いはあるまい。クラスイーヴィであれば、赤面しつつ怒っただろうが。

ともかく、儀式は厳粛に行われた。

ミカは神殿内に導かれ入り、奥が吹き抜けとなった貢の間へ入って、中央に座った。

「よく分かっていると思うが、くれぐれも逃げたりしないようにな。」

人目が無くなった途端、神官は偉そうにそう言うのと、巫女達を連れて返事も聞かずに退室し、頑丈な鍵をかけた。

時代と共にここまで見下げた存在になるものかと、ユキが見ていたら思った事だろう。

そんな扱いを受けたミカだが、気持ちに変わりは無かった。

産まれた時から定められていた宿命。

これまで、幼くして死ぬ事を定められていただけに、大事に、大事に育てられた。

たとえば町が大飢饉で半数近くの者が飢えて死んでいても、ミカには十分な食べ物を与えてもらえた。

今度は自分の番。

自らの命を差し出す事で、町を救うのだ。

この近郊には狂暴な黒竜が住んでおり、年に一度、若い娘を生贄に差し出す事で見逃す。

そう、ときの国王は契約を交わし、それは今でも守られている。

竜としても国が滅ぼされては餌に困るから守る。

こうして共存してきたのだ。

死ぬのは怖くはないが、それから逃れた時に起きる悲劇の方がミカには恐ろしかった。

神官達の立ち去る足音が消えて聞こえなくなり、それでも暫く待ち、ミカは懷に隠し持っていた睡眠薬を一気に飲み干し、入っていた壺を外に投げ捨てた。

その途端、猛烈な眠気がミカを襲い、ミカは抗う事無く眠りについた。

気が付いたら天国でありますようにと、願いながら。

気が付くと、サラサラと水の流れる音が聞こえた。

（死んだら渡ると言う、三途の川・・・かな？）

ミカは無事に死ねた事にホッと安堵し、その事に自分でおかしくなった。

とにかく、三途の川なら渡らなければならない。

引き返してしまったら生き返ってしまうのだから。

そう思って目を開け、川の方を見て、ミカは硬直した。

そこは整備された、綺麗な川だった。

綺麗な澄んだ水が、綺麗なまっ白い石で舗装された川を流れ、陽光を反射してキラキラ輝いていた。

そんな川の中に、全裸の一人の女性。

ミカはその女性に見惚れた。

女性であれば誰しもが憧れるであろう、美しく長い銀髪、整った顔立ち、出る処へこむ所が出すぎもせずへこみすぎもせず、絶妙なバランスで整った体。

そしてなによりも年齢不詳。

少女のようにもみえ、大人のようにも見え、また、中年の婦人にも見える。

良くも悪くも年齢不詳であった。

そして、そんな外見など気にならなくなる、整った美。

細部の全てが極め付けでありながら、全てがまとまって互いに打ち消しあう事なく強調しあう、まさに整った美しさ、非の打ちどころが無い美。

ミカはその姿から、天女である美しきニンフか、水の精霊かと思った。

しかし、その肉体は人間そのものの質感があり、精霊ではありえないかな、と、すぐに自分の中で否定したが。

ミカがそんな事を考えながら見惚れていると、不意に美女が振り向き目が合った。

その美しさに圧倒され、思わず目を背けようとした・・・が、できなかった。

まるで吸い込まれるようにそらす事ができないのだ。

「お前は純粹よな。幼さゆえか、元しもべからか。まあ、どちらでも構わん。わらわに仕えるに最高の僕しもべよな。」

美女はそう言いながら、片手を腰に当てつつ微笑んだ。

ミカ「しもべ・・・？」

愚者の舞い 2-18

「お前はわらわに仕えるために祭壇にいたのであろうが？」

「え……？　じゃあ……。」

ミカは横に成っていた場所に飛び起きると姿勢を正し、畏まる^{かしこ}。

「現国王の長女、ミカと言います。　よろしく願います黒竜様。

」

「黒竜？　そんな者はここにはおらぬ。」

美女は不満げにそう言つて鼻を鳴らすと、見る見る不機嫌そうな顔になった。

そもそもその黒竜の噂が、ここに住むきっかけになったのだ。

その事に付いて不満は無かったが、愛しい息子に会えなかった不満は残った。

だが、ミカはそんな事情など知らないので、不機嫌になった理由を心中で必死に模索する。

「お前の先祖が契約を結んだのは、狡賢い吸血鬼じゃ。　幻影で黒竜を映しだし、生贄を求めていたのじゃ。　鬱陶しいから始末しておいたわ。」

ミカはそう言われ、しばし言葉の意味を理解するのに茫然としてから、ショックのあまり後ろに倒れた。

打ち付けた後頭部の痛みが、意識を繋ぎ止めつつ、これは現実だと主張する。

「これ。　わらわの話は終わっておらぬ。　勝手に寝るな。」

「そ……そんな……。　吸血鬼……。　黒竜がいない……。？」

倒れたまま茫然と呟くと、涙が溢れて来た。命がけで生贄となり来たのに、その行為自体が全くの無駄であるに分かれれば、呆然としても仕方があるまい。

「名を知らねば呼びにくかうゆえ、教えてやる。　我が名はアクティース。　今日からお前の主人じゃ。」

だが、ミカはガバツと跳ね起きると、猛然と食ってかかった。

「何が今日から私の主人よ!? あなたに何が出来ると言うのよ!」

「ホホホ。毎年同じ事を言われるの。お前は竜族についてどれだけの事を知っておるのじゃ?」

「竜族? 知らないわ、そんなの。」

「では、軽く教えてやろう。竜と言うのはゴールドドラゴン黄金竜を筆頭に、カオスドラゴン混沌竜・ブラックドラゴン黒竜・ホワイトドラゴン白竜・・と、多種多様おる。鱗の色は生まれた

時から決まっており、役割も決まっておる。生きた年月で多少の力の増減等あるが、基本的には黄金竜は生まれた時から筆頭になる立場にある。」

「・・・それが?」

「今述べた順に、階級と言うか立場が上なのじゃ。力もな。言葉で説明するのも面倒臭い。その眼で見るがよい。」

そう言った瞬間、アクティースの体は光に包まれ、代わりに・・・
「・・・な・・・に・・・?」

黄色い鹿のような角が二本、額の部分から突き出し、目は赤く、微かに光を発し。

半開きの口の中には無数の鋭い牙が並び、胴体は蛇のように長い。その胴体に不釣り合いな、短い両手両足が生え、尻尾は魚のように尾ひれが付いていた。

背には硬そうな突起が無数に不揃いの高さで2列に並び、燦然と陽の光を反射して輝く鱗は銀色。

全長50メートルはあるであろうその巨大な体を裏庭内に収めるため、浮き上がった状態でとぐろを巻いていた。

『我が身を見ても、不満か。』

直接脳裡に伝わる、さっきまでの女性とは似ても似つかぬ野太い声。長く突き出した口では、人の言葉は上手く喋れないのかもしれない、と、ミカは呆然とそう考えていた。

『吸血鬼を始末した後、のちときの生贄に頼まれ、われ我がリセを守護して

おる。 我に仕えるのは不満か。 それならば、我はこの地より立ち去ろう。』

ミカはその言葉に慌てた。

「お、お待ち下さい！！ 本当に、本当に守護をして・・・？」

『我が言葉に偽りは無い。』

ミカは暫く銀竜の目を見詰めた後、改めて姿勢を正すと、深々とお辞儀をした。

「アクティース様。 ふつつかもの 不束者ですが、よろしくお願いいたします。」

そう言いながら、あの牙ならそんなに痛みを感じずに死ねるだろうと考えつつ、何か勘違いしているような気がした。

「顔を上げよ。 わらわはお前を食いたくて、ここに運び込んだわけではない。」

顔を上げると、いつの間にか元の人型のアクティースが、目の前に立っていた。

「わらわの竜巫女になる事に、異存はあるまいな？ もしあるなら今のうちじゃぞ。 竜巫女となるのであれば、一生帰る事はできぬからな。」

「・・・？ 異存、と、言われましても・・・。」

「もし帰りたいのであれば送り届けるが？」

「・・・。」

家に帰っても良いと言われれば、当然心も揺れる。

決心し、覚悟して生贄として来たが、まだ13歳なのだ。

両親にも会いたければ、兄弟や友達にだって会いたい。

だが・・・。

「いえ、私は・・・邪魔でなければここに居させて下さい。」

「何故じゃ？ 親や家が恋しくはないのか？」

「正直、帰りたいです。 でも、帰っても居場所がありません。

私は生贄となるべく育てられました。 大飢饉でみなが飢えている中、私は空腹を覚えた事ありません。 それほど大事に育ててもらったのです。」

帰って良いと言われたから帰って来ました、で、許される筈も無い。生贄はつまり、己の命を楔くさびとして相手を止めなければならぬ。帰ってしまったては楔にならない。

生贄として送り込まれた以上、己の命と体で相手を引きとめなければ意味を成さないし、現状では庇護の無い小国に明日は無い。それにミカは王族だ。

帰っても望まぬ結婚を強いられるだけだ。

色々と言葉にならない苦悩と葛藤がミカの中で渦巻いているのを見て、アクティースはニヤリと笑った。

「今年も人間の血肉を味わえるかと思っておったが、中々強したたかな娘じゃな。やはり、わらわが目を付けただけの事はある。」

「・・・え？」

目を付けた？ と、疑問に思ったが、次の言葉でそれどころではなくなつた。

「帰ると言うなら食い殺す気でおったが、居たいと言われたのは初めてじゃ。それも自分自身のためだけではなく、他人の心配まで含めてとはの。」

「そんな・・・だいそれた考えでは・・・。」

いっそ、食い殺された方が楽なんじゃ、と、思わなくも無い。

「クーナ、ルパ、メレンダ。服。」

そう呼びかけると、入口の影で控えていた三人の娘が、アクティースの服を持って現れた。

その娘達も、それぞれ美女と呼ぶに相応しい顔立ちをしていた。

「宴の準備じゃ。新しい巫女を迎える歓迎をせねばな。」

「あの、一つお伺いしてよろしいですか？」

「なんじゃ？」

「あの・・・生贄は、必要なのですか？」

「それは、わらわが人間の肉を好むゆえに生贄を望んでいると、そう言う意味か？」

スウツと目が細められ、獲物を見つけた肉食獣のような眼差しにな

る。

三人の巫女はその剣呑な気配に、服を着せ終わったのを幸い、下がつて様子を伺う。

長年仕えて来た主人だけに、その性格は良く理解していた。

ミカはそんな鋭い眼光に一瞬気圧されたが、怯む事無くアクティースの目をしっかりと見返し、答えた。

「・・・そうです。」

少し声が震えていたのが自分でも分る。

次の瞬間には死んでいるかもしれない恐怖感が、不意に沸き起った。

だが、アクティースは決して血肉を好む、地竜のような性質ではないと感じた。

だからこそ、ミカは決死の覚悟でそう問いかけたのだ。

愚者の舞い 2-19

真剣な眼差しで見詰めて来るミカを、アクティースは不満そうに睨みつけた。

「たいしたタマよ。　わらわに意見か。　お前、そんなに死にたいのか。」

「みな、家族もいれば知り合いもあります。　誰かが死ねば悲しみます。　私にはアクティース様が邪竜とは思えません。　ですから・・・」

サツと血の気が引いたのが自分で分かった。

それほど強烈な殺気がアクティースから放たれ、つかつかと歩み寄ると胸倉を掴み上げた。

「邪だの聖だの、勝手に決めているのは人間であろう？　黒竜であ

ろうが地竜であろうがわらわにとっては等しき仲間。　黄金竜や翼

竜なども含め、そこに差はない。　いわば好みの問題じゃ。　それ

を分かっておって邪竜などと言うのか？　お前は人を食うなど言い

たいのであろうが、人間だって猪や鹿、兎などを食べるではないか。

貴様ら人間が卑下するそれら獣けものには家族がいなくても言うのか？」

「そ・・・それは・・・」

「人だけが特殊で貴重で高貴な存在とでも言うのか？　知能のある

なしで判別するのか？　それならば尚の事、わらわが人を食らって

も文句を言われる筋合いも無い。　わらわの方が知能も肉体も優れ

ておる。　小賢しいだけの人間に文句を言われる筋合いさえない。」

アクティースは不意に手を放し、ミカは落ちて尻もちをつき、その横をアクティースは足早に通り過ぎながら冷たく言い放った。

「不愉快じゃ。　お前などどこへでも消えるがいい。　わらわの見込み違いであったわ。　その身を八つ裂きにせぬのは慈悲じゃと思うがいい。」

「待って下さい!!」

慌てて立ち上がったそう叫ぶが、アクティースは足も止めない。

「なんじゃ？　喰らわねば黙れぬのならそうしてくれるが？」

「そうして下さい。」

「・・・なんじゃと？」

予想外の返答に、思わず足を止めて振り返った。

自分を見詰める目、それはユキに勝るとも劣らない真剣な眼差しであった。

「確かに人はか弱く小さな存在です。でも、みな一生懸命生きているんです。私がここにこうして生贄として命を捧げるために来たのは、そんなみんなの命と平和を守りたいからです。私を食べる事で満足するならそうして下さい。でも、無益な殺生は、どうか、お止め下さい。お願いします。」

そう言っただけとお辞儀をするミカの表情は、髪に隠されて全く見えない。

アクティースは鼻を鳴らすと、ツカツカと歩み寄り、ミカのすぐ前で立ち止まった瞬間。

カッと全身から光を放し、再び本来の姿に戻った。その頭に、ミカを乗せて。

『面白い小娘め。　私の思ったとおりだな。　よかろう、お前の願い叶えてやろう。』

「あ、ありが」

『ただし!』

言葉を遮る強い口調に、思わずビクリと身を震わす。

『我は我がままを言われる事を好かぬ。　今回限りだ。　クーナ。』

「はい、アクティース様。」

クーナはニコツと笑いながら、そう返事をした。

次に続く言葉が分かっていたからだ。

『祝宴の準備をしておけ。　新たな巫女誕生のな。』

「かしこまりました。」

予想通りの言いつけに、クーナは笑顔のままそう答えて一礼し、ルパとメレンダに声をかけて神殿の奥へ引っ込んだ。

巫女達が行動に移ったのを確認しつつ、アクティースはミカが落ちないようにつくりと上昇し、結界から出て行った。

ラミアとの戦いは、予想外に苦戦した。

ロスカの言うように、確かにラミアは盲目であった。

ラミア自身は魔法を使う事は無く、腕力も見た目通り、普通の人間女性ほどしかない。

しかし、その下半身による攻撃力と移動力は恐ろしいものがあつた。また、盲目ゆえに音と匂いに敏感で、ゴブリンなどの下級な魔物とは一線を画した存在であつた。

また、盲目ゆえに畏は無いと高を括っていたら、相棒にインプがいた。

インプとは下級に属する魔物で、拳大の身長しかないがすばしっこく、背中の被膜の翼で空も飛ぶ邪悪な妖精種族だ。

容姿は醜い鬼と言った感じだが、畏などを張り巡らせる悪知恵に関しては趣味の領域だ。

もっとも、殺傷力はほとんどない物しか作れないのだが。

それでもラミアとのコンビでは、威力抜群であつた。

ラミアの姿を見つけて突撃したラテルは、即座に足元に設置されたロープに足をひっかけて転倒する事になった。

そこへラミアが突進して来て圧し掛かり、ルーケ達が助けようとしたところをインプの魔法が邪魔をした。

あわやラテルが圧死しそうに成りながら、なんとか魔物を撃退は出来たものの、予想外の被害に喜び勇んでの凱旋とはならなかった。

それでも勝利には間違いなく、一行はリセに後少しと言う所まで帰って来た時には、いつもの調子を取り戻していた。

「本気で死ぬほど重いんだぞ！？」　ラミアは！」

「上半身はともかく、下半身は全て筋肉と言っていい蛇ですからね。

しかもあなたを潰そうとして、ウネウネ動いていましたし。」

「アハハハハ。将来を物語ってるねえ。女の尻に敷かれるってさ。」

「いや、あれは尻じゃなくて足じゃないか？」

「どっちでも関係ねえだろ！」

「せめて上半身だったら良かったのにねえ。あたしなみにあったよ？」

そう言いながら、フーニスは豊満な自分の胸を下から持ち上げて見せる。

「俺は人間の女以外に興味はねえよ！」

「上半身だけなら人間だったじゃん？　ちよっと目が潰れてたけどさ。美人だったよ？」

「・・・そうか？」

押し掛かれて命からがらの状態で助けられた後、倒されていたラミアをろくにみなかったラテルは小首を傾げた。

「口には鋭い牙が、サメのように並んでいたけどな。」

ルーケが笑いながらそう言うと、ガックリと項垂れて心底悲しげにラテルは呟き始めたが。

「・・・やっぱ人間の・・・なんだありゃ!？」

ラテルが素っ頓狂な声を上げた途端、猛烈な勢いでリセの上空を真っ黒く厚い雲が覆い尽くし、スコールのように雨が降り始めた。

「つめてえ！　なんだこりゃあ!!！」

「魔物の襲撃か!？　ロスカ!　心当たりは!？」

「こんな強力な魔力を持っているのは・・・!」

大声で叫ばないと声もまともに聞こえないような大雨の中、ロスカが知識を披露する前に根源が姿を現した。

「シ、シルバードラゴン!？」

フーニスが叫び指差す先、そこには、銀色に輝く銀竜が空から降りて来ていた。

リセ現国王ユウジは、結局一睡も出来ないまま夜を明かした。

姉ユキが30年前に生贄になった時同様、言いようも無い空しさだけが心に残っていた。

それでも国王としての務めは果たさねばならないため、書類などに目を通していた。

娘の死によって守られている平和に欺瞞と空しさを感じていても、その平和を維持しなければその死そのものが無駄死になる。

戦争になれば、一人二人の死では賄えないのだから。

気を改めて書類に集中し始めた途端、不意に暗くなった空に気が付き、ユウジは窓に駆け付けて見上げた。

窓は全開であったが、現代のように薄い紙では無いので、突風でも吹かなければなんら問題が無い。

空は目に見えて湧き出て来た黒く厚い雲に覆われ、ユウジは即座に階下に控える家臣に向かって叫んだ。

愚者の舞い 2-20

「嵐が来るぞ！ 皆の者を避難させよ！！」

リセは山間にある小国なので、猛烈な豪雨が降ると鉄砲水が発生し、瞬間的に全てを押し流す事がある。

それなりに緩和装置などを対処しているとは言っても、人に出来る事には限界がある。

そのため、万が一を考えてそう指示を出したのだが、雨は既に降り始めていた。

「間に合わんか？」

自分で口から声が出たのが分かるが、建物内においても自分の声が聞えないほどの豪雨。

ユウジの脳裏に鉄砲水による壊滅的な被害が国中を襲い、その後に訪れるであろう飢餓と疫病に思いを馳せ、眩暈を覚えた。

愛していた娘の命を差し出したが、何か機嫌を損ねたのかもしれない。

雨と竜とは密接な関係にあるというではないか・・・。

絶望の底に叩きこまれかけたが、対応しなければと言う責任感でなんとか現実には自らまい戻る。

自分が落ち込んで支持をしなければ、助かる者も助からないのだ。

「急げ！！ 今ならまだ間に合う！！」

自主的に逃げる国民もいるだろうが、老人などはやはり手助けがいる。

雨の中飛び出して行く臣下を見下ろし、次なる指示を考えていた時、急に雨が止んだ。

助かったか！？ と、顔を上げた時、雲はそのまま、目の前には巨大な銀竜がいつの間にか出現していた。

下に意識を集中していたために、雨が止むまで気が付かなかったのだ。

その銀竜に気が付いた人々の叫ぶ声が聞こえるが、ユウジはそれどころではない。

目の前に浮かぶ銀竜は、ハッキリと自分を見据えてそこにいるのだから。

そして、ユウジが何か言う前に、野太い声が脳裏に直接響き渡った。

『我が名はアクティース。銀の鱗を持つ者なり。お前達に寄生していた黒竜は我が退治した。我と新たな契約を結ぶか?』

「そ・・・それは・・・、どのような条件でございますか?」

『年に一度、貢物をいただこう。ただし。人ではなく、食料をな。』

「食糧・・・ですか?」

『そうだ。不服か?』

「いえ、そのような事は・・・。」

不服ではないが疑問は浮かぶ。

そもそもなぜ黒竜を倒して、銀竜が居付くのか?

奪い合うほどそんなにこの国は居心地がいいのか?

しかも欲しがる貢物が食糧?

疑問だらけである。

「父上!!」

はい? と、一瞬、聞き慣れた声に驚き、竜の頭上を咄嗟に見上げてさらに仰天する。

「ミミミミ、ミカア!? お前、なんでそんな所に!」

ミカは不意に、ツウツと一筋涙を流すと、アクティースの頭の上で姿勢を正し、深々とお辞儀をした。

「父上。改めてお別れを言いに来ました。」

「・・・ミカ・・・。」

「私はアクティース様にお仕えます。父上におきましては、いつまでも、お元気で・・・。」

「ミカ・・・。しっかり、努めるのだぞ。」

「はい!」

今生の別れと理解し合う二人。

流れる涙を拭う暇さえ惜しんで、互いを見つめあった。その姿を、一生忘れないために。

だが、ユウジは愛しい娘からその目をもぎ放すと、改めてアクティースの目を見返して深々と一礼した。

「娘を、守護を、よろしくお願い致します。」

『私の餌にならん事を祈っておけ。 契約、しかと守るのだぞ。』
「ははっ！」

銀竜はユウジがそう答えながら頭を下げたのを見届けると、現れた時とは打って変わり、静かに空の彼方に消えて行った。黒雲はいつの間にか、奇麗に消え失せていた。

仲間達と依頼達成の祝宴を楽しんだ後、ルーケは宿の部屋に引き上げて来てから、日中にみた銀竜の姿を思い出した。

テレパシーは国民全てに聞かせるようにしていたのだろう、ルーケ達にも聞こえた。

ルーケはアクティース本人に会った事は無かったが、その神殿には以前行った事があった。

そのために疑問が次々と浮かぶ。

しかし、答えはどうやっても出て来る筈も無い。

異次元の図書館で、魔物関係の資料を読んだ時も、銀竜など人の手に負えない魔物は除外していた。

勝てないと言う事は、まず弱点が無いに等しい。

それに黄金竜・銀竜は、現在自然界にいる最強の生物であるが、人間に友好的だ。

何かあっても話し合いでけりが付く相手でもある。

そんな相手の弱点など、その時は調べるだけ時間の無駄だと思ったのだ。

それにしても、最低3か月前には住み付いていた筈の銀竜が、なぜ今更？

もつと詳しく色々聞くべきだったか？　と、あの時の話相手だったクーナを思い出し、ドキッとする。

上品な雰囲気身を纏う、異国の美女クーナ。

ミニスカートから延びる素足の、白くてしなやかで美しく……。

ブンブンと頭を振って、記憶を振り払う。

そんなクーナに焼かれるとか言っていた師匠。

そう言えば、師匠は俺を許してくれたのだろうか？

と、新たな疑問も湧き起こって来た。

あの綺麗なクーナが火を吐く？　まさかな、など。

そのクーナが竜巫女としてアクティースと契ちぎりを結んでいるため、本当に火炎を吐けるとは想像も出来ないルーケであった。

竜巫女・竜神官という存在が、この世界にはある。

実を言うと、同じ言葉でありながら2通りの種類がある。

竜神官とは男、竜巫女とは女。

性別で呼び分けるのだが、男女の違いを抜いて2種類あるのだ。

まず、普通の竜神官・巫女の場合は、竜の強さに憧れ、近づこうと言う存在。

己の肉体をとことん鍛え上げ、竜そのものと同じ生活をする事により、竜に近づく事を本旨とする。

もともと竜そのものと言っても、参考になっているのは地竜である。

服をまったく着ないか全裸に近い恰好で、生肉を食べて生活する。

そうやって極限までやっている、竜語魔法ドラゴンロアという言葉と魔法を自

然に覚える事がある。

地竜も面白いもので、敵意を持たず、そばに居たがる人間を食料とは認識しないで、育てる習性があった。

そうやって共に生活していると、竜に性質が似て来るのか覚える事があるのだ。

竜神官達が使える魔法としては、背中に竜のような翼を生やして飛んだり、火炎を吐いたりというものがある。

それとは違い、クーナ達は契を交わした、もう1種類の竜巫女である。

こちらは契を交わした竜の条件に縛られるが、前述した竜神官達と違って寿命が無くなる。

前述した竜神官達は、普通の人間が70歳程度で死んでしまうのに対し、120歳くらいまでは生きる。

クーナ達は一種の呪いのような、元来の本当の意味での竜巫女なのだ。

主人である竜に捨てられるか、竜そのものが死ぬまで共に生き続ける。

そのため、竜語魔法も前述した竜神官達より多彩に覚える事になるのだが……。

その下りは、おいおい語るとしよう。

愚者の舞い 2-21

アクティースとミカが神殿に帰って来ると、祝宴の準備を終えたらしく、クーナ達が待ち構えていて出迎えた。

だが、巫女は3人だが、出迎えたのは4人。しかも多い1人は男だった。

アクティースはその人物を目に留めるなり不満げに鼻を鳴らし、前の見えないミカが疑問に思った時にはいつの間にか地上にいた。

そして、その横に立つ人型のアクティースの放つ殺気に、ミカは震え上がった。

正面に立つ男は平然としているが、クーナ達も顔を引きつらせているところを見ると、かなり本気で殺気立っているようだ。

「何しに來たのじゃ？ 魔王。」

「ご挨拶だなアクティース。せっかく上等な酒を持って来てやったのに。」

「それは歓迎してやろう。」

コロツと態度を変え、殺気を打ち消したアクティースに、巫女達はホッと安堵の息を付く。

「・・・魔王・・・？」

ミカはそう疑問に思っ、改めてその男を見た。

にこやかで気のいいお兄さんといった感じの細身の男を見つめ、ミカは疑問で一杯になる。

魔王と言えば200年ほど前、世界を壊滅的な破壊と恐怖を撒き散らした張本人だ。

だが、その魔王は冒険者達によって倒された筈であり、と、言う事は。

「ん？ どうした新入りのお嬢ちゃん。俺がいくら良い男だからって浮気したら、本当にこのお嬢ちゃんに食べられちゃうぞ？」

腕を組み、笑顔でそう言う男に対し、アクティースは即座にまた不

機嫌そうな顔になった。

「誰がおばちゃんじゃ。誰が。」

「あえて断言してほしいか？」

「わらわがおばさんなら、お前は爺さんであろうが？」

「否定はしねえぞ？ 玄孫^{やしやこ}より下の子孫がいるしな。爺なら若いわな。」

「相変わらず暖簾に腕押しじゃなあ。じゃが、わらわの可愛い僕に手を出すでないわ。」

「生憎、年齢的に俺の範囲外だから安心しな。」

「どうだか分らんからな、お前は。」

そう言いながら肩を竦めるアクティースと男、交互に見ながら、ミカは聞いた。

「あの・・・魔王って・・・？ お名前なんですか？」

完全に意表を突かれたのだろう、アクティースとアラムは思わず目を見開き、顔を見合わせてから思いつき爆笑した。

「お、おいしすぎるな！ この娘は！！ ダーッハッハッハ！」

「わらわも予想外じゃわ。ホホホホ。」

何か変な事を聞いただろうかと、ミカはキョトンとするしかなかった。

「面白い娘さんよ。一応ちゃんと自己紹介してやろう。俺はアラム・ヤウンデン、魔王本人だ。アクティースとは古い友人でな。一度死んだ後はこうやって行商人などしながら暮らしているのさ。」

一頻り笑った後でアラムがそう言うのと、ミカは小首を傾げた。

「一度死んだ？」

「こやつはこう見えても始原の神の一人でな。不死の存在なのじゃ。何度死んでも生き返るゾンビみたいなものじゃな。」

「その説明は酷くねえか？ 故郷を失って彷徨ってたところを拾ってやったのに。しかもゾンビは何回も生き返らねえよ。」

「感謝はしておるぞ？ わらわはな。ホホホ。」

「まったくしてるように聞こえねえなあ。まあいいや。俺もユグドラシルの仲介がなければ受け入れなかったしな。」

「ユグドラシル？　って、なんですか？」

「ああ。次元を旅する放浪者と、言うべきかな？　この世界だけではなく、他の世界なども渡り歩いている奴で、こっちも古い友人だよ。　もつとも、ユグドラシルは親父の親友でもあったんだけどな。　ま、世界樹とか色々呼ばれている、巨大な意思のある木さ。」

「お父様・・・意思のある木・・・」

ミカにとっては、初耳な固有名詞ばかりだ。

もつとも、始原の神にしろ銀竜にしろ、通常の世界とはかけ離れた存在なだけに、変な意味かも知れないが納得は出来た。

だが、アクティースの次の一言で驚愕する。

「原始の神か。　せめて、お前に殺される前に知り合っておればの。」

「ころ・・・！？」

「そうだな。　そうすれば・・・倒さなければならぬ状況になる事はなかったかもしれないな。　だが、そうすつとお前ら、いまだに次元を放浪している事になるんだが？」

「それもそうじゃな。　わらわ達はともかく、地竜などが困ったであらうな。」

「あの、アクティース様・・・」

とりとめなく続く話に、クーナが恐る恐る口を挟む。

「なんじゃ？」

「宴の準備はできております。　いつまでも立ち話もいかがかと・・・」

「おお、そうであった。　魔王、そちにもおこぼれを恵んでやるぞ。」

「お前、本気でそう思ってたんだろ。」

「当然じゃ。　ここはわらわの住居だからの。」

「おまあゝなあ。　そもそもこの空間用意してやったの誰だと思っ

てんだ。俺だぞ？ 主賓席ぐらい用意したって罰はあたんねえぞ？」

「と、言うておるが・・・酒の代価は巫女達を見ればお釣りを貰う方みたいじゃが？」

アクティースの言い方に疑問を覚え、ミカがチラッとクーナ達を見れば、クーナとメレンダは胸を、ルパはスカートを抑えている。

「いいじゃねか減るもんでなし。」

「「減ります！！」」

平然と言うアラムに、巫女3人は見事にハモッてそう大声を出した。

ミカが生贄として神殿に来てから、数か月が経った。

先輩巫女達から色々な事を教えられ、あっという間に過ぎ去った日々だった。

だが同時に、ミカは不安を覚える。

契。

文字にすればたったの一字。

だが、それは重要な意味を持つ。

どんな事をするのか、何をしなければならぬのか、それに関してだけは誰も何も教えてはくれなかった。

そのうち分かるからと。

ただ、契をアクティースと結ばない限り、ミカは所詮ただの人間。契を結ぶ事によって、初めて竜巫女となるのだ。

だが、アクティースには一向にその気配がない。

内心、やはり生贄を断らせた事を怒っているのではないか？

自分は不要と思われているのではないか？

など、色々不安が脳裏をよぎる。

「肘をちゃんと伸ばして。そこで、腰を入れる。そうそう、それで・・・こら、ちゃんと姿勢を維持しなさい。そんな事ではないぞと言うとき役に立てないわよ。」

「はい・・・。」

いざと言う時と言うのがどういう時なのかよく分からなかったが、ミカはクーナ達と同じように、とりあえず拳闘志の練習をしていた。今日のように、時々アクティースは神殿を留守にする。

なんでも、地竜や翼竜が、天界に住むべき鱗の色を持った子が生まれたから、天界に届けているのだそうだが。

地竜などから、白竜などが産まれて来る事自体、ミカには理解不能な事態ではある。

極稀に、人間同士でも取り換え子と呼ばれるチェンジリングハーフエルフを生む事はあるが、普通は人間は人間の子供しか産まれて来ないし、他の生物もそうだ。

「どうしたの？　なにか心配事？　あ、分かった。　故郷が恋しいんでしょう？」

気の無い返事をするミカに、クーナは優しくそう問いかけると、ミカは意を決したようにクーナを見返した。

「私、アクティース様に嫌われているんでしょうか。」

愚者の舞い 2-22

クーナはハッと息をのみ、聞くとはなしに聞いていたルパも、思わず振り向いた。

「キャウツ！」

「あっ！ ごめんルパちゃん！」

メレンダは真剣に稽古をしていたため、ミカの言葉は聞いていなかった。

そのため、急に振り向いたルパに気が付き、拳を止めようとした時には既に遅し。

正拳突きが見事にルパの側頭部に決まり、小柄なルパは壁まで吹っ飛んで叩き付けられた。

首はほぼ正確に90度折れ曲がり、力無くズリズリと床に落ちる。

「気を付けなさい。今は稽古中ですよ。」

「はーい・・・。」

クーナが優しく諭すようにそう言うと、メレンダがシュンとして答える。

その途端ルパが立ち上がり、両手でグキグキと頭を調節して直し、フゥと息を付く。

「ごめーん、メレンダ。余所見しちったあ。」

「こっちこそごめんねルパちゃん。大丈夫？」

外見上、15歳にしか見えないルパに、最年長の25歳に見えるメレンダが謝ってる姿は違和感を覚えるが、実年齢は違うためにこうなる。

実際の最年長は二十歳にしか見えないクーナで125歳、その次がルパ107歳、そしてメレンダ92歳なのだ。

「さあ、稽古を続けますよ。」

クーナがそう言うと、ルパとメレンダは再び基本動作から始めた。不安そうなミカに、クーナも答えを与えられないため、結局疑問は

うやむやに終わったが。

5千対3百。

片側が崖の山間の開けた場所から細い道へと繋がる場所に、双方の軍勢は対峙していた。

3百しかない方はリセ王国の軍勢で、細い道を死守すべく柵などを設けて防御に専念の構え、対して5千の軍勢は隣国トラーパー王国の侵略軍だった。

「リセ国王よ！ 大人しく降伏するがよい！ さすれば無駄な血を流さずに済もう！」

大軍の中から出て来て、一際豪華な鎧を身に纏った太った髭面の男が大声でそう言うのと、ユウジは苦笑いしながら答えた。

「たわけた事を。 我が国に貴様如きに下る弱者はおらん。 そちらこそ無駄な労力を消費しないうちに引き上げるべきではないかな？ バスレーロ將軍。」

「黒竜の後ろ盾もなく、よくぞ言った！」

（やはり、それを知って攻めて来たか。）

ユウジはこれから続くであろう、侵略者との戦いに心が痛んだ。

どれだけの犠牲が出るのだろうか。

黒竜は凶暴と言い伝えられており、それを証明するように、今まで何回攻め込んでもリセを侵略出来た国は無かった。

黒竜に直に襲われ、食われたりした者はいなかったが、崖崩れや隕石落下などで撃退されていたからだ。

その黒竜が銀竜に倒されたと言う話は、瞬く間に西の王国中に知れ渡った。

間者もちろんいたが、商人などもあの日リセにいたのだから、知られぬ筈はないと思ってはいた。

もっとも、こんなに早く攻めて来るとは思いもよらなかったが。

恐らく、銀竜が本当に守護する気があるのか、また、現れたとしてその実力はどれほどか、確認しに来たのだろう。

「従わぬ者は物言わぬ屍にするだけよ！ 皆の者！ かか・・・れ？」

号令をかけようとした瞬間、リセの方から急激に暗雲が出現し、あつという間に両軍の頭上を覆い隠す。

あまりの異様さに逃げる事さえ忘れて見上げているうちに、突如数条の稲妻がトラーパー王国軍内に迸り、ほとばし数人を正確に撃ち付けて轟音を響かせた。

「こ、これは・・・。」

蜘蛛の子を散らすように木々の間に逃げ込む侵略者達を呆然と見つ、ふと暗雲を見上げると、悠然と銀色に輝く巨大な竜が静かに降りて来た。

そして注目させるように大音量で一声鳴くと、ギロリとバスレーロを睨みつける。

「なななななな・・・！？」

雷から逃れようと、手近にあった木にしがみ付いていたバスレーロは、恐怖のあまり立ち竦んだ。

『我が名はアクティース・・・。我が領域を侵そうとする愚か者どもよ。早急に立ち去るがよい。さもなくば、我が貴様らに死をくれてやろう。』

「な、何をふざけた事を！ 者ども何をしておる！！ 奴を射倒せ！！」

『愚か者！！ キャシャア！！』

アクティースが再び大地も轟く一鳴きをした瞬間、トラーパー王国軍のほぼすべての兵士が恐怖に心を縛られ、弓矢を取り落したり、地に伏しガクガクと震えだした。

竜の持つ特技の一つ、咆哮ほうこうだ。

そして、咆哮に耐えた兵士の放つ矢を物ともせず、他の兵士と同じように恐怖に縛られ立ち竦んでいたバスレーロ目がけて木々を吹き飛ばしながら猛烈に突撃し、牙の一つで素早く脇腹を噛み抜き持ち上げて、一気に60メートルほど急上昇する。

苦痛で恐怖から回復しもがき始めたバスレーロを、頭を鋭く振り解き放ち、問答無用で大地に叩きつける。

銃弾のような速さで大地に叩き付けられたバスレーロは、鎧ごと原型を保ってはおらず、あつという間に粉碎された將軍の姿に、侵略軍はさらに恐慌をきたした。

『早々に立ち去れ。 三度^{みたたび}は言わぬ。』

圧倒的な威圧感に、圧倒的な力の差と咆哮による恐怖、それに將軍を失った事もあり、トラーパー王国軍は我先にと逃げ出したのであった。

「アクティース殿、ご助力感謝します。」

『助力は不要であったようだが、我が巫女が悲しむゆえに。 契約もあるのだな。』

アクティースはそう言うのと、再び暗雲と共に消えてしまった。

実際、不要の配置になってしまったが、正面の柵で敵を防ぎ、足止めしている間に横から別動隊が弓矢で混乱させ、更に背後に回り込んだ兵で退路を土砂で埋めた後に打って出て、殲滅する計画だったのだ。

トラーパー王国軍は士気が低いので、それでかなりの捕虜を得る事も出来る。

だが、未知の銀竜という圧倒的な力の勝利で、ユウジの能力を隠す事が出来、なおかつ1兵の損失も無かった。

このまま平和が続けばいい。

ユウジは心底そう願っていた。

妻に頼まれた買い物を終えた帰宅の途中に呼び止められ、ロスカは聞き慣れない声であったが振り返った。

「何か御用ですか？」

「やはり、あの有名なロスカ殿でございましたか。 わたくし、トラーパー王国に屋敷を持つ、ポルコと言う商人でございます。」

「トラーパー……。」

ニコニコと笑顔の中年がそう名乗ると、ロスカは眉をしかめた。今、リセとトラーパーは戦争中なのだから、当然の反応だろう。

「いやいや、我が国が攻め込んで来ているのは知っております。おかげで帰国できずに困っていたところ、あなた様をお見かけしまして。路銀も心許なくなつて来ておりまして、出来れば買い取っていただけたら・・・と、お声をかけた次第でございます。」

「買い取る？ 何をですか？」

「あまり大きな声では言えないのですが・・・。実物を見ていただいた方がよろしいですな。私はその宿屋に泊っておりますので、用事が済んだ後にご足労願えませんか？」

ロスカは暫し男の真意を探ろうと目を見詰めていたが、自分を騙しても何の利益も無いだろうと判断し、頷いた。

ポシスの報告を聞いたショコラは、ニンマリと笑みを浮かべた。

まだ種を撒いただけだが、上手くいけば・・・。

ロスカに接触した中年の商人は、ポシスの変身した姿だった。

ポシスの正体は猫又^{ねこまた}。

自由自在に姿を変える事が出来るのだ。

愚者の舞い 2-23

ミカに改めて拳闘志の基礎を教えながら、クーナも疑問に感じて考えていた。

アクティースの対応を見る限り、アクティースはミカを嫌っているどころか大のお気に入りだろう。

それは傍で見ているクーナには良く分かった。

ただ、嫉妬するほどでもなく、アクティースは巫女達に均等に接していたが。

だが、何故童巫女にしないのかと言われると、理由は分らない。

どう答えたものか考えている時、突然背後からモニユツと胸を揉まれた。

「キャア!？」

「相変わらず良い乳してんなあ。鍛えているだけあるな。」

そう言いながら、背後からモミモミと揉む男。

「でたあ!! 今日こそは!!」

「行くわよメレンダ!」

「俺から一本取れるもんならとってみな♪」

クーナが無言で蹴りあげた背面蹴りを素早く離れてかわし、そこに殴りかかって来たルパのスカートをズバツとめくり上げて動きを止める。

「キャン!」

咄嗟にめくられたスカートを押さえたルパから飛び離れ、飛び蹴りで飛んで来たメレンダをヒョイツと避け、着地と同時に肉薄する。

反射的に突き出された肘鉄を屈んで避けつつ、下から腕だけでグイッと持ち上げるようにして、胸を揉み上げる。

「ギャー!」

「ウムウム。クーナより肉体年齢がある分、熟して柔らかいねえ。」

「こんのおー！」

背後から後頭部を狙って突き出されたルパの拳を更に屈んで避け、メレンダの腹寸前で止めたために互いの動きが止まった瞬間、クルリと回転するようにルパの背後に回り込み、すかさずスカートをめくり上げて下着を凝視する。

「ギャー！！！」

「うん、流石俺の選定眼。長持ちする良い布だ。」

「なんで毎回現れるたびに！！成敗します！！」

「指導代金だろ♪ ほれほれ♪ いつもとおおり、1本取れたらいいもんやるぜ♪」

本気になって殴りかかる三人の巫女の攻撃を尽く余裕で避ける。

クーナは格闘の達人であり、ルパとメレンダもそれに次ぐ実力があるのだが、それを平然と避けるアラムとは大人と子供のような実力差があった。

もっとも威力と音は凄まじいものがあるが。

拳にしる蹴りにしろ、普通の人間どころか熊でも一撃で即死だ。

クーナ達のような契を交わした竜巫女は、竜と半ば融合した存在なので、永遠に生きる事が出来る。

そして、竜の特性もある程度身に宿るのだ。

そのため、通常の人間とは違って全身の筋力は遙かに上回り、防御力も格段に上がる。

岩を軽々と持ち上げ、通常の剣で斬られても切れるのは着ている服だけである。

外見は通常の人間とまったく変わらないのだが。

ともかく、まだ素人同然のミカはとてもではないが加わることはできない領域が、眼前で展開されていた。

「まったく、毎回一騒動起こさんと気が済まんのかおのれは。」

「あ、アクティースさま、おかえりなさいませ。」

「あやつが来たからには・・・なんじゃ？ 人間の男の匂いがするの。」

アクティースがそう言いつつ顔をしかめた途端、一人の若い男が入口から駆け込んで来た。

「師匠！　なにやってんですか！　！！！」

「おうルーケ。やっと来たか。」

「やっと来たかじゃないですよ！　結界抜けた途端に消えて、なにやってんですかあ！！！」

「見ての通り、拳闘志の指導だ。」

「スカートめくるのが指導かあ！！！！！！！」

「私だって揉まれたもん！！！！！」

「・・・本気でなにやってんですか師匠！！！！！」

「だから指導だって。現状の実力は見たし、そろそろ反撃すっかな。」

そう言った瞬間、4人の渦巻き滾っていた気配が一変した。

今までは全力で攻めていた巫女達に緊張が走り、アラムからは殺気が迸る。ほとぼし

「踏み込みが甘い。そんなんじゃ足を掬ってくれと言ってるようなもんだ。」

スパツとそう言いながらルパの軸足を蹴り払い、体が宙に浮いて身動きをとれなくしてから、突き込んで来たメレンダの拳を屈んで避けつつ、即座に腹に拳を叩きこむ。

「左手は防御。疎かになるとこうなる。」

ダンとルパの体が床に落ち、強く背中を打ったために息が一瞬止まったところをズンと踏み付けつつ上体を起こし、

「受け身ぐらいちゃんにとらないからだぞ。」

そこに突き込んで来たクーナの拳を、左手で軽く掴みつつ半回転しながら懷に踏み込み、突き出された腕の手首を掴み直した瞬間背負い投げで床に叩き付ける。

「はい残念。着実にレベルは上がっているが、まだまだだな。」

「相変わらず手加減なしですね・・・師匠。相手は女の子ですよ？」

「馬鹿言ってるじゃねえよ。ちゃんと手加減してるだろ。見ろ、誰も死んでない。」

「手加減の程度ってそこですか・・・？」

「他にどこをしろと？」

「いやもつとこう・・・」

「あれで手加減なんですか？」

ミカは横に立つアクティースを見上げてそう聞くと、アクティースはフンと鼻を鳴らす。

「天軍百万の軍勢相手を素手で壊滅させる奴じゃ。あの程度では手加減と言うか手抜きじゃな。」

「じゃあ、お姉さま達にいたずらするのは何故ですか？」

「本気でやらねば鍛錬にならないからだそうじゃ。どこまで本気がわからんかの。」

と、言う事は、自分は存在すら認めてくれないのか？

確かにアクティースと契を結んでいないため、竜巫女としての力がないただの人間の娘だが、それにしてもあんまりではないか？

アクティースへの不満と疑問などが重なっているところであつたため、ミカはなんだか物凄くムカムカと、ムカついてきた。

弟子らしい若い男と言い争うアラムにツカツカと歩み寄り。

「？ ミカ？ 何をする気じゃ？」

無造作にアラムの右手を掴む。

「ん？」

そのままその手をグイッと自分の胸に押しつけて。

「どうですか？」

「へ??？」

ジッと見上げられ、反応に困る。

「私はどうですか？」

「え？ あ？ いやその・・・」

「ホホホホ。戸惑うそちを見るのは初めてじゃの。やるのう、魔王を戸惑わせるとは。ホホホホホ。」

豪勢な料理もあらかた食べつくし、酔い潰れた巫女達を寢室に下がらせた後。

アクティースとアラムは二人きりで杯を交わしていた。ちなみにルーケは潰れるなり、空になった荷車ごとどこかにテレポ―トされて消えている。

「一応感謝をしておこう。お前が来てくれるおかげで、良い刺激になっておる。わらわも今日は不味いものを口に含んだのでな。

口直しになった。」

アラムは口の端を吊り上げて笑みを浮かべる。

何も変わらぬ日々、何も変わらぬ景色。

永遠を生きるには長すぎる檻の中だ。

「で、どうすんだ？ あの子。戸惑っているが。」

「・・・ミカか。」

「わかってるんだろ？ お前はもう、長くはない事を。」

愚者の舞い 2-24

アクティースは持っていた盃を静かに置くと、ツイツと視線を逸らした。

「やはり、今日来た理由はそれか。」

「食糧を届けるためでもあったけどな。」

アクティースは銀竜で、しかも古竜なので、実は食事は必要ない。食べても差し支えないが、古竜は自然のエネルギーを体中で吸収して生きているので食事の必要がないのだ。

だが、巫女は違う。

永遠に生きる事は出来るが餓死しては生き返り……の繰り返しになる。

かと言って人間と交わるには外見が全く変わらない竜巫女はなにかと災厄に遭いやすい。

特にミカ以外は異国人である風貌に加え、全員が美人だ。

黙っていても目立つ。

その上服装は巫女服。

以前の地では、巫女など珍しくも無い土地柄であったためそうでもなかったのだが、リセでの巫女は、前は黒竜、今は銀竜に仕える者しかいないのは周知の事実である。

しかもそれらの巫女は、国が管理しているのだ。

一応巫女服以外の服も用意してあるが、ともかく目立ち過ぎるメンバーである。

また、アクティースが人との係わりを求めていれば問題は無いのだが、まったく関わる気が無いため、今のうちに結界内に潜んでいる。そのために、行商人として普通の生活をしているアラムが届けているのだ。

服などの日用品も含めて。

「竜巫女はお前と一蓮托生。」

お前が死ねば巫女も死ぬ。

それを

分かっているから迷っているんだろ。」

「お前、貰ってくれぬか。」

平然と言われた提案に、思わずブツと、飲みかけた酒を噴き出した。

「汚いのお。」

心底そう言うアクティースを、ひとしきりむせた後に睨みつけながら、

「馬鹿言え。俺は巫女なんていらねえよ。兄貴じゃあるまいし。」

「そのわりに、活きのよさそうな男を連れているではないか？　もう一人増えても差し支えあるまい。なんならつがいにすれば良かったら？」

諸事情を知っていて、尚且つ承諾する筈がないと見越して、悪戯っ子のように目を細めてそう言うのと、アラムは憮然とした顔になる。

「家の前で餓死するまで居座られちゃ、仕方ねえだろ。」

「流石のそちも根負けしたか。人間もやるものじゃな。」

「ほめてんじゃねえよ。ま、英雄程度の資質は持ってたからな。」

多少の手助けだけはしてやるさ。拾った以上はな。」

「管理者としてそれ以上は・・・か？　そう言えば、クラスィーヴイはどうじゃ？　この前挨拶に来たが。」

それを聞くと、アラムは吹き出した。

「どうしたのじゃ？」

「あいつ、お前の所に来てそのまま帝国に出向いたんだよ。そして・・・クククク。」

「・・・どうなったのじゃ？」

「仕えるように頼みこんだ王は弟に毒殺されちゃってな。出向く前夜に。門前払いされたって怒ってペイネに引っ込んだよ。」

「ホホホ。それは災難じゃったな。まあ、仕えた後でなくて良かったではないか。だが、お前に会ったらなお不機嫌になったであらうな。」

「あいつは俺を嫌っているからな。」

そう言いながら、皮肉気な笑みを浮かべた。

聖魔戦争の時、魔界の軍勢を率いた始原の悪魔アラムは、先陣を切って暴れまくった。

その戦いで多くの神や天使が命を失ったが、その戦いの時、クラスイーヴィとアクティースは天軍として戦った。

アクティースはクラスイーヴィの美貌だけではなく、妙に馬も合ったので、珍しい事に乗騎となり、相棒として戦った。

その壮絶な戦いを引き起こした張本人と言うだけでも好きに成れないのに、挙句の果てにこの自然界に魔王として降臨した。

その時二人は直接戦い、クラスイーヴィ達冒険者に倒されたのだが。アラムは最初から死ぬつもりだったので手加減していたことを後で知り、更に嫌悪の対象になったのだ。

命がけで戦ったのに、自殺の手伝いをしていただけでした、では、さすがに怒るだろう。

「ま、あの娘をどうしようが、俺には関係ねえ。好きにしろや。」

話をしめるようにそう言うと、アラムはニヤリと笑って姿を消した。

「・・・無理とは思っておったが・・・つれないのお。」

そう呟くと、蓋が開いたまま、まだ中身が半分は残っている樽を軽々と抱え上げ、一気に飲み干したのだった。

人がまだ、蛮族と呼ばれていた時代があった。

当時、人々がそう呼んでいた訳ではないが、便宜上そう言われる時代。

自然界に人間が住み始め、火の扱い方を偉大なる者達から教わり喜んでいたような、そんな素朴で無知な時代だ。

この時代は、天界はそれなりに自然界に関与していた。

何故なら、頂点に立つ始原の神バーセが、誤った文明を進まぬように、徐々に魔法などを教えていたからだ。

銀竜アクティースや、黄金竜メガロスはまだ、魔界にいた時代だ。

言葉は、意思の疎通と魔法の普及のために、誰でも話せた。

しかし、バーセがある目的のために消えると、天界は聖魔戦争で活躍した二人の竜に後を任せ、手を引いてしまった。

必要以上に関与しないためと言う理由だが、実質は……。

それでも人々は、天界に感謝の気持ちを持ち続け、生贄と言う天界へ人を送り出す儀式は止めなかった。

そんな時代の、と、ある小さな村。

自分が見つめる先には、一人の成人少し前の少女。

その少女は、優しく頭を撫でてくれていた。

人間の美的感覚は分らないが、少女は美しい容姿をしていたと思う。

「今日もあなたは元気そうね。色で分かるわ。」

そう言いながら、少女はニッコリと笑った。

その頃の自分はまだ子供で、人間を怖い存在だと認識はしていなかった。

本当の意味では、だが。

「でも、ごめんね。今日でお別れなの。私、天と言う場所に行くんだって。」

答えない自分に、少女は語りかける。

少女にとって、自分は唯一の友達らしかった。

自分も、無理に苦勞して餌を取らなくても美味しい物にありつけたし、何より優しくったこの娘が大好きだった。

他の人間は、自分を見ると邪魔くさそうに追い払うのに、この娘は優しくったから。

だから、その娘が大地に突き立った柱に縛り上げられ、足元に積まれた柴に他の人間が火を点けようとしているのを見た時、頭の中が真っ白になった。

そして気が付いた時、自分は雁字搦めに縛り上げられ転がされていた。

「ったくなんだってんだ。神聖な儀式を邪魔しやがって。やは

りこれも・・・。」

「かもなあ。シェーンは不気味な事を起こす娘だし。」

「おい何やってんだ。早く天に行かせよう。あの不気味な力は、天できっと役に立つ。」

「そうだな。こいつは後で・・・。」

周りでそんな会話を交わす人間達に、取り囲まれていた自分。

それらの人々の足と足の間から、自分の方を心配げに見詰める娘が見える。

『助けなきゃ！ あの子が死んじゃう！！』

自分は本能でそれを理解していた。

だが、どんなにもがいても、暴れても、戒めは緩みもしなかった。

「やめてシヨコラ！ もういいの。あなたは山へお帰りなさい。」
娘はそう言うと、いつもの優しい微笑みを浮かべた。

そんな娘を、自分は助けられない。

愚者の舞い 2-25

自分の非力さに、シヨコラは気も狂わんばかりだった。

少女を失う事は、何か、自分だけではなく、何かとてつもない大事な何かを失う、そんな直感がした。

だが、それが何かも分からない。

そして、自分では少女を助けられない事実。

（今は違う。今の私は非力では無い。）

そう訴える声がある。

だが、この日、この場所においては、自分はあまりにも無力だった。

（違う！ 私は！！）

「シヨコラ様！！」

ハッと目が覚め、シヨコラはガバツと身を起こし、ここがいつもの室だと気が付くまで、ゆうに数分を要した。

その間中、煩く聞こえた荒い息遣いが、自分のものだと言う事にも。

「大丈夫ですか？ シヨコラ様。」

「・・・ポシスか。すまない。」

ポシスはフルフルと首を振ると、心配そうにシヨコラを見詰め、やがて、ハツとして目を輝かせた。

「そうだ！ シヨコラ様、温泉に行きましょう！」

突然のポシスの提案に、流石のシヨコラもキョトンとした。

「温泉？」

「はい。少し離れていますが、動物しか知らない温泉が湧いている場所があるんですよ。そこでゆっくり温泉に浸かりながら、月でも見ませんか？」

「・・・月か。」

シヨコラにとっても、ポシスにとっても、月は特別な物だ。

純粹に魔界から生まれ出た魔物は関係ないが、自然界で長年生きて妖怪変化した物にとっては、力の源でもある。

最近、強い力を使うばかりで、月の光を浴びていなかったなど思出し、シヨコラはポシスの提案にのる事にした。

（疲れているから、あんな夢を見る・・・。）

助けられなかった少女の姿を思い出しながら、シヨコラは夢の残滓を振り切るように、寢床から勢い良く立ち上がった。

ポシスの道案内で辿り着いたそこは、確かに人間が気軽に入りに来れるような場所では無かった。

付近には当然民家など無く、険しい斜面の中腹付近にある、ちょっとした平地。

そこに生えていた巨木を、スポットと真上に抜き取った場所がそのまま岩となり、温泉が湧いた、そんな感じの形であった。

温泉の深さは人間で例えるなら、大人の平均的な全身のサイズで股下に触れるか触れないか程度であり、温泉が抉ったのかどうかかわからないが、1メートルほど斜面が抉り取られ、立って奥まで行ける程度の高さが合った。

底から湧き出る温泉、排水は斜面側の奥にある、壁となっている岩肌の割れ目に流れ込んでおり、外に向かっては一切流れ出していない。

半分露天、半分屋内といった形で、斜面の上から見ても、上空から見ても、また、正面から見ても、木々と地形でまったく分からないだろう。

ただ、真上だけは開けており、満月がしっかりと温泉を覗き込んでいたが。

「よく、こんな場所が出来たものだ。」

「自然の力って、やっぱり凄いですよね。」

先客の狸の親子は、そんなシヨコラとポシスを警戒する事無く、一緒に温泉に入っていた。

2人が害を成さないと、分かっているのだ。

シヨコラは露天の方で温泉に浸かりながら、優しい眼差しで温泉に

はしゃぐ子狸を見つめつつ、満足げだった。

そんなシヨコラの様子に、ポシスも肩までお湯に浸かりながら月を見上げた。

温泉の温度は丁度良く、熱過ぎもせずぬる過ぎもせず、心身共に寛ぐ。

「月見酒の方が良いんじゃないか？ シヨコラ。」

「！？」

ビックリして声の主を見やると、いつの間にそこにいたのか、一人の男が杯を3つ、水筒を5本持って、そこに立っていた。

「久しぶりだな。 いつの間にか猫の子分も出来ているようだし。」
「そう言いながら、スツと服を消して温泉に入ってきて、盃を二つ、シヨコラ達に差し出した。」

「あんた、何者！？」

シヨコラを庇うように立ち塞がったポシスが身構えながらそう叫ぶと、狸の親子がキョトンとして3人を見詰める。

「やめよ、ポシス。 お久しぶりでございますな、始原の悪魔様。」
「そう言いながら盃を受け取り、一つをポシスに差し出す。」

「シヨコラ様！？」

「敵ではない。 味方でもないがな。 わざわざ害をなそうと言う相手に、酒を勧める者でもない。 落ち着くがいい。 見よ、あの親子を。 平然としているだろう？」

ポシスが見ると、確かに狸の親子は警戒せず、それどころか子狸は再び遊び始めていた。

それはつまり、敵対心が全く無いと言う事。

「ほれ。 上等の酒だぜ。」

竹で出来た筒、その口の栓を抜き取りシヨコラに差し出すと、シヨコラは遠慮なく注いでもらい、躊躇いも無く、一口口に含んだ。

「なるほど。 どこ産であろうか？」

「これは南の王国にある、山奥の村でしか作ってない逸品さ。 どうだい、その猫のお嬢ちゃんも。」

ポシスは戸惑いつつも湯に浸かり直しつつ、シヨコラから杯を受け取った。

注がれた酒をためらいながら口に含むと、ポワーンとした顔になる。猫又はマタタビなど、猫の好む物が好きだが、酒は特に好きなのだ。

「その顔じゃ、かなり気に入ったようだな。」

笑顔でそう言われ、ハッとポシスは顔を引き締める。

警戒心を解いてはいけないと、自分を戒めたのだ。

「で、何をしに來たのだ？　あなたが用も無く、私の前に現れる事はあるまい。」

平然とそう問うと、自分で注いだ酒をクイツと飲み干してから、ニヤッと笑った。

「流石だなシヨコラ。　実はな・・・。」

スウツと、シヨコラの目が警戒心で細まり、ポシスはいつでも飛びかけられる様に身構えた。

「なんも無いんだわこれが。　アッハッハッハッハ！」

カクンと、二人揃って湯の中へ顔を突っ込みそうになる。

「いや正直なところ、近くを通りかかったらお前らがいたから、ついでに一緒に入ろうかと思ってな。　ほんと、それだけ。　でも月見酒出来たし、いいだろ？」

「私は、酒は嬉しいのだが。」

「どうしても理由が欲しいなら、苦言を言いにな。」

「・・・苦言？」

「いつまでも人間なんざ恨んでも仕方がねえって事だ。　シェーンも悲しむぞ。」

そう言った瞬間、キリツとシヨコラの眉が跳ね上がる。

「今日はあいつの命日だからな。　しかも満月も重なった。　たぶん思い出していると思っただけ。」

「それを知っていて、それでも姿を見せるか？」

「だからこそだな。　シェーンは俺の友でもある。　あいつが悲し

むのを、黙って見過ごす気は無い。だが・・・シェーンはシェーン、お前はお前だ。だから、苦言なのさ。」

コッソリと不意に、何かが腕に当たったため振り向くと、奥から泳いで来た子狸が見上げていた。

その頭を優しく撫でながら、

「俺は、人間の存在を否定していた。兄貴が強固に言い張らなければ、未だこの世界にいなかっただろうさ。人間はひ弱で賢く、そして・・・愚かだ。どこの世界でも、大概世界を滅ぼすのは人間だった。だが同時に、俺達の領域に上って来るのもまた、人間だった。不思議な事にな。」

愚者の舞い 2-26

ビクツと狸の親子が反応し、子狸が親の方へ全力で逃げて行く。シヨコラから放たれる、激怒の気配を敏感に感じ取ったからだ。

「おお！？ 先客がいるぜ兄貴。」

だが、そんな怒りを言葉にする前に、野太い声が注意を逸らす。

「しかも若い美人が二人だぜ！」

「一応俺もいるんだがな。」

そう言いながら、男どもの視界に入っていないアラムが苦笑いを浮かべる。

斜面を滑るように降りて来たのは山賊風の3人。

年頃は2人中年で、一人が多少若い。

「どれどれ？ おお、こりやまた綺麗なお譲さんじゃねえか。」

「なんだお前ら！ 鬱陶しいから消えろ！」

完全に激怒したポシスがそう言うのと、山賊3人は一瞬キョトンとしてから爆笑した。

「威勢がいいなお譲ちゃん！ だが・・・。」

そう言いながら、腰から剣を各々抜き放つ。

「長生きは出来ないぜ？」

「やってみなよ。」

ポシスの挑発に、山賊達は簡単に怒りで顔を赤くする。

そんなやり取りを眺めた後、シヨコラはアラムに目を移し、

「邪魔はしないだろうな？」

「しねえよ。 さっきも言った様に、俺は人間に肩入れはしていない。 どっちかって言うとお前ら動物の方が好きだ。 ましてや生きる価値さえないゴミを処分するのに俺が止めるかよ。」

馬鹿な事を聞くなと言わんばかりにそう答えた瞬間、一番前に立っていた、比較的若い山賊が無造作に吹っ飛んだ。

斜面から突然大砲で撃ち抜かれた、そんな感じで体を四散させなが

ら。

「「なっ!？」」

驚愕した山賊達の目の前には、すでにポシスがいた。

そして呆然としている間に、真中に立っていた山賊の背中から一瞬手が突き出た。

「あゝあ。 せっかく綺麗になったのに。」

と、そうぼやきながら跳躍と同時に回し蹴り。

腹部を貫かれ、激痛に身動きを止めた山賊の頭部が四散した。

「手桶も用意してやるよ。」

その声に反応したわけではないだろうが、怒りのあまり隠していた2本の尻尾が飛び出し、フルツと震わせて、残る山賊も瞬時に始末する。

「ゴミの匂いを嗅ぎつけて、暫く熊が来そうだなこりゃ。」

そうボヤキながら戻って来たポシスの眼前に、不意に手桶を突き出す。

完全に不意をつかれて、ポシスはギョツとして飛び退いた。

「せっかく温泉に血肉が入らないように始末したのに、返り血でお湯を汚す必要も無いだろ。」

普通の猫なら舐めて綺麗にするところだが、流石にあの手の者の血で汚れた体を舐めて綺麗にするのは気が引ける。

ポシスは渋々ながら受け取って、体を洗い流し始めた。

「さて、酒は置いて行ってやる。 暫く二人でくつろぎな。 俺は忙しい身分なんぞでな。」

そう言うと、シヨコラ達が何か言う前に消え失せてしまった。

「なんなんですかあいつ？」

ポシスが不満そうに聞くと、シヨコラは鼻を鳴らして答えた。

「世界最強の厄介者さ。」

だが、今夜のやり取りでシヨコラはある事を確信し、そして行動に移すべく、脳裏で計画を練り始めていた。

クーナ達がいつも通り拳闘志の修業をしていると、不意にアクティースが姿を見せた。

「アクティース様？　いかがいたしました？」

「客じゃ。」

ニヤツとアクティースが答えた瞬間、クーナ達は即座に理解して稽古を止めて、客の出迎え準備をするために奥の厨房に引き上げる。人間のままのミカは足手纏いでしかないが、出来る範囲で進んでお手伝いに励んだ。

「すいません、銀竜様のお住まいはこちらですか？」

そう言いながら、神殿入口の洞窟から姿を現したのは、いかにも冒険者と言った風情の5人組男達。

「そのようじゃな。何用じゃ？」

たった一人で待ち構えていたアクティースに、冒険者達は一瞬怯んだ。

だが、リーダーであろう、先頭で入って来た男が笑顔を浮かべながら一歩踏み出した瞬間、

「それ以上入るでない。許可した覚えは無いのでな。」

冷たく言い放たれ、男は戸惑いながらも足を止めた。

「あの、私は見ての通り、冒険者をやっているフレッドと言う者です。銀竜様にお目通り願いたいのですが・・・？」

「わらわなら目の前におるではないか。要件を言うがいい。」

「いえ、巫女の方ではなく、銀竜様に直接お会いしたいのですが。」

「じゃから、わらわがそうだと言うておる。呑み込みの悪い人間じゃな。」

こいつ頭は大丈夫か？　と、戸惑いながら、冒険者達は内心思っていた。

一応、顔に出さないようにはしているが。

竜と言う者は、普通そのままの姿でいるイメージがある。変身でき、なおかつ普段その姿でいるとは誰も思わない。

双方の前提が違うのだから、意思の疎通が出来る筈も無いのだ。

アクティースはそれを知ってからかっているのだが、冒険者達はそのようなアクティースの性格だって知る筈も無く、苛立ちながらもなんとか穏便に話を進めようと思いを巡らせた。

「・・・実は、銀竜様の知恵をお借りしたいのです。」

「ほう、わらわの知恵をの。どんな知恵じゃ？」

「我々は、ある村から依頼を受けたのですが、その依頼は水の確保なのです。」

「そんなもの、川から水を引くなり、井戸を掘れば良いではないか。」

「事はそう簡単では無かったのです。井戸はかなり深く掘りましたが、水は出ませんでした。川はそれなりに遠くではありますが存在するのです。しかし、その川は隣の国の管理する川なので、勝手に引く事が出来ません。雨水に頼るしかない現状だったので。それで、何か良いお知恵は無いかと思ひまして。」

「奪い取ればよいではないか？」

「そそそ、それが出来ればやっています！ 相手は強く、とても勝ち目はありません。平和裏に何とかしたいのです。」

「なら、支配を受け入れれば良いではないか。さすれば領土内、文句は無からう？」

「それが、その村の支配者が、その村を支配する国の王族でして。最前線に位置する村だけに、断固死守すべしと。その王族の敷地内には水の出る井戸はあるのですが、頑として村人に使わせてくれません。このままでは村人が死んでしまうのです。」

「反乱をおこせば良いとも思うがの。どうせそう言う馬鹿者は、それなりに身を固めておろうな。」

「そうなのです。もし、お知恵を与えて下さるのでしたら、お礼にこの酒を献上したいと思ひまして。おい。」

そう言いながら、後ろに控えていた仲間に合図をすると、荷車に積まれた酒樽が一つ、運ばれて来た。

「必要であれば、わらわが雨を降らせても良いがの。それでは基

本的な解決にはならんから、井戸を掘るか、川から引くかしかないであろうな。　どこの村じゃ？」

「え！？　あの、まさか、出向かれるの！？」

「当然じゃろう。　地理が分からなければアドバイスもできない？」
そう言いながら、アクティースはニヤリと笑った。

「いえあの、お姿を見せられると、色々と問題がございまして・・・」

だがアクティースは、そんな冒険者達を鼻で笑うと、

「そうであろうな。　出来ればこの場でその酒樽に仕込んだ毒を
わらわに飲ませ、倒したいであろうからな。」

愚者の舞い 2-27

先頭に立ち、交渉していたフレッドは、一瞬ビクリと体を震わせた。

「な、なんと御冗談を。　ハハハ・・・。　酒は飲み過ぎれば毒ですからね、まあ、確かに毒です。」

アクティースはつまらんとする顔になると、クルツと身を翻し、奥に向かって声をかけた。

「客はお帰りじゃ。」

「ちよちよちよっとお待ち下さい!!」

「今は見逃してやる。　じゃが、次に来たら食い殺すぞ。　とつと消えるがよい。」

「チッ。」

フレッドは舌打ちすると、腰の剣を抜き放ち、無言で突進した。その後に続き、仲間達もそれぞれの行動を起こす。

2人が腰などから剣とメイスを手を持ち後に続き、残った2人は呪文を唱え始めた。

そして魔法を完成し、解き放とうとした魔法使い2人が見た光景は。いつの間に、どこから現れたのか、さっきまで話していた美女の前に壁となり立ち塞がる、3人の別の美女と、その足元に倒れ伏す仲間達。

その娘達は、それぞれ背に竜のような翼を生やし、両手の爪は鋭く長く尖っていた。

「う・・・うわああ!!」

火炎球を出現させていた魔法使いは、破れかぶれになって解き放つ。それを中央にいた美女、クーナが撃ち落とそうとした瞬間、かき消すように消滅する。

「わらわを害そうと言う割に、力量が低すぎるのお。　じゃが、わらわに牙を剥いた以上、生きて帰れるとは思っておるまいな?」

そう言いながら振り返ったアクティースは、心底楽しげな顔をしていた。

目は怒りにつり上がっていたが。

火炎球も解き放ってしまい、今更魔法も唱える余裕が無い魔法使いは、どうにか打破できないか必死に思考を巡らせた。

そんなアクティースを、警戒してまっすぐ前を見ていた魔法使いの視線を遮るように、氷の槍が誰もいないところ目掛けて放たれた。それが、仲間の精霊魔法使いの放った物だとは分かるが、その後を追いかけるように駆けだした真意は理解しかねた。

「どこを見ているの？」

仲間を目で追いかけて、慌ててアクティースに視線を戻した時には、クーナが既に目の前にいた。

魔法使いが驚きの声を上げる余裕も与えず、その喉をグツと握り潰してから即座に飛び離れ、クーナは急いで残る冒険者を追いかけた。だが、氷の槍はアクティースが無効化してかき消したが、精霊魔法使いの目的は達成されていた。

「動くな！ 動けばこの娘を殺すぞ！！」

恐る恐る、様子を奥の影から見ていたミカを、冒険者は人質に取っていたのだ。

「アクティース様！」

クーナはアクティースの下へ駆け寄りながら、指示を仰ぐべくそう声をかけた。

同時に、己の迂闊さを呪う。

今までは戦闘時、ミカがいなかったために、存在を忘れていたのだ。だから数を減らすために動いてしまった。

人間の放つ魔法攻撃では、クーナ達にもアクティースにもダメージは無い。

そのため、何をしても打ち勝てる自信があったのだ。

しかし、中央にいたクーナが誰よりも先に動いてしまったため、邪魔となってルパとメレンダの足を止めてしまい、対応が遅れた。

その結果がこれである。

クーナは後悔に、臍はそを噛む思いであった。

一方ミカは、首筋に良く切れそうなダガーを押しあてられながら平然としていた。

見詰める先に立つアクティース。

その主人と仰ぐアクティースが平然としているのだから、大丈夫だと安心したのだ。

「いいか！ 動くなよ！！」

「動いたらどうじゃと言うのじゃ？」

「この娘を殺す！ お前がどんなに化け物でも、何かする前にこの娘を道連れにしてやるぜ！」

そう言い放った冒険者に、アクティースは心底呆れてため息をついてから、

「お前は阿呆じゃなあ。」

「なんだと！？」

「わらわを何だと思っておるのじゃ？ 人に知恵を授けた古竜じゃぞ。」

「それがどうした！？」

スウツと目を細め、艶然とアクティースは笑みを浮かべて平然と答えた。

「巫女の1人や2人でガタガタ動揺するとも思っておるのか？」

「「！？」」

これには言われた当の本人である冒険者よりも、クーナ達の方が動揺した。

「そんな子娘の一人くらい、殺したければ殺すがよい。 わらわは痛くも痒くもない。 それに、わらわは蘇生の魔法も使える。 お前如きの目論見など、兎戯にも及ばぬ。」

アクティースの真意を図りかね、クーナはチラリと主人を見た。

その眼は平然としていて、とてもハツタリとは思えない。

もっとも、ハツタリであったなら、僅かでも揺るぎがあれば見破ら

れて意味は成さないが。

ただ、クーナの性格を良く知っているアクティースだけに、クーナには主人の意図が分からないのだ。

この事態を引き起こしたのは、紛れもなくクーナの失態だ。

それで仲間であるミカが死んだら、クーナは癒せない心の傷を抱える事になる。

それに、今まで誰が人質に取られても、そんな事を言った事さえない。

もつとも、クーナ以下3人とも、その時は既に竜巫女として契を交わしていたので、ダガー如きで死ぬ事は無かったが。

ルパなど激怒したアクティースに、犯人もろとも焼かれた事もある。それらを考え合わせても、アクティースらしからぬ態度であるのだ。

「どうするのじゃ？ もしその娘を殺したいなら、さっさと殺すがよい。ただし、お前は何度も殺しては生き返らせ、わらわのおもちゃとして遊んでやる。飽きたら喰らってやろう。楽に死ぬるとは思わぬ事じゃ。」

そう言って、ニヤリと笑う。

本当に、どうしたと言うのか？

と、不意にミカが気になって見ると。

ミカも平然としていた。

そのため、ルパもメレンダも、アクティースにしろミカにしろ、何か考えがあると思って動かなかったのだ。

一方、ミカは平然としていたのには理由があった。

アクティースが自分をどうでもいいと言った時、流石に動揺はした。だが、それがいかほどの事があるうか。

ミカは契を結ばないアクティースに疑問を持っていた。

だが、アクティースの生活態度を見て、ミカはアクティースが仕えるに値する、信頼に値する相手だと信じていた。

だからこそ・・・。

「ふ・・・ふん、こけおどしは聞けないな。もしお前の言う事が

本当なら、とつくに攻撃しているじゃないか。それをして来ないと言う事は、この娘を特別に思っているからだ！ 違いかい？」
冒険者はそう言いながら、ゆっくりと警戒しながら入口の方へ移動していた。

ミカを抱え上げ、3人に背を見せないように。

アクティースはそんな冒険者を、微笑んだまま見詰めていた。
いつでもお前如き始末できるのだと、言わんばかりに。

「アクティース様。」

不意に口を開いたミカに、冒険者もクーナ達もギョツとした。
唯一平然としているのはアクティースのみだ。

「てめえ！ 勝手に喋るんじゃない！」

そう大声で喚くが、冒険者にミカを黙らせる手段は無い。
片腕でミカを抱え上げて固定し、片腕でダガーをミカに押し付けているのだから。

しかし、そのダガーを下手に外すと、いざと言う時に間に合わない。

冒険者は怒鳴るしか方法が無かった。

「後をお願いします。」

そう言うなり、自由に動く肘から先で自分の体を抱えている腕を掴んで体を固定すると、ダガーに喉を押し付けるようにしてからツイッと横に上体をずらした。

「ミカ!？」

驚きの余りクーナが叫び、何が起きたのか冒険者が理解する暇もなく、ピュウッと、ミカの喉から血が噴き出した。

「何をお前!？」

動揺した冒険者がダガーを喉から放した瞬間、その腕がベキッと後ろへへし折られた。

そして激痛にミカの体を冒険者が取り落とした瞬間、今度はその身が後ろに弾け飛び、後ろの壁に叩きつけられる。

「クーナ!!!」

アクティースがそう叫んだ瞬間、クーナは弾かれたようにミカの下へ駆け付け手当を始め、ルパとメレンダが冒険者との間に立ち塞がる。

「下らぬゴミ如きが、よくもわらわの巫女に手出ししてくれたものよ。 楽に死ねると思うなど、先ほど言うたな？」

そう言いながらゆっくりとアクティースが歩み寄ると、冒険者は折れた腕が持ったままのダガーをなんとか無事な方の手に取ると、怯えた表情のまま身構えた。

「たたた、助けてくれ・・・!!」

「聞こえぬな。」

再び冒険者の体が、今度は神殿奥の方へ弾き飛ぶ。

折れた腕を下敷きにして床を滑ったため、冒険者は激痛にのたうちまわった。

その体が再び弾け飛び、今度はクーナ達がいる場所とは正反対の壁へ叩き付けられる。

「貴様のようなゴミはさぞ不味かろうな。消えろ。」

怒りに眦を釣り上げアクティースがそう言った瞬間、冒険者達の姿は消え失せた。

それからクーナ達の下へ歩み寄り、ミカの傍らに片膝を付き、その容態を見てからクーナを見る。

「どうじゃ？」

「なんとか間に合いました。」

クーナはそう言うてから、ホッと一息ついた。

「そうか。」

アクティースはそう言うのと、スクツと立ち上がり、巫女3人を見回しながら、

「クーナ、ルパ、メレンダ。ご苦労であった。」

そして、改めてミカを見下ろし、

「大馬鹿者。勝手な事をしおって。お前はまだ普通の人間なのじゃ。死ぬ気か？」

「・・・それで・・・お役に・・・立てる・・・なら・・・。」

「それが大馬鹿者じゃと言うておるのじゃ。お前のような大馬鹿者、傍にいただけで気が休まらん。その性格を治すまで、どこぞへ消えておれ！」

そう最後は苛立たしげに言い捨てると、アクティースは奥へとスタスタ歩いて消えてしまった。

その後ろ姿を見送った後、ミカはツウツと一筋涙を流し。

「また・・・嫌われ・・・。」

そんな事は無い、と、クーナが言おうとした時には、ミカはグツタリとして気を失ってしまった。

タキシムを退治して欲しい。

慌てて駆け込んで来た中年の男が入り口でそう叫ぶと、冒険者の宿の1階で夕食と酒を楽しんでいた冒険者達は、約半数が動きを凍り付け、残った半数はキョトンとした。

「頼む！ 村にタキシムが！！」

「まああんた、落ち着きなさい。 何がどうしたんだね？」

マスターが困った顔をしながら、とにかくその中年をカウンターへ導き座らせ水を出す。

「タキシムってなんだ？」

ラテルが物凄く不思議そうな顔で聞くと、横でフーニスもウンウンと頷いている。

酒場の空気が一変したので、どんな凄い魔物かと思ったのだ。

今日の宿はかなり冒険者が宿泊しており、1階は人の熱気で暑いほどだったにもかかわらず、その名を聞くなり一瞬にして場の空気が一変したのだから疑問にも思うだろう。

「正直言って、やり合いたくは無い魔物ですね。」

「そうだな。 やっかいな相手だ。」

「だから、2人で納得してないで教えてくれよ。」

「そうだよ。 あたしも聞いた事無いしさ。」

ロスカとルーケは顔を見合わせると、ロスカが頷いて、仲間に話し始めた。

キョトンとした冒険者達はつまり、タキシムを知らない人々であった。

「タキシムとはゾンビの一種です。 生前に強い怨念を持ちながら死ぬと、墓から這い出て来てタキシムになると言われています。」

「それって、ゾンビやスケルトンとどう違うんだ？」

「ゾンビやスケルトンの場合、ネクロマンサー妖術師と呼ばれる、特殊な黒魔法により遺体に何かの魂を入れて使役する、いわばゴーレムみたいなものです。 タキシムはどちらかと言うと、己の遺体に依存する幽霊ゴーストみたいなもので、白魔法の浄化、またはタキシムを満足させなければ

ばなりません。」

「白魔法の浄化は中級魔法だが、生憎俺達は誰も使えない。そう
なると満足させなければならんだが・・・。」

浄化の魔法は、通常1mの円程度しか効果は無い。

不浄なる物などを浄化し、アンデットモンスターなどを浄化する力
があるが、ホーリーライトよりも威力は弱い。

だが持続時間が長く、バンパイアなどの復活に必要な不浄土も浄化
できる。

また、同じ中級魔法にアンデット攻撃魔法、ホーリーライトがある
が、こちらは数秒光を発し、ダメージ的にはこちらの方が強力では
ある。

ルーケ達はどちらも使い手がないが、ホーリーライトを撃てる白
魔法使いがいれば戦闘を有利に進められるし、浄化で怨念を浄化し
て昇天させる事も出来るのだが。

「満足って、どうすんだ？」

「グールと一緒に、人の血肉を与えろとか言わないでよ？」

「ある意味当たっていますけどね。タキシムが望むのは、怨念を
抱く相手の命です。つまり、タキシムを満足させるには、タキシ
ム自身が恨みをはらすか、誰かが代わりにやらなければなりません。」

「それってつまり・・・代行殺人って事？」

「そう言う事だ、フーニス。中級魔法を扱える人間は、どの分野
でもそうはいない。力押ししかできないうちのパーティでは分が
悪い相手だな。」

「ようは、請け負わなければいいって事でしょ？　なら問題ないじ
ゃん。」

フーニスがそう言って、乗り出していた体を起こし、椅子にもたれ
かかった瞬間。

「おいルーケ。請け負わないか？」

マスターはそう声をかけた。

ゲツと言わんばかりの顔をするラテルとフーニスに対し、ロスカとルーケは苦笑いを浮かべる。

2人は予想していたからだ。

「分かった、請け負おう。」

そうルーケが答え、フーニスが文句を言おうとした途端、再び宿の戸をバンッ！ と押し開けて、若い冒険者の一人が飛び込んで来た。「アイマイミイマインがでたぞお！！」

今度はルーケ達を除く、酒場にいた全員が席を立った。

「どこだ！？」

「隣の国だ！」

酒場内は途端に慌ただしくなり、バタバタと2階に駆け上がる者や自宅へ装備を取りに戻る者でこった返す。

「な、なんだい！？ そのアイマイミイマインって！」

突然行動を起こし始めた冒険者達に、フーニスは仰天した。

「そういや、俺も知りたいな。ロスカ、何か知っているか？」

愚者の舞い 2-29

ロスカはちよつと目を見開き驚くと、一つ咳払いしてから説明を始めた。

「アイマイミイマインとは、最弱にして最強と言われる魔物です。」

「「「最弱にして最強?」」」

思わず他3人の声が見事にハモる。

そんな矛盾した説明があり得るか? と、顔を見合わせる。

「そうとしか言いようの無い存在なのです。」

「そうとしか言いようがないって・・・どういう事なのさ?」

「狐に包まれたような感じだぜそりゃあ。」

「容姿とか特徴とかはどうなんだ?」

「正直に申し上げます。」

ロスカが至極真面目にそう前提して、仲間を見回した。

「・・・私もそれしか存じません。」

ガタアッ! と、三人揃ってテーブルに突っ伏した。

「もったいぶってそれだけかよっ!!」

綺麗な顔を料理の中に突っ込んだため、物凄い形相のフーニスがそう詰め寄ると、ロスカは苦笑いを浮かべながらその肩をガツシリと掴み、フーニスの座っていた椅子に押し戻す。

魔術師で細身なのでひ弱そうに見えるが、それなりにロスカは腕力があり、実はフーニスより力持ちだったりする。

「まあまあ落ち着いて下さい。それだけ名前だけ知れ渡っている魔物なのですよ。」

「名前だけ知れ渡っている? リッチとかロック鳥みたいなものか?」

タオルをフーニスに渡しながらルーケがそう聞くと、ロスカは頷き、「そうですね。とにかく神出鬼没で、長時間出現した記録もあります。ただ、出現した時の被害は甚大で、見た者の証言は毎回

変わっています。」

「毎回違っていてどういうこった？ 不定形な魔物なのか？ ゴーストのような？」

元々その手の知識に疎いラテルが、そう言ってからコップの酒を一息に飲み干す。

「どうも肉体はあるのですが、出現するたびに容姿と能力が違みたいんです。ですから、詳しい事が分からないのです。それに、対策も立てられません。」

「能力が違ふんじゃくなく。」

「そんなわけのわかんない魔物はどうでもいいの！」

ラテルがため息交じりでそう言うのと、バンッ！ とフーニスがテーブルを叩いて会話を断ち切った。

「今のあたし達の問題はタキシムでしょうが。致命的に決定打が無いのに請け負ってどうするのさ？ ルーケ？」

汚れをふき取ったタオルを突き返しつつ睨み付けると、ルーケはニヤリと笑った。

闇に包まれた室の中、水晶を覗き込んでいたポシスが大きくため息をついた。

「シヨコ様く、まうた失敗ですく……。」

水晶の中には、絶望的な顔をしながらも、なんとか生き延びようとあがいている冒険者がいた。

ポシスは何組かの冒険者を唆し、アクティースの下へ向かわせたのだが、全て撃退された。

結界内の様子は見れないが、外に放り出された者は感知できる。

ある者はファレーズ山頂の上空100mに、ある者は海洋のど真ん中に捨てられた。

大半は結界の中から出て来る事さえ無かったが。

「人間にあやつを倒せるとは、最初から期待などしてはいないさ。」

「でも、どうしますか？ もう声をかけた冒険者は残っていません

けど。」

やがて、水晶の中に映っていた冒険者は海面に見えなくなり、ポシスは水晶を消した。

「しばらく声をかけても無駄だろう。そろそろ面倒臭くなって、結界入口の場所を変える筈だ。また暫く、あの男をマークしておけば良い。」

「そう言えば、魔法使いに毒薬渡したのに行かなかったですね。奴ら。」

「フッ。 どうでもいいさ。 それよりポシス。 暫く旅に出ぬか？」

突然の提案に、ポシスはキョトンとする。

「旅・・・ですか？」

「そうだ。 大陸中を歩き回り、情報を仕入れなければな。」
室の中でも、情報はそれなりに手に入る。

それはポシスの操る遠見の水晶球とわみがあるからだ。
だが、映像だけで音は聞こえない。

噂などの情報は、人間などに聞くしかないのだ。

「暫く散策をし、力を溜めながら色々画策するのも楽しかろう。」

心に闇を抱えている者は、そこら中にいる事だしな。 クククク。
」

歪みながらも、心底楽しそうに笑うシヨコラ。
その尻からは、9本の淡く輝く尾が出ていた。

命を失った筈の肉体はノソリ、ノソリと動き、腐敗した体は物凄い臭気を発していた。

「お願い！ もう止めてフェムル！！ あなたは死んだのよ！！」
タキシムとなった者の名はフェムル。

勇敢な騎士だったが、新婚初夜、過去に彼によって捕縛され、処刑された山賊の仲間が家を襲撃した。

上級騎士ではなかったフェムルは、大きな館などに住む事も無く、

ごく普通の家に住んでいた。

執事などはおらず、身の回りの世話をする若い騎士見習い一人が一緒に住んでいただけ。

つまり、普通の下級騎士だった。

新妻の作った夕食を3人は堪能し、寝室に連れ立って入った瞬間、待ち構えていた山賊に襲われた。

裏切り、山賊を導いたのは、信賴していた騎士見習いだった。

フェムルは気絶させられた後、縛り上げられ、気絶から回復するのを待つてから山賊達は彼の妻を凌辱して見せた。

激怒と絶望に、フェムルはバーサーカーになりかけた。

それをいち早く察知した騎士見習いが、フェムルの心臓を背後から一突き。

その凶器は、フェムルの愛剣だった。

その剣は、彼の胸に置かれて共に埋葬され、今は彼の右手にある。

「あなたはもう死んだのよ！　お願い！　静かに眠って！！」

しかし、かつて愛した妻の声も、彼には届いていなかった。

あと一人で、全て恨みを晴らせる。

その対象は今、目の前にいた。

フェムルの失われた眼窩はシツカリと騎士見習いだった少年に向けられ、微動だにしない。

「どうすんの？　ルーケ。」

そう聞くフーニスの足元には、山賊達の亡き骸。

洞窟に住んでいた山賊達を襲撃していた所へ、やっと追い付いたところだったのだが。

恨みを晴らせば、タキシムは昇天するから問題は無い。

裏切りの果ての因果応報だけに、フーニスは少年を助けようと言う気はまったく無い。

それはラテルも同様だ。

ロスカは迷っているようだが。

ただ計算外だったのは、彼の妻が追いかけて来た事だ。

日中、情報収集していたルーケ達の後を付けて来てしまった。捜索に集中して、追跡に気が付かなかったなど、不手際もいいところだが。

ルーケはスイツと妻の前へ身を乗り出すと、泣き叫んでいたその目を見据えた。

「あなたはもうしたいですか？」

「ど……どうって……彼を、彼を止めて！」

「彼を止めるには、倒すしかありません。それでよろしいですか？」

「面倒臭い事してるねえ。」

フーニス茶化すようにそう言うが、ルーケも誰も取り合わない。

「説得してよ！ これ以上彼に罪を重ねさせないで！！」

タキシムとバーサーカーには、共通点がある。

タキシムは恨み、バーサーカーは怒り、共に強いとそうなるのだが、最終的に力尽きた時、その魂は消滅すると言われている。

恨みと怒り、自らの強すぎる感情の炎に焼き尽されて。

愚者の舞い 2-30

ルーケはフェムルの元妻である娘を見据えたまま、

「正直、絶対に助けられるとは断言できない。だが、信じてもらえますか。」

フリーニスではないが、ルーケ達はこのまま見ているだけで依頼達成できるのだ。

フェムルは既に死んでいるのだから、その魂が消滅して、不死となった肉体が昇天しようがどうしようが知った事ではない。

にじり寄るフェムルのタキシムと、それに追われて腰を抜かし、這いつくばって逃げる元騎士見習いを交互に見て、娘は強く頷いた。

「お願いします！」

その返事を聞くや、ルーケは身を翻して抜剣し、即座にフェムルに斬りかかった。

目的はまず、フェムルの攻撃手段を奪う事。

つまり、利き腕である、剣を握る右腕を切り落とす。

だがフェムルは生前、優秀な騎士だった。

その動きの遅さからは想像も出来ないほど、剣の腕は確かだった。侮ってはいなかったが、弾き返された剣の強さで手が痺れる。

「フェムル。俺はお前を可哀相に思う。だからこそ、恨みに縛られず永久に眠れ。」

フェムルは剣を弾き返した後、ジッと動きを止めてルーケを見やる。これ幸いと逃げようとした元騎士見習いは、ラテルとフリーニスが捕まえて縛り上げた。

最悪、この少年を差し出さなければならぬのだから当然だ。

町の領主には、先に話を通してあるので問題は無い。

罪人である元騎士見習い如きと、善良なる領民を引き換えに出来る筈もない。

「・・・お前に・・・何が・・・出来る・・・。」

唐突に喋ったフェムルに、ルーケを除く全員が驚いた。

「復讐を。俺にはお前に変わり、復讐を遂げる事が出来る。」

「何に・・・誓う・・・。」

「お前の剣に誓おう。授けてはくれないか？ お前の意思、剣に生きたその志も、俺が受け継ごう。」

フェムルは暫く逡巡し、やがて、自らの剣を足元に付き立てた。

「お前の・・・瞳に・・・真実・・・見た。」

ボソツと、止まっていた時が急に訪れたように、剣に寄りそうようにフェムルの体は急激に土となり頽れた。

「安らかに眠れ。騎士フェムルよ。」

ルーケは静かにそう言うのと、山賊の血に塗れたその剣を抜き取った。

「結局、用意した聖水使わなくてすんだね。」

ルーケの提案した対策は、聖水を使う事だった。

不死モンスターは、例に漏れず聖水に弱い。

硫酸のような効果があるのだが、生憎、浄化能力は低い。

タキシムになった者は安心させれば成仏するので、口約束でも約束すれば依頼が達成できると踏んだのだが・・・。

生前の能力が高かったらしく、まさかこんなに早く犯人の住処まで攻め込んでいるとは予想もしていなかった。

夜間、彷徨うタキシムを発見し、説得して駄目なら聖水を使って戦い滅ぼす算段だったのだが、使わないに越した事は無いので、フーニスは純粹に儲けたと考えていた。

聖水だって安くは無い。

それに聖水を作れる僧侶など、この世界にはほとんどいないのだから貴重品でもある。

そんなに必要とされる物ではないから、物価はそうでもないが、それでも返品すれば金が返って来るし、使わないに越した事は無い。依頼料内で必要な道具なども賄わなければならぬのだから。

「おい。ところでこいつはどうするんだ？」

ラテルがそう言いながら指差す先、縛られた元見習い騎士は、ビク

リと体を震わせた。

「やっぱりよ」

二人揃って少年を見下ろしていたその視界内に、不意に剣が突き出され、その左胸を突き刺した。

「「!?!」」

驚愕して言いかけた言葉を飲み込み、フーニスとラテルが剣の持ち主を見ると、静かな眼差しで見習い騎士を見詰めるルーケがいた。

「・・・何も殺す必要はなかったでしょう?」

チラッとルーケはロスカを見てから再び少年に視線を戻し、

「お前もタキシムになるか? いいだろう。俺はお前を葬り去るのに何の躊躇いもない。いつでもこい。」

少年は、驚愕と苦痛に目を見開き、ルーケを見詰めていたが、やがて諦めたように目を瞑って絶命した。

その瞬間、役目を終えた剣は、パキンと澄んだ音を立てて中頃で折れた。

「俺はフェムルに約束したぜ、ロスカ。それに、こいつを領主に突き出しても、結局死刑は変わらない。なら、恨みを晴らした方が、彼のためにもなる。」

「しかし、フェムルが倒すのと、あなたが倒すのでは意味が違うでしょう。」

「一緒さ。フェムルの剣が折れた事がその証拠。彼は肉体が滅んでも、剣に魂を宿らせて見ていたのさ。これで、本当に成仏できた。」

ルーケはそう言うのと、折れた剣を土となったフェムルの成れの果ての上にそっと置いた。

「あの、ありがとうございます。これで、彼は・・・。」

元妻であった娘がそう言いながら頭を下げると、ルーケはポンとその肩を軽く叩き、

「因果応報、ですよ。それより町まで送りましょう。あなたのようなお嬢さんが出歩く時間ではありませんよ。」

「はい。」

時刻は深夜過ぎ、普通の娘が出歩く時間では、確かに無い。

「・・・ここにも一応、お嬢さんがいるんだけどね？」

「行き遅れはどうでもいいんだろ。」

ボソッと呟いたフーニスにラテルが軽く答えた瞬間、問答無用で剥き出しの頬に拳を叩き込んだ。

人外のスピードで、拳と蹴りの応酬をするルパとメレンダ。

その二人の邪魔にならない場所で、クーナがミカに基礎を教えた。た。

いつもの光景である。

そんなミカとクーナのやり取りを眺めつつ、黙って立っていたが・・・。

「今はそんな基礎よりも、少しやりあった方がいいんじゃないか？」

巫女4人が、心底驚いて動きを止め、こっちを見る。

「ししし始原の悪魔様！？　いつからそこに！？」

「いつからって、それなりに前からここに立ってたぞ。それにし

ても、あの鉄面皮クーナが心底驚いた姿の方が貴重かもな。」

そう言ってカラカラ笑うと、クーナの顔が怒りで赤くなった。

その後ろで、ルパとメレンダがジッと警戒して身構えている。

「ミカと言ったか？　おいで。」

そう言いながら、チョイチョイと手招きする。

「え？　あの・・・。」

「悩み・迷いを抱えている時は、思いつきり体を動かした方がスッキリするぜ？」

「でも・・・。」

「あの・・・始原の悪魔様？　邪魔はしないでいただけますか？」

「邪魔じゃないさ。お前の言いたい事も分かるが、悩みながらそんな事やったって何にもなんねえよ。頭に覚える余裕が無いんだからな。」

「しかし、今は基礎こそ大事です。」

「その基礎を覚える前提が出来てねえんだ。武術の必要性は分かっているようだが、早く覚える必要性に焦る心と、悩み・迷う心がせめぎ合っているじゃねえか。一緒に暮らしていて気が付いていないのか？」

「それは分かっていますが・・・。」

「いいからかかってこいや。そうだ、お前らもたまには遊び相手を変えてみる。」

「相手を変える??？」

「どこにいるの？」

ルパとメレンダが、その提案に顔を見合わせた瞬間、目の前に3体の人形が出現した。

愚者の舞い 2-31

ポカーンと見る事しかできないミカ。

いつも仲間の練習風景を見ていたが、本気になるとここまで違うものなのかと驚嘆する。

相手は人形の変化した竜巫女。

火炎は吹くし、動きは目にも止まらぬ速さだしで、とてもミカにどうこうできるレベルでは無い。

相手がほぼ同じ実力と言うのもあるが、人形に勝てば献上用の上級酒をくれると言われ、ルパとメレンダは大張り切りだ。

クーナは仕方なくと言った感じで、あまり乗り気ではないようだが。「さて、お前も始めようか。 どちらでもかかってきな。」

そう言われても、あの3人が同時にかかって勝てない相手である。ただの人間のミカに、どうこうできる相手でも無く。

また、相手はひょうきんな性格ながらも神である。

殴りかかって良い相手とはとても思えず、躊躇していると。

「なんだ？ 戦う理由でも欲しいのか？ それともお前も何か欲しいか？」

「いえ、あの・・・。」

「勝てない相手じゃつまらんか？ ま、それも一つの理由だわな。それにしても。」

そう言うと、改めてミカの頭から爪先まで、爪先から頭の上まで丹念に見てから、

「あんだってあいつもこんな娘を飼ってるかな。」

「え？」

「確かに食べても美味くなさそうだが。 脂は乗ってないし、筋肉もなさそうだ。 骨はしっかりしてそうだがな。」

「あの・・・。」

「顔立ちだって特別整っているわけでなし、何が気にいったんだか。」

あいつも年老いてぼけたか？ かなりの年齢だしなあ。」

「あの、私の事はともかく、アクティース様の悪口は言わないで下さい。」

「なんだ、お前の存在も認めてくれん薄情な主人でも大事なのか？」

「・・・そうです。」

「よせよせ。 あいつは気紛れな上に頑固だからな。 もしかしたら食い頃になるまで飼い、食べようと思ってるのかも知れん。 豚みたいにな。」

「それでも構いません。」

「ほう。 食べて欲しいのか？」

「何が何でも食べられたいとは思いません。 でも、居て役に立たないなら、そうしていただきたいです。」

アラムは真剣な眼差しでそう言い切るミカの目をジッと見つめ返し、やがて、ニヤツと笑った。

「いいか？ 正拳突きは、しっかりと腰を入れ、腕を突き出す。

バランスを崩さないようにな。 ほれ、やってみ。」

「え？ あの・・・。」

「そこまでしっかり思い定めていて何を迷う。 お前はアクティースの餌か巫女、どちらかに成りたいのだろう？ なら、そのための行動を起こせば良い。」

「その行動が分からないんです。 どうしたらいいのか・・・。」

「餌になりたいなら簡単だ。 俺に抱かれればいい。 あいつは穢れた体の娘を好かない。 簡単に捨ててくれるぜ？」

そう言うと、ミカは顔を赤らめた。

13歳と言えども、その手の知識は当然ある。

「巫女になりたいなら諦めずに待つんだな。 そのうち気紛れであつさり巫女にするかも知れん。」

いつまで待てばいいのだろう。

もう数ヶ月も過ぎていると言うのに。

「しないかもしれんが。」

アッサリそう言われ、カクツと項垂れる。

「信じる心は力となる。 答えが出るまで揺るがない事だな。」

「揺るがない事……。 でも私、自信が無いのです。」

「自信？ なんの？」

「私は、アクティース様にとって必要なのでしょうか。 いえ、ここに居てもいいのでしょうか。」

俯きながらそう言うと、不意にポンと頭に手を置かれた。

「俺から言っていていいか分かんが、一つだけ教えてやる。 あいつは死にたがる奴を好まない。 命の重さを良く知っているからだ。」

その事は忘れるな。」

「死にたがる……。命の重さ……。」

「じゃなかったら、あいつがこんな辺鄙な場所に住んでいないよ。」
バゴン！ と、神殿の壁が突然粉碎され、ミカは振り向いた。

そこには、ルパが足だけ瓦礫の下から突き出し、ピクピクと動いていた。

「おやまあ、クーナ以外は全滅か。」

見れば、肩で息をしながらも立っているのはクーナだけで、メレンダも床に伸びていた。

「またお前か。 壁まで壊しおって。」

「ようアクティース。 元気が余っているようだったから、ちと遊んでやったぜ。」

「やったぜではないわ。 とつとつ壁を直すがい。」

「へいへい。」

気の無い返事をしつつルパの下へ歩み寄り、ズボツと瓦礫の下から右手で片足を持って引き抜き、左人差し指をチョイッと振るなり壁は瞬く間に元に戻った。

「さて、今日の勝者はクーナだ。 ほれ。」

そう言いつつ、腰に差してあった酒筒をクーナに放る。

「アクティースに渡すなり、自分で飲むなり好きにしな。」

「ところで魔王。 最近猫臭くて敵わぬのじゃが。 どうにかせい。」

「馬鹿言うな。なんで俺がそんな事しなきゃならんのだ。やりたきゃ自分でやれ。結界の入口は変えておいたから、暫くは平気だろうけどな。それにあいづら、旅に出ちまったし。」

「まったく、いつまで放置しておくのだ？ 管理者として職務怠慢であろう。」

「あの……。」

ミカが恐る恐る口を挟むが、2人とも意に介さない。

「あのなあ、お前が他人の事言えるのか？」

「わらわはこうやって、しっかりと守護しておるではないか。」

「あの……。」

「お前の役目は一国の守護か？ 夫婦で人間全般の指導係りだろうが。」

「そんなもの、あつて無きが如であろうが。そもそも今更何を教えろと言うのじゃ？」

「あの……。」

「俺に聞くなよ。そのでけえ体と脳みそはダテかよ。少しは考えて行動しろよ。」

「面倒臭いから考えるのは嫌じゃ。」

「あの……魔王様？ アクティース様？」

「おまゝなあ。脳みそ腐るんじゃないか？ 寝てぼっかりで。」

たまには肉体労働でもして、爽やかな汗でも流せよ。ネグロミてえに。」

「なんじゃ。わらわの体でも見たいのか？」

そう言うなり、アクティースはズバツと服を脱ぎ捨てた。

「どうじゃ、美しいであろうが。存分に見るがよいぞ。」

「作り物なんざ見たくもねえ。ってか、意味が違うじゃねえか。」
アクティースに限らず、竜は己の体の強靱さと美しさに絶大な自信を持っている。

そして、見せたがる性質もある。

「魔王様！」

「ん？　なんだ？」

痺れを切らしたミカが大声を上げると、ヒョイツとアラムが振り返った。

「ルパさん、死んじゃいます。」

片足を持ってぶら下げたままなので、ルパは伸びた蛙のようにブラ／＼としていた。

当然下着も丸見えなのだが、気を失ったままなので、それは本人は気にしないし出来ない。

それよりも、壁に叩きつけられ気を失ったまま吊り下げられていたので、頭に血が昇って、すでに顔は真っ赤っかである。

アラムがパツと手を離し、頭をゴキツと打った衝撃で意識を取り戻したが。

愚者の舞い 2-32

半月にまではいかないものの、だいぶ欠けてきた月。

それを眺めながら、強大な力を持った2人の酒盛りは静かに続いていた。

巫女達は先に眠っているが、本来この2人は睡眠を必要とはしない。

「あの者ら・・・放置しておいてもよいのか？」

「シヨコラ達の事か？」

「そうじゃ。あの者達は、強大な力を持っておる。放っておいてよい存在とも思えぬがな。現に、お前の娘も殺されたのであるう？」

そう言われると、返す言葉も無いが・・・。

「正直言つて、俺はあまり、プリの死は悲しくないんだ。嫌いだったわけじゃなく、ただ、その意思を受け継いでいる子達がいるし、それに・・・。あいつは優しすぎた。」

アクティースはソツとアラムから視線を月に戻し、クイツと杯の酒を飲み干した。

「封印か。確かに、永遠に生きるには女であり過ぎたかもしれぬな、あの娘は。」

プリとはそんなに親しい間柄ではなかったが、面識はあったしクラスイーヴィーから話も聞いていた。

同じ悩みを抱えた者として、近親感も持っていたが、それゆえに親しくはしなかった。

自分もその悲しみに引き込まれそうに思えたからだ。

同性愛者にしろ異種族にしろ、相手をどんなに愛しても子を成せないのは、女としては悲しいものだ。

もっともアクティースの場合、竜同士であれば子を産む事も出来るし生ませる事も出来る。

竜は性別が無く、その都度必要に応じて性別も変化するからだ。

「で、あの狐どもを始末しない理由は他にもあるのだろうか？」

ツイッと視線をアラムに戻すと、アラムも横目で見つつ、苦笑いを浮かべた。

「まあ、な。実を言うと、あいつは世界の要かなめでもあるんだ。」

「要じゃと？ あの狐がか？」

「そうだ。九尾の狐に変化したシヨコは、理由があつて九尾にまで成長した。」

これは流石に予想外だったらしく、アクティースも驚きに少し目を見開く。

「シェーンを知っているか？」

「シェーン・・・？ 確か、お前の兄バーセと、異界へ行った娘じやな。」

「そうだ。魔界は異界から漏れ出る瘴気の受け皿。瘴気は魔物へと変化し、そのため少ない資源を求めあつて争いが収まる事はない。それは狙い通りだからいいが、その瘴気を無制限に垂れ流されても魔界がもたん。そのため調節弁が必要であり、それに兄貴とシェーンがなった。」

「それとどういう関係があるのじゃ？」

「魂だけでは、誰も覚えていない者がいないと、霧散しちゃうんだよ。」

死ぬと、人間の魂だけ冥界へ行くと言われている。

それは転生するための準備する場所でもあるからだが、実際には虫や動物の魂も冥界へは行くのだ。

何故冥界へ行くのかと言うと、自然界に魂が溢れかえってしまい、魂は死してすぐ生まれ変わる事になるので、前世での穢れを落とせず、邪悪な存在に成ってってしまうからだ。

悪人がその知恵を持ったまま生まれ変わったら、幼い頃から悪事を働くだろう。

そんな連中が増えれば増えるほど、まともに生きる事が愚かしくなり、連鎖的に奪うのが普通に成り、愛と常識を育む事を忘れる。

そのため、生前に犯した罪を浄化、または断罪するために冥界がある。

だが、異界へ行くと話は別だ。

濃厚な瘴気、つまり、アラム達の父親である原始の神の怒り・苦しみ・狂気などに侵され、肉体は存在出来ない。

そのため、強い魂でなければ存在出来ないのだ。

だが、魂は肉体と言う器が無いと、長くは存在出来ない。

例えるなら、袋の中の煙と同じなのだ。

異界で魂を存在させるのは縁^{えにし}。

つまり、その本人を慕う心が守っているのだ。

ちなみにその他の魂は、妖精は妖精界へ行き精霊に、魔物の魂は消滅する。

魔物の魂は、瘴気が集まっただけの不安定な存在だからだ。

「兄貴は軍将ラゴラを始め、子らが天界にいっぱいいるから問題はない。だがシェーンはシヨコラ以外、真に慕っている者はいないんだ。シヨコラはシェーンに名を与えられたため、力を持った。

そのために寿命が無くなり、今も生きている。」

「名など、動物に付ける者はそれなりにいよう？」

「愛情を込めないと、真の名にはならんよ。それに、シェーンは特別な奴だからな。」

「魔力はお前を凌駕しているとか聞いたが・・・？それが理由か？」

「そうだ。あいつこそ知識を得れば、第三の始原の神になった。人間が神になった、初めての存在に。その前に死んじまったけどな。」

その失望と悲しみはいかほどであったか、アクティースはそれなりに分かった。

アクティースも、今の力があの時あれば、故郷を失わずに済んだかもしれない。

時々、そう思うのだから。

「じゃが、お前だって慕っているのじゃろう？　その娘を。　お前が生きていれば、問題ないのではないか？」

そう言うと、アラムはシニカルな笑みを浮かべた。

「ところで、あの娘をどうするか決めたのか？　あの娘、死ぬ事なんとも思っていないどころか、死にたがっているようだが？」

「死ねば役目を果たせ、わらわを留める楔になるからの。」

「それを知っていて、なぜ結論を出さんのだ？　かなり悩んでいるようだが。」

アクティースとしては、ユキの姪であるミカをなんとか生きながらせたいという思いと、そばに置きたいと言う願望があった。

だが、すぐそこに迫っている死が、アクティースを迷わせる。

今日明日という短期間ではないが、何十年も生きられるわけではない。

まだ若いミカを共に死なせる事に、アクティースは迷い、悲しみ、そしてまた、迷う。

「最悪、他の」

「言うな。　わらわもそれは考えたのじゃ。　じゃが……。」

「そっか。　お前も辛いようだな。　だが、お前は主として決断しなければならん。　取り返しあるじのつかなくなる前にな。　じゃなければ……。」

「……わかっておる……。」

「俺の轍は、踏まんようにな。」

強大であるがゆえに知る悲しみ。

それは、アクティースよりも深い事を、共に知っていた……。

翌日、アクティースはミカに成人まで待てと言いついた。

契を交わすと明言したわけではなく、それまでに自分が答えを出すために。

タキシムを倒し、凱旋したルーケ達を、町の領主は大歓迎した。
正直、フェムルを慕っていた騎士や見習いが多く、退治しかねてい

ただ。

しかも強い。

そこへわざわざ町民が冒険者を雇ってくれた。

自分の懐は痛まず、批判と評価にも悪影響しないのだから歓迎もしよう。

そのため、ルーケ達は町を出るのが遅くなり、途中で夜になり野営する事になった。

町に留まり、1泊しても良かったし勧められもしたが、ルーケ達は断った。

ラテル以外、そんな状況で落ち着けなかったからだ。

「あゝあ。もったいなかったなあ。見たかルーケ、あの貴族の娘。絶対俺に気があったって。」

「妄想もそこまでしておきなくて。あんたじゃなくルーケを見てたんでしょうが。」

「いゝや。俺だったね。」

2人のやり取りに、ルーケは苦笑いを浮かべるしかない。

どうも強力な魔物と縁があるらしく、そうは見えないかもしれないが、ラテルはかなり強い戦士だ。

今日出迎えた騎士達の誰よりも強い事は、ルーケには分かっていた。それでもルーケにラテルが勝てないのは、強い相手には強い相手なりに勝てる方法が稽古ならあるからだ。

正真正銘敵として戦ったら、ルーケでは勝てないだろう。

それでも日頃の行いか、顔立ちは悪くないのにラテルはあまり女性にもてない。

愚者の舞い 2-33

翌朝、ルーケ達は寝具を仕舞うと、リセ目指して歩き始めた。

フーニスとラテルは相変わらず口喧嘩し、最後尾を歩くロスカがそのやり取りをにこやかに見詰める。

そんなやり取りを背で聞きながら、ルーケは黙々と歩いていた。

「あんときゃほんとまいったよ。あんたが入り口間違えるからさあ。」

「何言ってんだフーニス！ここだって断言したのはお前だろ！？

しかも後で間違いに気が付いた時、断言した根拠はなんだって聞いたら、直感とか答えやがって！」

「あたしがここだって言ったのは場所の事だよ！勝手に勘違いしたのはあんただろ！？」

元々この2人は、ルーケが会おうよりも先に一緒に行動していた。どうやって出会ったかは聞いていないが、何となく普通の出会いでは無いような気がする。

（そう言えば、アクティース達の住む神殿入口の場所を変えたって言ってたなあ。）

いつも不機嫌そうに自分を見るアクティースを、ルーケはあまり快く思っていないかった。

だが、あの美貌は呆れるほどである事は認めている。

長いストレートな銀髪はサラサラで、とても幻覚とは思えない。

顔立ちも完璧に整い、プロポーションも非の打ちどころがない。

まさに完璧と言ってよい容姿だ。

しかも体幅の長い布の真ん中に穴を開け、被っただけの特殊な民族衣装。

下着は丸見えで、本人がまったく気にしていないのがまた、目のやり場に困る。

巫女達は巫女達で、選りすぐった美女ばかり。

メレンダは身長が平均的で、三人の中でも中間に位置する程度。完全に行き遅れの年齢だが、巫女として生きる以上は結婚など関係ないであろう。

優しい顔立ちでありながらも子供っぽい言動のせいか、幼くも見える不思議な女性だ。

スタイルは一番胸が大きい、4人限定で見比べると、一番ふっくらしている。

ルパは外見こそ幼いが、とにかくちょこまか動く。

まるでネズミのように、あまりジツとしていない。

本当に成人しているのか疑問に思えるほどの童顔で、4人の中で一番体が細く、凹凸も無い、本当の意味で子供っぽい子だ。

そしてクーナ。

細すぎもせず、太りすぎもせず、アクティースに次いで一番理想的なスタイルではないだろうか。

釣り目なので冷たい印象を与えるが、しっかりとっていて落ちつきがあり、一般的に理想的な女性であろう。

元は貴族の娘らしく、気遣いなども出来る娘だ。

もともと、そんな娘がなんであんなに料理できるのか不思議ではあるが。

そんなクーナの全身を思い出している時、不意に悲鳴が聞こえた。

ルーケは立ち止まり、耳を澄ます。

「どうしたの？ ルーケ。」

「シッ！ 今悲鳴が聞こえた。 わからないか？」

そう聞き返され、フーニスも即座に集中する。

フーニスはシーフギルドで鍛錬を積んでいるので、一番耳が良い。

また、聞こえた物音の方角なども、ほぼ正確に知る事が出来る。

特別長い付き合いではないが、ルーケの意図をフーニスは完璧に読み取っていた。

「あっちの方向だね。 水の跳ねる音も聞こえる。」

「おいおい、金にもならねえのに行くのか？」

「当たり前だろ！ 魔物に誰か襲われているんだ！ 助けるぞ！！」
そう言うと、ルーケは真っ先にフーニスの示した方向へ駆け出した。
「まったく、本気かよ。」

「馬鹿だね。 謝礼が儲けになるじゃないか。」

「出会いは人の縁です。 何の役に立つかわかりませんよ。」

肩を竦めて呆れるラテルの横を、フーニスとロスカも走り抜けざま
そう言う。

「それもそうか。 おいフーニス！ 可愛い美女の声だったか！？」
ラテルも2人に続いて走り出しつつそう聞くと、返事は怒鳴り声で
返って来た。

「声で分かるか阿呆！！」

ルーケが駆け付けると、1人の少女が複数の蛇に襲われていた。
恐らく水浴びしているところをジャイアントスネークに襲われたに
違いない。

「今助けるぞ！！」

ルーケは瞬時にそう状況を判断すると、剣を抜くと同時に駆け出し
た。

「お待ちなさいルーケ！」

いつもは静かなロスカの緊迫した声に、ルーケも思わず足を止めて
振り返った。

「何故止める！？」

「よくごらんなさい！ あれは蛇ではありません！」

「蛇ではない！？」

ルーケは慌てて振り返ると、少女が蛇に押し掛かれて水中に沈め
られた瞬間だった。

「落ち着きなさい！ 我々では勝ち目がありませんよ。」

咄嗟に駆け出そうとしたルーケは最初の強い語気で再び足を止め、
次いで静かに言い放たれた言葉でとにかく突っ込む事を思いとどま
り、丹念に観察する。

ジャイアントスネークは確かに生命力があり簡単に倒せる相手ではないが、たかが数匹、勝てない相手ではないと思えるのだから・・・と、違和感に気が付いた。

良く見れば、まるで胴体が1つしかないようにも見える。

「ちよつと！ なにボケつとしてんのさ！？ 死体は感謝して金くれないよ！？」

「あなたも落ち着きなさいフーニス。 よくごらんなさい。 複数の蛇が少女を襲っているように見えるでしょう？」

「なんだって！？ 少女！？ そりゃ・・・（金持っていないよな。でも謝礼金は家に送り届ければ貰えるんじゃないかな・・・）え？ ように見える？」

その横に、やっとなテルが追いついて来て、全身で荒い息を付く。ルーケは厚皮鎧、ロスカはほぼ布のローブだけ、フーニスは薄い皮鎧。

プレートメーラルアーマーと呼ばれる、ほぼ全身が金属の鎧に覆われているラテルとは重量が違う。

いきなり戦闘に加われる状態でも無い。

「ごらんなさい。 複数の蛇が暴れているにもかかわらず、頭部付近だけ盛大に水しぶきが立っているだけです。 その後ろ、胴体の一つのような気がしませんか？」

「そう言われてみれば・・・そうも見える・・・かも？ でも、少女って？」

「ロスカ、そんな魔物の心当たりは？」

ルーケは油断なく水面を見つめつつ、3匹の蛇が頭を水面から出して警戒し始めたのを見て、ロスカの指摘が正しかった事を悟った。

「そう言った容姿の魔物に心当たりがありません。 恐らく、キメラか特殊な魔物と思います。」

「つまり？ どういう事さ？」

「早く逃げないと全滅すると言う事です。」

「「ええ！？」」

ラテルとフーニスの声が驚きにハモるが。

「ラテル、後方を守ってくれ。フーニス、その支援を。ロスカ、魔法を任せる。」

「……どうしてもやり合うつもりですか？」

「相手が逃がしてくれないってよ。」

ルーケがそう答えた瞬間、ザバアツと水を蹴散らして、2匹の蛇がルーケに飛びかかり、背後からガサツと2体の魔物が姿を現した。

「何だこいつは！？ でけえトカゲが2本足で立ってやがる！」

「リザードマンです！ 強いですから気を付けて！」

「気を付けるったってどう気を付けるんだよ！？」

フーニスも度肝を抜かれて、思わずそう聞くと、

「見た感じ戦士タイプですから、力もあり技量もあります！ そこに気を付けて下さい！」

「解説より弱点は！？」

フーニスが急いで懷からダガーを2本取り出して両手に構え、ロスカも杖を構える。

そして、ロスカは静かに告げた。

「ありません。」

愚者の舞い 2-34

構えた剣に噛みついた2匹の蛇をなんとかもぎ放そうとするが、ガツチリ銜えた蛇は微動だにしない。

仕方なく、剣を無理に使えるようにする事は諦め、奪われない事に専念する。

蛇の方はその行動が意外だったのか、不審そうにルーケを見上げた。

「姿を現したらどうだい？ それとも、水の中の方がいいのか？」

剣に噛みつく蛇の1匹の目を見つめ返しながらそう言うのと、やがて、水の中から音もなく少女の上半身が姿を現した。

見える範囲でだが、濡れた長い髪は全身に絡み付き、眼は澄んだ青色、髪は濃い茶色。

見た目は10才くらいの顔立ちだが、スタイルはなかなかだ。

そのアンバランスさこそが、不気味と言えば不気味だが。

整った顔立ちを除けば、普通の女の子が着るような服を着ているため、その辺の村で出会いそうな感じさえある。

「あなたは随分余裕があるのね。 仲間の事が気にならないの？」

「なるさ。」

そう答えつつも、ルーケは少女に視線を移した後、そのまま微動だにしない。

「じゃあ、なんで？ 諦めるの？」

「諦めちゃいない。 信じているだけさ。」

背後から、激しい剣戟の音が聞こえて来る。

リザードマンと仲間が戦いを始めた事が窺い知れた。

それでもルーケは、振り返る事さえしなかった。

「言うのは簡単よね。 でも、本当に大丈夫かしら？」

「振り向けばお前を救えない。 即座に攻撃に移るからな。」

少女は一瞬目を見開き、それから爆笑した。

「アハハハハ！ よく分かっているじゃない！ でもね、今のまま

でもあなたに勝ち目なんて無いのよ？ それを分かっているのかしら？」

「勝ち目がない？ どうしてそう思うんだい？」

「力の差があり過ぎるもの。あなたと私では勝負にさえならないわ。」

「ではなんでこうして攻撃をして来ないんだ？ お前が俺に対し、不安に思っているからだろう。いつもの人間と違う、何かがありそうだと。」

「せーいかーい。なにを企んでいるのかしら？ ウフフフフ。」
おどけてそう言う少女に対し、ルーケはある確信を持った。

「可哀相な娘だな。だがそれゆえに、俺はお前に言おう。もう止めるんだ。」

少女はキョトンとしてから、小首を傾げて不思議そうにルーケを見詰める。

「止める？ 何を？」

「リザードマンと共謀し、人を罠にかけて殺すのはよせ。このままでは、お前は死しても救われる事は無いぞ。」

「はあ？？ 何言ってるのあんた。そう言えばさっき、私を救うとか言ってたよね。あんた、神官？」

「いや。だが、俺はお前を倒す事で、魂を救える事を知っている。スキュラよ。」

上半身は美しい娘の姿をし、下半身は6匹の犬の頭を持つ魔物である。

だが、スキュラは魔界の瘴気から生まれ出る事は無く、呪いや毒によって成る。

この少女は蛇を使って攻撃して来る以上、下半身は蛇のようなのだが、ルーケには確信があった。

また、一つの胴体に複数の蛇の頭を持つ魔物は、ヒドラなどがある。しかし、少女の上半身を仮初でも持つ魔物はいないため、ロスカは

合成獣キメラだと思ったのだが・・・。

「・・・へえ。私をスキュラと言うの。下半身はこの通り・・・」

ザバアと水を押しのけ、現れ出たのは、腰から下が6匹の大蛇になった少女の下半身。

「犬じゃないみたいだけど？　アハハハハ♪」

「だが、キメラじゃあるまい？　君の名はハルマと言うんじゃないか？」

そう言った瞬間、少女の表情が驚愕に凍りついた。

「な・・・何を・・・！？」

「その顔を見る限り、どうやら正解のようだね。確か、あまりに残虐非道だったため、女神ボニートに呪われた魔女マギサによって、スキュラに変えられた天女^{ミンナ}がいたと聞いた。スキュラは自然発生しない筈だから、そうじゃないかと思ったんだ。」

「へ・・・へえ、随分物知りね。でも、この下半身の違いはどう説明してくれるのかしら？」

「一般的にスキュラと言われる魔物は、下半身が6匹の犬の頭。

だがそれは、魔界王の1人が独学で作った魔法による呪いだ。しかしマギサは聖魔戦争から生きて来た真正銘邪悪な魔女。本来のスキュラは下半身が蛇になる。違うかい。」

ハルマは驚きに目を見開いたまま、完全に戦意を喪失した。

そのため、下半身の蛇もやる気を無くし、剣を銜えていた2匹も放して元に戻って行った。

「もう、こんな事は止めるんだ。マギサの呪いで生きる道が狂ってしまったのは同情もする。だが、君が生きたために啜ってきた生き血」

「煩い！！」

バシヤア！　と、1匹の蛇が激しく水面を叩き、苛立たしげに他の蛇も攻撃的にのたうち蠢く。

「私を救う？　同情する？　虫けら如き餌である人間が？　笑わせ

んじゃないよ。綺麗事ばかり言っても、たんにあんたが生き延びたいからそう言ってるだけじゃない。笑わせないで欲しいわ。

言った筈よ。あんたじゃ私に勝てないと。」

「勝ち目がないと思いこませたいのだろうが、生憎俺には勝ち目がある。だが、倒すだけでは君は救えない。だから敢えてもう一度言おう。もう止めるんだ。」

「ふざけんじゃないよ！ あんたら人間だって生きるために動物を食うだろ！？ 私にゃ生きる権利も無いって言うのかい！ あの糞魔女の逆恨みでこんな姿になったって言うのに！！」

「俺には君を、元の姿に戻す事は出来ない。また、戻せる人は恐らく、この世界のどこにもいない。だが、ニンフだからこそ、魂は天に帰れる筈だ。」

「生憎、私はもう、天なんてどうでもいいのよ。マジサみたいな魔女をこの世に放ったボニートの居る天界などに、誰が戻るかつ！ お前も死ね！！」

ビュツと風を切り、6匹の蛇が同時にルーケに飛びかかり、同時にハルマの上半身もルーケに接近する。

ルーケはそれを見るや、剣を素早く上段に振り上げ、即座に振り下ろした。

「・・・ば・・・馬鹿じゃないの・・・？」

ハルマはルーケの行動が、信じられなかった。

「そんな事したって・・・私・・・。」

「吸いたければ、吸うがいい。だが、俺で最後にしてくれ。スキュラは永遠の命と共に、食事を取らなくても死なない筈だろ？

もう、これ以上罪を重ねるのは止めるんだ。それが、君のためさ。」

6匹の蛇は、ルーケの全身に牙を突き立て、ルーケの剣は・・・大地に垂直に突き立てられていた。

蛇の攻撃に吹き飛ばされないように、剣を大地に突き立て楔にする事で、耐えたのだ。

「馬鹿じゃないのあんだ!？ そんな事!　なんで知り合いでも何でもない私のためにそんな命を投げ出すなんて!」

「ハハハ・・・なんでかな。　師匠の図書室で勉強し過ぎたかな。

最初君を見た時、その瞳は悲しみに満たされ、逃^{のが}れたいと足掻いているように見えた。　だがそれは、蛇に襲われていたからではなく、生きる事それ自体に嘆き、悲しんでいる事に気が付いた。　そんな目を見てしまったら・・・手を、差し伸べたくならないか。」

ポトポト、と、力無く、ルーケに食らい付いていた蛇が再び大地に落ち、クルツとハルマはルーケに背を向けた。

「・・・1つ、教えてあげる。　スキュラはね、生き血を吸わないと生きていけないの。　魚でも動物でも、何でも構わない。　でもね。　幸せそうに生きる人間の生き血が、一番美味しいのよ。」
そう言って、再び振り返ったハルマは、完全に無表情だった。

「あなたの仲間もだいぶ苦戦しているわね。　あなたが死ねば、勝利は確実。」

シャアア、と、再び蛇達が鎌首を上げた。

「あなたの事、忘れない。　だから・・・頂戴。」

愚者の舞い 2-35 (前書き)

主要人物 紹介

ルーケ 主人公の若者。 80年前から時を超えてしまった。 外
見は二十歳。

ロスカ ルーケの仲間の魔法使い。 57歳

ラテル ルーケの仲間の戦士。 33歳

フーニス ルーケの仲間のシーフ。 27歳

一斉に飛びかかって来る大蛇の攻撃をなんとか避けながら、ルーケは腰に吊るしていた小瓶の蓋を外して剣に降り掛ける。

「やめろハルマ！」

「あんたもどうせ口先だけ。私の苦しみなど分かりはしない。

あなたに分かって？ 愛する者に化け物呼ばわりされる苦しみを。

あなたには分かって？ 嫉妬と逆恨みで全てを失う苦しみを。」

「分からん！ ああ確かに分からんさ！ だが、今の君は自分の不幸を他人を犠牲にして八つ当たりして晴らしているだけだ何故気が付かん！！」

ザンツ！ と、一振りで一氣に2つ、大蛇の頭を刎ね飛ばす。

「グウツ！ な、何をした！？」

「・・・ヒドラ程ではないが、スキュラの回復力も凄まじいものがある。だが、切り口を火で焼くか、浄化すれば再生は出来ない。」
切られた蛇は、斬り口からジュクジュクと沸騰するように血を沸き立たせ、再生はされなかった。

ルーケの隠していた手段、それは聖水。

アンデットを滅ぼす聖なる水だが、スキュラも呪いの産物。

スキュラの再生を阻止する事を、ルーケは知っていた。

まさか、タキシム対策に持って来たのをスキュラ相手に使うとは思っていなかったが。

大蛇の頭を切り落とされ、焼かれる痛みに怯んだハルマの大蛇を更に2匹切り落とすと、ルーケは一氣に飛びあがってハルマの上半身に接近し、渾身の力で横薙ぎに剣を振るった。

「・・・ばかな・・・。」

バシヤツと川に落ちるまで、ハルマは、信じられないと言う眼差しでルーケを見つめ続けた。

ルーケは上半身を失い、逃走を始めた下半身を少し見た後、ハルマ

の上半身に歩み寄って抱き上げた。

「思い出せ。生ある者の温もりを。天に帰り、今度こそ……幸せに。」

「……お前の……血を……。」

「吸いたければ吸え。だが、蘇生は……できないよ。」

ルーケは左手で抱きとめつつ、剣を川に突き立てると、手袋を脱いでハルマの口元に腕を押し付けた。

ズキリと、牙が皮膚を貫く痛みがあり、全身から力を吸い取られる虚脱感を感じる。

ハルマは少しの間血を吸ってから、口を放してルーケを見上げた。

「本当に馬鹿な人間だね、あんた。だけど……それが……心地いい……。」

ルーケの血を吸って少し回復したハルマはそう言うと、一瞬微笑みを浮かべた。

そして、砂のようになって消え失せた。

逃走していた下半身も、不意にバシッと倒れ、同じく消え失せる。ルーケはグッと左拳に残った砂を握りしめると、立ち上がって剣を引き抜き、リザードマンを睨みつけた。

「お前らの従うスキュラは倒した！ まだやるか！？ それならば俺が相手になるぞ！！」

ルーケが一喝すると、リザードマンは事態を掌握して一歩引いた。青ざめたルーケの鬼気迫った迫力と、スキュラを倒した事実。

やがて、暫し睨み合うと、身を翻して全力で駆け去って行った。

「フウ……。疲れたあ。」

フーニスが安堵し、肩の力を抜くと、ラテルもその場にへたり込んだ。

「いやはや、強いなりザードマンは。」

ロスカの方は、口も利けない位疲れ果て、杖に縋って立っているのがやっとの有様だった。

魔法を限界まで使ったためだ。

「安心してここに居座るわけにもいかないだろ、みんな。リザードマンは集団行動が基本の筈。早くここを離れよう。」
ルーケはそう言うのと、仲間を促して、ふらつく足を叱咤して立ち去った。

スキュラの吸血力は思ったより強く、本当にあの後リザードマンが襲って来たら、間違いなく抵抗する間もなく倒されていただろう。ともかく、ルーケ達は疲れ果てた体に鞭打つように、リザードマンの影に怯えながらリセへと逃げ込んだ。

聖水は聖なる水であり、魔や邪悪な物を破壊する力がある。浄化能力は魔法に比べれば弱いが、こと破壊の観点だけで見れば抜き出ているのだ。

そのため、呪いと言う魔の力を聖水の力で破壊されたため、スキュラは回復出来なかったのだ。

ロスカに聞かれ、そう説明すると、仲間三人は色々な感情が入り混じった吐息を漏らした。

「そう言う事は早く教えておくれよ。絶対絶命の状態で疲れたよ。」

「そうは言うけど、奥の手だからな。大声で教えるわけにいかないだろ？」

「そりゃそうだけどさ。」

「こいつ、いい歳してちびったかゴッ！」

「次はダガー投げるよ？」

横からふざけて言ったラテルの顔面に拳を叩きこみ、物凄くにこやかにそういうフーニスはかなり怖い。

町に帰って来るなり着替えて来ると家に帰ったのはそういう事かと納得はするが、ルーケとロスカは苦笑いを浮かべるだけで言及はしなかった。

ラテルもフーニスなら本当にやる事を知っているので、深追いする事はしない。

シーフであるフーニスの戦闘方法は、ダガーと言う切れ味鋭い刃物による攻撃だが、リザードマンは皮膚と言うか皮と言うか、とにかく防御力が高い。

誰が作るのか想像できないが、弱い胸や腹を守る鎧も身に付けている。

非力なフーニスでは傷を付ける事さえ安易ではなく、1匹を受け持つて牽制し、足止めする事で精いっぱいだったのだ。

ラテルが相手を倒した後、2対1で倒すのが勝算だったが、リザードマンとラテルの技量は互角で、すぐには駆け付けられなかった。

そのため、何度か間一髪と言う場面があり、鎧は薄く、自力で倒す手段が皆無だったフーニスにとっては悪夢のような時間だったに違いない。

「でも、よく相手がスキュラだとわかりましたね。」

「前に文献で読んでいたからさ。」

「ですが、相手の名前も知っているとは……。どこでそんな物を？」

ロスカは一番ルーケの近くに位置していたし、直接戦っていた訳ではないから、その会話も聞こえていたのだ。

「師匠の書物の中にあっただのさ。悲しいニンフの物語として……。」

ルーケは異次元の図書室で、倒したら有名になれそうな魔物を中心に調べていた。

それこそ英雄に成るために必要だと考えていたからだ。

その中にスキュラも含まれていた。

その特徴などを調べているうちに、関連文書としてハルマの事も書かれた文献が合ったのだ。

天女であるハルマは、人間との恋愛は禁断であった。

だが、時々許され自然界に來た時の逢瀬は、愛し合う二人にとって、最高に至福な時であった。

そのハルマを慕う若者を、マギサが目付けた。

マギサは何度も若者を誘惑したが、全く振り向いてもらえなかったため、ハルマに呪いをかけたのだ。

目の前で魔物に変わったハルマを、マギサの狙い通り、若者は化物と呼び、逃げた。

呪いにより、天界に帰れなくなったハルマを、率先して倒しにも来た。

心の荒んだハルマがどうやってリザードマンと知り合ったかは知らないが、当ての無い放浪に出たのはそのためだった。

その若者は、結局、マギサの餌となり果てたが、それはルーケも知らない事である。

ちなみに、こちらルークは知らなかったが、マギサは既にこの世にはいない。

30年ほど前、リョウが倒し、不死と獣人化の呪いをかけられ、一度マギサを倒しに来たプリとクラスィーヴィに出会ったかけになったのだが、それは別のお話である。

ともかく、闇に光に、表に裏に、ルークは知らず知らずに歴史に関わっている事になったのであった。

愚者の舞い 2-36

ルーケはそう説明を終えると、何気なしに腰の小袋に手をやった。そこには聖水が入っていたが、ハルマに対して使ってしまった。今は空の筈。

だが、何か入っている重みが、確かにあった。

「なんだ？」

ルーケは不思議に思いつつ、中の物を出してみた。

「なにそれ？」

目敏いフーニスにそう聞かれても、ルーケも知らない物だった。

淡く光る螺旋を中に封じ込めた、薄らと白い、小さな水晶玉。

見詰めるうちに、不意に心が安らぐ感じがして、物体の正体が分かった。

癒しの宝玉。

天女であるニンフが持つと言われる、癒しの玉。

（まさか？）

『私からのお礼よ。 助けてくれて、ありがとう・・・』

ルーケには優しい女性の声で、そう聞こえたような気がした。

「こんちわー。」

ルーケがそう声をかけると、奥からルパがヒョコツと顔を出した。

「あれ？ 今日1人？」

「そうですよルパさん。 師匠はなにやら忙しいそう。 それじゃ、荷物の確認をお願いします。」

そう言うと、ルーケは神殿の外へ足を向けた。

アクティースは人間男性、特に若い男の臭いが好きになれないため、いつもルーケは外へ出て確認が終わるのを待つ。

今日は強い雨が降っているので雨具もグッシヨリと濡れているが、そのへんは冒険者として鍛えている。

「あら、ルーケさんいらっしやいませ。」

「ルーケちゃん、いらっしやい♪」

そこへ、クーナとメレンダが来て挨拶し、メレンダは挨拶し終わると同時にルパと共に荷物を漁り始めた。

ルーケとしては苦笑いしか浮かばない。

「こんにちはクーナさん。それじゃ、確認終わったら声をかけて下さい。それと、今日はこの雨なので、水はいいですよ。」

「あ、ちよつと待って貰えますか？」

「え？」

呼び止めるとは珍しいなと足を止めると、クーナは急いで奥へ駆けて行った。

少し待つと、面倒臭そうな顔をしたアクティースと共に戻って来る。

「こんにちは、アクティース様。相変わらず美人ですね。」

にこやかにそう言うのと、

「わらわはいつも美しいぞ。 なんなら確認してみるか？」

そう言いつつ、服を脱ごうとするので慌ててクーナが止めた。

「アクティース様！ 相手はルーケさんですよ!？」

「・・・それがどうかしたのか？」

「どうかしたではありません。 その姿で脱ぐのは、人としては・・・

いけない事です。」

「そうか？ わらわとしては見て欲しいのじゃが。 じゃが、こや

つは男だし止めておこう。 今日は生憎の雨じゃ。 わらわ達は気

にならんが、か弱い人間のお前が風邪をひきでもしたら、魔王が腹

抱えて笑いそうじゃからな。 その辺りで雨宿りする事を許すぞ。」

「・・・あ・・・はい、すいません。 ありがとうございます。」

「なんじゃ？ 不思議そうな顔をして。」

「いえ、そう言う訳ではないのですが・・・匂いは気にならないのですか？」

「今日は雨じゃからな。 多少じゃから我慢をしてやろう。 クーナ、相手をしてやれ。 わらわは寝る。」

そう言うなり、クルツと身を翻して奥へ消えてしまった。

（・・・いったい、どういう・・・ただの気紛れかなあ・・・？）

そう思いつつ、その背が消えても見ていると、ふと、クーナの冷めた目線に気が付いた。

「えっと・・・どうしました？」

「止めない方が良かったですか？ 殿方は好きでしょうから？」
しばし、クーナが何を言っているのか理解できなかったが。

「そうですね・・・まあ、美しい女性の裸に興味が無いと言えば嘘ですけど、俺は今、そんな事に強い興味は無いですね。 仲間なら喜んだかもしれません。」

「興味が無い??」

「師匠から話を聞いていませんか？ 俺の事。」

「まったく何も。」

アッサリと答えられて、ルーケとしては拍子抜けする。

師匠の性格からして、てっきり喋っているとばかり思っていたのだが。

「俺は実は・・・」

ガシャーン。

奥の方で物音がするなり、クーナはダッシュで奥へと駆け出した。
取り残されたルーケとしては、話そびれて目が宙を彷徨う。

「ルパさん、ところで、ミカさんは？」

ふと、1人足りない事に気が付きそう声をかけ、思わず即座に目を背ける。

「これなんてメレンダ用じゃない？ フリフリのレース付いてるけど。」

「ん？ クーナちゃんじゃないかな？ あたしじゃ少し小さいかも？」

（ここで下着の選定始めないでくれなかなあ。）

そうは思いつつも、誰かが身に付ける所を想像してしまうのは、男として致し方が無い事ではないだろうか。

そして、不意に疑問が浮かんだ。

アクティースのあの体は、変身している見せかけだけの筈。本来は銀竜であるから、服など必要はない。

最初は服ごとああいう姿になっているのかと思っていたが、どうやら違うようだ。

と、言う事は・・・。

あの人の服なども、荷物に入っているのだろうか？ と。

ルーケは荷物を運ぶ前に、下着を除き、何を運んでいるか確認している。

途中で紛失などしていたら分かるというのが理由の一つではあるが、何を運んでいるか分からないというのも不気味だからだ。

少なくともその中に、アクティースが着るような服は無かった筈なのだ。

「あ、そうか。 でもなあ・・・。」

「でも、普通の人間だし、知ってるかもよ？」

考えごとに集中しているうちに、いつの間にか2人の会話が自分に向けられていたようだ。

ルーケが振り向くと、真剣な眼差しの2人と目が合った。

「な・・・なにか・・・？」

子供っぽい2人の事なので、何をしでかすか分からない不安がルーケにはあるので、ちよつと警戒する。

「あなた、薬草に詳しい？」

「薬草？ 多少なら知っているけど・・・。」

「風邪に効く薬草って知ってる？」

「風邪？ 風邪は万病の元と言われるくらいだから、症状によって違うけど。 誰が必要なんだい？」

そう聞いてから、必要なのは1人しかない事に気が付く。

それ以外のメンバーは、全員姿を見ているのだから。

「まあ、高熱が出て、下痢・おう吐、食欲が完全に無い状態じゃなければクチク草で・・・どうしたの？」

「・・・その症状なんだけど。」

ルパがそう言うと、ルーケは驚愕した。

「大変だ！ アクティース様！！」

ルーケの急変に、ルパとメレンダも動揺し、オロオロし始める。

「アクティース様！ 緊急事態です！！ 入りますよ！！」

ルーケが奥へ向かってそう叫ぶと、アクティースが心底面倒臭そうな顔で現れた。

愚者の舞い 2-37

「なんじゃ騒々しい。お前はそこで」

のんびり言う言うアクティースの言葉を途中で遮り、ルーケは慌てて言い募る。

「ミカさんが大変なんです！」

「ミカがどうした？」

ミカの名を出した瞬間、アクティースの態度と表情が引き締まった。
「ミカさんの症状を聞きました。高熱に下痢、おう吐、それに食欲が無いそうですね？」

「そう聞いておるが。それがどうしたのじゃ？ ただの風邪じゃろ？」

「今、この西の王国に広まっている流行病はやりやまいです。恐らく。」
流行病とは、現代で言う伝染病が大概そう言われる。

ウィルスなどが原因で成るが、医学の発達していない世界だから未知の存在であるため、正体不明の病気であり、死亡率は非常に高い。

「誰か白魔法をかけたけど、治らなかつたのではありませんか？
もしそうなら、恐らく流行病です。」

「それにかかるとうなると言うのじゃ？」

「大概の人は5日で亡くなります。ミカさんはまだ幼いので、もっと早いかと。」

そう言うと、アクティースの表情が凍りつく。

「容態を見せていただけませんか？ もし違うなら、薬草で助かるかもしれません。」

アクティースは無言で頷くと、ルパに手で合図した。
寝所へ案内しろと。

ルパはルーケの手を取ると、慌てて寝所へ駆けこんだ。

「ルーケさん！？ ここは寝所ですよ！？」

ミカの額に濡らした布を置いた瞬間、ルーケ達が駆けこんで来たの

で、クーナが驚きの声を上げる。

未婚女性の寝室に男性が入るなど、非常識も甚だしいので普通の反応ではある。

「クーナさん、ミカさんの容態は!？」

駆け込みなりルーケに息せき切って聞かれ、ルパと後から来たメレンダの表情にただならぬ事を悟り、即座に姿勢を正し返答する。

「3日前から変化はありません。高熱と各症状が続いています。」

「・・・やはり・・・。」

予想が当たり、ルーケは安堵と不安が半々の顔で頷き、ミカの傍に行く、

「ごめんねミカさん、失礼するよ。」

そう声をかけてから、掛け布団の中に少し手を入れ、腕を引っ張ります。

そして袖をまくると、脇の周辺に蕁麻疹じんましんのような発疹はっしんが密集してあった。

「アクティース様、この症状は間違いないです。この流行病は完全治癒の魔法でしか治りません。お願いします。」

どうやら予想外だったらしく、入口で立ち止まったメレンダの横で、様子を窺っていたアクティースの片眉が跳ね上がる。

「何がじゃ？」

「あの、何がじゃ、じゃなくてですね。完全治癒の魔法をお願いしたいのです。」

「わらわにか? 無理じゃ。」

「・・・え? 無理??」

「そうじゃ。わらわは白魔法は使えぬ。ここで白魔法が使えるのはクーナだけじゃが、クーナも初級しか使えぬ。」

「・・・ええ!?! 本当ですか!?!」

あまりに予想外の答えに、思わずルーケは絶叫する。

アクティースほどの力があれば、人間の扱える魔法など全て使えると思っていたが、どうやらそうではなかったようだ。

「そんな！？　だってアクティース様、人間に魔法も教えていたんでしょ！？」

「確かに教えていたが、わらわが教えていたのは黒・精霊くらいじゃ。白魔法は使ってはならぬという天界の盟約でな、使えない以上覚える必要はないと覚えておらぬのじゃ。」

申し訳なさそうな顔で、困ったと言わんばかりのアクティースに同情を覚えないでも無い。

だが、今はそんな事を言っている場合でも無い。

既に3日が経過している以上、もう一刻を争う筈だ。

「えっと、じゃあ、竜族の長である黄金竜様は？」

「メガロスも同じ理由で覚えておらぬ。お主に心当たりはないのか？」

「そう言われても・・・完全治癒は上級魔法だし・・・師匠にそれなら治るとこの間、聞いただけなので・・・。」

「そうじゃ！　魔王がおるではないか。魔王！！」

だが、珍しく今回は呼んでも来ない。

「何をしておるのじゃ！？　魔王！！　わらわが呼んでおるのじゃぞ！！」

「無理です、アクティース様。　師匠は今日、天界の用事とかで不在です。」

「なにぃ！？　なんで今日に限っておらんのじゃあ！！！！」

気持はわからないでも無いが、無茶苦茶な話ではある。

「師匠もいないし、俺にも心当たりは・・・。それに、近くにそんな人がいたら、長蛇の列でとても・・・。」

「あ奴はいつ帰って来るのじゃ！？」

「分かりません。天王様の呼び出しだそうで、その後娘の所でのんびりして来るとか言っていましたから・・・。」

「娘じゃと！？　・・・むう。」

天界にいるアラムの娘でのんびりして来ると言えば、今はボニートしかない。

だが、アクティースはボニートが苦手であった。

アクティースは自分の力に絶大なる自信があるが、ボニートの目に見つめられると、心の隙間と言うか、隠している弱い部分を発見し、包み込まれるような感じがするのだ。

その弱みを見せたくないという強がり、と、恥ずかしいという思いなどなど、くすぐったいような気持ち悪いような、そんな感覚になるのだ。

そのため、出来れば会いたくない相手なのである。

しかも立场上、ボニートは格上の立場にある。

それを言ったらアラムこそもっと上の立場に存在するのだが、自然界と言う、言わば自由な空間であるため、自然体の状態で話しているのだ。

また、相手もそういうアクティースだからこそ、甘受し受け入れわがままも聞いているのだが、流石に天界に乗り込んでまで、何とかしろとは言えない。

それこそ、自然界に住む権利を剥奪されても文句が言えない犯罪行為だ。

当のアラムはまったく気にしないだろうが、規則至上主義の天界が黙ってはいない。

2人のやり取りを聞きながら、ルパとメレンダは所在無げに佇むしかできず、クーナは後悔に唇を噛んだ。

クーナは貴族の家に生まれ、たしなみとして白魔法と拳闘志の技を学んだ。

貴族である以上、敵は多く、自分の身は自分で守らなければならないため、女性でも出来る技術に限定して習得し、また、魔法もどれか覚えるのが当たり前と言われていたので、治療が出来る白魔法を習得したのだ。

だが、初級を覚えた程度でアクティースに拾われたため、それ以上学ぶ必要が無かった。

竜巫女は永遠の命を持ち、病気になるず、怪我は驚異的な回復力で

治る。

使う必要が無いので学ばなかったのだ。

だが今は、それを後悔していた。

同じようにアクティースも後悔の念に囚われていたが、もし習得していても使えないので意味はない。

そのため、苦悩はもっと深いかもしれない。

ルーケも荒い息で苦しむミカの顔を見つつ、何か方法が無いか必死に知識を探っていた。

不意に、ルーケの方を向いていたクーナが方向を変え、ミカの額の布を脇に置いてあった水の入っている桶で布を濡らし、また額に乗せる。

そのため、ミカの顔の傍に、スラッとした白いクーナの太ももが短いスカートから伸びているのが視界に入る。

（相変わらず白い綺麗な足だなあ。）

不謹慎かもしれないが、素直にそう思った。

「さてよ？ 白い・・・そうだ！」

突然そう叫んで立ちあがったルーケに、思わずアクティースも巫女達もビクリとする。

「クーナさん！ この付近にまっ白い花が咲き、丸い葉の植物は無いですか！？」

「まっ白い花が咲き、丸い葉の植物・・・ですか？」

突然そう言われても、即座に浮かぶものでも無い。

クーナのみならず、ルパとメレンダも小首を傾げた。

「ムロン草の事じゃろうか？」

アクティースが不思議そうにそう聞くと、ルーケは勢い込んで振り返って頷いた。

「それです！　どこかこの付近に咲いている場所は無いですか!？」

「わらわは分からぬが・・・ムロン草は骨折などの際、湿布として使う葉草じゃが、何に使うのじゃ？」

「煎じて飲めば、痛み止めになるのはご存知ですか？」

もちろんと、言葉には出さずに頷く。

「普通は良く乾燥させたムロン草を煎じるんですが、火で焙ってから煎じると、この流行病の延命効果があるんです。　師匠が言っていたから間違いはないかと。」

「よし、わらわが手伝おう。」

即座の返事に、ルーケも巫女3人も仰天し、咄嗟に言葉が何も出て来ない。

「何を驚いておる？　わらわの鼻ならすぐに見つけられよう。　もつともこの雨じゃ。　あまり役には立たぬかも知れぬがの。」

「・・・一刻を争いますのでお願いします。　メレンダさんとルパさんは、お湯と火の用意をお願いします。　行きましょう!」

「慌てるでない。　メレンダ、籠を用意せい。　それなりに量がいるであろう?」

「あ、そうですね。　お願いします。」

行動が決まると、巫女達は即座にテキパキと動き始めた。

指示を出し終え、自分も行動に移そうとしたルーケの横で、不意にクーナが立ち上がると、深々と頭を下げた。

「アクティース様、ルーケさん、よろしくお願いします。」

まるで母親のようだな、と、チラツと思ったが、ルーケは力強く笑顔で頷いた。

「お任せ下さい。きっと助けて見せます。」

ルーケは脱いでいた雨具を再び身に纏うと、アクティースと共に外へ出た。

「アクティース様、分かりますか？」

「・・・この辺に匂いは無い。斜面に咲く花だけに、どこにあってもおかしくはないのじゃがな。その崖では咲きようもなからうし、そちらの斜面ならどうじゃ？」

「・・・駄目ですね。ほとんど草も生えてない。」

元々この辺りは、切り立った崖が多い。

だからこそ、生贄の神殿などが建てられたのだが・・・。

「結界を出ましよう、アクティース様。恐らく、結界内にはありません。」

「・・・？ 何故じゃ？」

「今注意して見て思ったんですが、ムロン草の生える場所にある筈の草などが見当たりません。結界内では見つからないと思います。」

「わかった。」

2人はそう判断すると、急いで結界から出て辺りを探索する。

だが、ムロン草はなかなか見つからなかった。

「本当にこの辺りにあるのか！？ どこにも見当たらずではないか！」

癩癩を起したアクティースが、火でも吹きそうな形相でルーケを睨む。

「仕方がないですよ。みんな、必死なんです。」

そんなアクティースの怒りを一身に浴びながら、ルーケは悲しげにその目を見つめ返す。

流行病と言われるほど、多くの患者が既に出ているのだ。

身近な者は藁にも縋る思いで、ムロン草が効くと聞けば採り漁るだろう。

今のルーケ達のように。

アクティースもその気持ちが分かるだけに、燃え上がった怒りのぶつけ場所を持て余し、さらにイライラする。

（今山賊なんて出たら、問答無用で瞬殺されそうだな。）

ルーケは苦笑いを浮かべつつ、そう思う。

「笑ってる暇があったら探さぬかあ！！」

「はい！」

アクティースとしても、イライラしている自覚はあるが、どうしようもなかった。

天界に行って助けを請うべきか、いや、銀竜に戻って空から探せば・・。

などなど、次々に案が浮かんでは自分で打ち消して行く。

ミカを何が何でも失いたくないと言う思いが、迷いの袋小路から抜け出させてくれない。

契を交わせば、簡単に助けられるという事実もあった。

だが、前から迷っているように、自分はもう、あと数年程度しか生きられない。

それは運命ではなく命運。

逃れようも無い。

アクティースは死を恐れてもいないし、回避しようとも思わない。

だが、ミカはまだ13歳。

成人するのと同様にして、契を結んでしまっただけは確実に死んでしまう。クーナ達は、すでに普通の人間として生きるには随分長い時を生きているから、死ぬと言っても受け入れられるし、納得もした。

だがミカは、あまりに若すぎる。

あと数年生かすために契を結ぶべきか、悩めるのだ。

アクティース達にとっては、ミカは娘のようなものだった。

自分の命を投げ打つほどの、必死さと真面目さが愛しい。

だからこそ死なせたくない、みな思っているのだ。

だが、あと数年で死ぬのなら、今ここで死なすのも一つの慈悲かもしれない。

そんな考えに没頭し、アクティースはすっかり花を探す事を忘れていた。

「あつた！！ アクティース様！！」

ルーケの興奮した声に、アクティースは俯いていた顔を撥ね上げた。

「どこじゃ！？」

「あそこです。 ちょっと待っていてもらえますか？」

そう言うと、返事も待たずにルーケは斜面を降り始めた。

「馬鹿者！ 綱も付けずに降りる馬鹿がおるか！」

思わずアクティースがそう叫ぶほど、斜面は急であった。

「そう・・・言われ・・・でも・・・持ってきて・・・ないですから。」

途切れ途切れに答えながら、ルーケは木から木へとどんどん下って行く。

（まったく、馬鹿者が。 わらわならもっと早く、簡単に行けたものを。）

アクティースは、元々翼の無い銀竜である。

つまり、翼で飛ぶのではなく、神々と同じく神通力と言うか念力と言うか、不可視の力で飛行するのだ。

それは人の姿をとっていても同じ事。

もつとも、ルーケはそんな事は知らないが。

アクティースの見詰める先、ルーケは危なっかしい動きながらも、着実に目的のムロン草の場所まで降りて行き、何とか手が届きそうな場所まで来た。

木につかまりながら、目一杯腕を伸ばし、触れるか触れないか。

（ヴァー！ 危なっかしくてイライラする！ もうちょっと安心できるやり方はないのか！？ まったく！！）

ハラハラしながら見詰める先、ルーケは何とかムロン草の茎に触れ、

何とか手に取り。

「採った！」

と、安心したと同時に、木を握っていた手が滑って離れた。

「ぬお！？」

しかも踏ん張っていた足元も崩れた。

降りしきる雨で手が滑り、斜面も緩くなっていたのだ。

「おおおおおお・・・おお？」

完全に斜面を見上げて落下したルーケはしかし、景色が変わらない事に呆然とした。

「まったく。阿呆かお前は。」

「え！？」

空中で下を向けば、いつの間に來たのか、アクティースが背伸びをするように両腕を突き上げた姿勢で、両手でルーケの背中を持ち上げて支えていた。

「わらわに任せれば、このように安全に採れたのじゃ。世話が焼けるのお。」

そういうアクティースの足は、地に着いていなかった。

スイスイと、宙を滑るように移動しながらムロン草を摘んで行くアクティースを見下ろしながら、ルーケは雨に打たれつつしょぼんとして見守っていた。

やがて、籠をいっぱいにして戻って来たアクティースと共に洞窟に戻ると、ルーケは急いで適量の薬草を炒める。

それから沸きっ放しのお湯を注ぎ、飲み薬を作り、小川で鍋ごと冷やし、ミカに飲ませようとして・・・動きが止まる。

既にミカの意識はなく、普通に飲ませられなくなっていたのだ。

「どうしました？」

クーナが不審に思っ て見ると、

「・・・口移しじゃないと、飲ませられそうにないんだけど・・・」

「
そう言われ、クーナがチラッとアクティースを見ると、もげそうなほど猛烈に首を横に振って拒絶していた。

「分かりました。私がやります。」

クーナはそう言っ て軽く口に薬を含むと、そっとミカに唇を重ねた。ミカは微かにコクンと喉が動くと、飲み込んだようだった・・・が。唇を外したクーナは、美人台無しな物凄い顔になっていた。

「だ・・・大丈夫です・・・か？」

恐る恐るルーケが聞くと、クーナはなんとも言えない顔をしつつも、無言で軽く頷く。

だが、大丈夫では無い事は、見ているだけで分かる。それほど猛烈に苦いのだ。

かと言っ て、男であるルーケの前でおう吐するなど、クーナのプライドが許さないため、必死に耐えているのだ。

そんなクーナの女としての戦いを眺めつつ、アクティースは苦笑いを浮かべていた。

以前、薬草学が何かで口に含んだ事があり、その時は3日ほど苦味が口の中から消えなかったものだ。

もつとも、アクティースはクーナと違って吐き出すのを堪えはしなかったが。

クーナは貴族の子女として厳しく育てられたため、この手のプライドは人一倍強い。

ともかく、僅かな量でも効果が現れたのか、ミカの呼吸がだんだん落ち着いて来た。

「ふう。なんとか間に合ったようですね。」

「お主のおかげじゃ。なんと感謝したものか。何か欲しい物はあるか？ 出来るだけ希望に沿う・・・お前の腰にある物はなんじや？」

珍しくホッと安堵した顔で、更に珍しく感謝の言葉を言い、しかももつと珍しく、男嫌いのアクティースが男であるルーケに言うのだから、メレンダとルパは驚愕に目を見開いた。

アクティースにとって、やはりミカは大事な巫女と言う事が良く分かった。

それで何故契を結ばないのか、2人には分からなかったが。

だが、ルーケの腰から強い力を感じ取り、そちらの方に興味が移ったらしい。

ルーケはアクティースの言う物が何か暫し分からず、腰に手を触れてやっと思ひ出す。

「これはこの間、ある方に頂いた癒しの玉ですが・・・それがなにか？」

そう聞いた途端、アクティースがゴンツと、脇にあった柱よろけて頭を打ち付けた。

「だ、大丈夫ですか？ アクティース様！」

「あゝ・・・気が付かなんだわらわもわらわじゃが・・・。お前の無知さにも呆れるのお。癒しの玉があって、なんで延命処置なのじゃ。」

「え？　なんでって言われても・・・癒しの玉って、持っているとならぐ以外に使い道があるんですか？」

なんとも言えない湧き上がる思いに身もだえしつつ、アクティースは柱に抱き付いて、ガリガリと爪で削り取る。

「貰い受けた時に、お前は使い方も聞かぬのか!？」

「それがその・・・相手は・・・死んでしまったもので・・・。」
流石に、殺したとは言いにくい。

奪い取ったように受け取られるからだ。

アクティースは思いっきりため息を付くと、柱から離れ、

「その癒しの玉は相手への想いを力に変え、相手の生きる意志と混ぜ合わせ、魔王など待たぬとも、どんな病気も怪我也治せるのじゃ。」

「・・・そんな力が・・・。」

「心優しきニンフしか持てぬ、優しさの結晶なのじゃ。癒しの玉を手を持ち、強く相手を想うがよい。それが使い方じゃ。」

「相手を強く想う・・・。」

ルーケは腰の袋から癒しの玉を手にとると、ミカに向けて念じてみた。

(治れ・・・治れ・・・!)

だが、癒しの玉はなんの反応も示さない。

アクティースを振り返ると、真剣な眼差しでルーケを見詰めていた。

「念じるのではない。想いを込めるのじゃ。」

「・・・それなら、俺ではなくアクティース様の方がよろしいのでは？　俺はミカさんに強い感情を持ち合わせていません。ですが、

アクティース様なら・・・。」

「無理じゃ。わらわは確かにミカを必要としてはいる。　じゃが、我ら竜族では想いの質が異なるため、人は癒せぬのじゃ。」

本当は、そんな事はない。

だが、今のアクティースには迷いがある。

そして、ミカは生きたいと言う強い想いが無い。

自分の迷いとミカの生きる意思の弱さでは、回復出来ないと思える。そして、もし本当に癒せなかった場合、二人の間にできる亀裂は確実に、癒される事が無いだろう事も、確信できたからだ。

アクティースの想いで癒せないと言う事は、本当に必要とされていないとミカは思い込むだろう事は想像に難くない。

ルーケはアクティースの助力を諦め、深く深呼吸をすると、心を落ち着けてから再び癒しの玉に集中した。

だが、苦しんでいるミカを助けたいとは思うが、ミカ本人を好きなわけではないし、どうにも使い方が分からない戸惑いもある。

「・・・ち・・・ぎ・・・り・・・」

「ん？ 寝言？」

浅い呼吸ながらもだいぶ落ち着いて来ていたミカが、微かにそう言うのと、目を開いた。

最初、ルーケが誰だか分らなかったようだが、分かったら分かったで、今度は何故ここにいるのかと驚き、目を見開いた。

「大丈夫かい？ 今、薬を飲ませたから、楽になると思うよ。」

優しくそう言うと、ミカは悲しげな顔をして、スツと涙を流した。

「殺して下さい・・・」

「！？ 何を！？」

「殺して下さい・・・。もう、辛いのは・・・いや・・・」

「何を馬鹿な事を言っているんだ！・・・君はまだ若いじゃないか。何故死にたがるんだ？ 俺は君を助けたいんだ。治るために、治すために、努力をしてくれよ。」

一旦は激情に声を荒げ、思い直して優しくそう諭すが、ミカは悲しげな顔のまま、口を噤んでしまった。

「一体何が・・・。なあ、俺には君の気持も悩みも分からないけど、生きなければ何も出来ないじゃないか。違うかい？」

「そうよ、ミカさん。生きなければ、何も・・・」

「じゃあ何故・・・何故私だけ・・・クーナさん達は・・・契を・・・」

クーナを睨みつけて苦しげにそう言うと、アクティースへ目を移し、
「いらないなら・・・死なせて・・・！ 私は死ななければ・・・
ならないのだから・・・！」

「死ななければならなくて・・・どうしたんだよミカさん？ い
ったい何が？」

振り返って見ると、アクティースは目を細めてミカを見詰めながら
も何も言わない。

「ミカさんは、生贄だったのです。」

ミカを心配げに見詰めつつ、クーナが静かにそう言うと、ルーケは
驚いてクーナを見た。

「生贄！？ この子が！？ まさか、今年の生贄の巫女って・・・
！」

「そうです。アクティース様は、今まで生贄の巫女を頂く事で、
リセを守護してきました。今年はその生贄が、ミカさんだったん
です。」

「・・・そうだったのか・・・。でも、それじゃあどうして・・・
。」

色々な思いと考えが次々浮かびまとまらず、ルーケは混乱した。

見つめ続けるミカの目を、アクティースは静かに見つめ返していたが……。

やがて、痺れを切らしたか、口を開いた。

「わらわが憎いか？ 契も結ばず、ただ囲っているだけのわらわが。」

おもむろにズバツとそう聞かれ、流石にミカに迷いが生じ、目が辺りを彷徨う。

ルーケは部外者だし、クーナ達はアクティースの真意が分からないので、黙って推移を見守る。

「憎みなければ憎むがよい。 じゃが、お前が死ねば、わらわは契約より解放され、人間の王国を守る義務も無くなるのお。 それでも良ければ死ぬがよい。」

「「アクティース様！？」」

あまりと言えばあまりな言い様に、思わずクーナとルーケの声が重なった。

ルパとメレンダに至っては、驚きのあまり声も出ない。

だが、そんな外野など眼中にないと言うように、アクティースはあくまでミカの目を見詰め続けていた。

「お前はわらわの生贄として差し出され、わらわはそれを受け取った。 お前の意見を聞き入れ、翌年から人ではなく食料へと貢物も変えた。 お前はわらわに仕える事を条件として、そう契約を結ばせたじやろう。 それを勝手に破棄するならば、わらわも契約を守る必要があるまい。 違うか？」

ぐうの音も出ないとはこの事だが、言い負かして生きる気力が湧くかと言えばそんな事はあるまい。

だが、ルーケは部外者であり、何を言っても始まらない。

だから、2人のやり取りに関与せず、行動に移した。

「ミカさん。俺は君の事を特別な女性とは思っていない。それは恋人にしたいとか、そういう強い気持ちと言う事だけど、決して嫌いと言う訳じゃない。知り合った以上、助けられる君をむざむざ死なせたくない。この癒しの玉は、ある人から命と引き換えに受け取った物。使い方がいまいちわからないけど、これを使えば君を癒せる。俺の気持ち、受け取ってくれ。」

優しく諭すようにそう言うと、ルーケはミカに向かって癒しの玉をそっと突き出した。

その癒しの玉に、クーナがそっと手を添える。

「私の気持ちも受け取って下さい、ミカさん。私は結婚した事も無ければ、子を産んだ事ありません。でも、あなたを娘のように愛おしいと思っています。生きて下さい。」

クーナの愛情と優しさが、ルーケにも感じ取れた。

癒しの玉を通して、2人の気持ちが交わっているからだ。

「クーナちゃんずるい！ミカちゃんを愛しているのは一緒なんだから！」

ルパがそう言いながら、クーナの手に自分の手を重ね、その上にメレンダも手を重ねる。

重い、と、ルーケは思ったが、口には出さない。

流石に3人も手を重ねると、けっこうな重さになる。

だがそれは同時に、3人の気持ちの重さでもあった。

「生きるんだ、ミカさん。人は1人では無力で無知だ。でも、心を一つに出来ればいろんな事が出来る。君はまだ若い。可能性があるんだ！」

ルーケがそう言った途端、ミカが口から吐血した。

「ミカ！」

クーナが思わず叫ぶが、ミカは悲しげに先輩巫女達を見つめ返すだけだった。

4人の心、しかし、ミカはそれを受け入れなかった。

深い悲しみと戸惑いが、温かい心を感じながらも、受け入れる事を

拒絶していた。

それほど悩み、傷付き、疲れ果てていたのだ。

その壁となる心を癒しの玉を通じて感じ、ルーケは無力さに絶望を感じ始めていた。

癒しの玉は、互いの心を交流させて癒しの力を作り上げる。

だが、交流自体を拒絶されてしまっていては、どうにもできない。

（何とか出来ないか！？　なんとか！！）

自分の無力さに、苛立ちと怒りがこみ上げてくる。

その異変を察知したクーナが、空いている右手をルーケの太ももに添えた。

ハッとしてクーナを見ると、無言でわずかに首を振った。

（いかん、落ち着け俺。　癒しの玉に、負の感情を入れてはいけない。　でも、どうすればこの状態を打開できる？　こんな事なら、もっと知識を得れば良かった。）

今更だが、勝手に飛び出した自分を呪いたくなる。

だが、今、どんなに後悔しても、どんなに望んでも、力と知識が手に入るわけではない。

今ある全ての知識と力を使って、望む結果を出す努力を全力でするしかない。

「本当に、愚か者じゃなお前は。」

いつの間に来たのか、ルーケのすぐ背後から、頭越しにミカを見下ろしていた。

「わらわはお前に生きろと言っておるのじゃ。　それも分からぬ愚

者か。　お前をいらぬと思っておるなら、とうの昔に喰らっておる

わ。　それさえも悟れぬ馬鹿者か。」

そう言ったと思うと、ルーケの頭にズシッとした重く柔らかい物を乗せ、メレンダの手の上に手が重ねられる。

「愚か者が。　わらわの気持ちも受け取れぬなら、本当にくたばるがよい。　わらわに尽くせぬ巫女などいらぬ。」

（お・・・重いっ！　なんって重い物を乗せ・・・って、まて。

後ろにいたのはアクティース様だけ。　　って事は・・・まさか・・・。

しかも、手には何も持っていなかった。

となると、重くて柔らかい物は、頭上から腕を伸ばすアクティース本人の体しかない訳で。

（こんな重い物をいつもぶら下げているなんて・・・女性って大変だなぁ・・・。それにしても柔らかい・・・。）

「こんな時に、盛^{さか}るな馬鹿者。」

「盛るってそんな!？」

そう言い返しつつ、ミカを除く女性全員に白い目で見られている事に気が付き、二の句が出て来ないルーケである。

（癒しの玉・・・恐るべし・・・。）

なまじ感情を互いに感じ取れるだけに、感情限定とはいえ丸分かりなのは諸刃の剣だ。

「って、そう言うならどけて下さいよアクティース様」。一応俺も男なんですから。」

困りつつも嬉しいがそう思う訳にもいかず、ルーケが情けない声でそう言うのと、

「仕方があるまい? お前の上しか空いておらんのだ。」

まあ確かに、ルーケの右脇にルパが立ち、左には座ったクーナ、その上からメレンダ。

アクティースが癒しの玉に触れようと思ったら、ミカ越しか座ったルーケの上しかない。

（ええい、心頭滅却! ミカさん! 受け入れろ!!）

ルーケの戸惑いのため、暫し混迷を極めた感情。だがそれも、圧倒的な温かさがミカへと導いた。

（なんだ、人とは違うって言いながら・・・。）

ルーケはクスツと笑うと、改めて意識を集中した。

（こんなに思ってくれる人がいるんだ。　　生きろ、ミカさん・・・!）

心と心、思いやる気持ちがやがて1つになり・・・。

死にたい死にたい死にたい死にたい

死んで楽になりたい死んで楽になりたい死んで楽になりたい死んで楽になりたい

ミカの心は、病の苦しさでアクティースへの不満・疑問への心労で、それしか考えられなくなっていた。

ルーケの言葉など最初から聞く耳さえなく、クーナ達の言葉は虚しく素通りしていく。

それどころか、やがて嫉妬から逆恨みし、ルーケやクーナ達を憎く思い始めていた。

そんな時にぶつけられた暖かな心。到底受け入れられるものではない。

いらなくせに 私なんていらなくせに 温かい心を拒絶し、撥ねつける想い。

そこへ、蛇のような熱い心がぶつかって来た。

「わらわはお前に生きろと言っておるのじゃ。それも分からぬ愚者か。お前をいらぬと思っておるなら、とうの昔に喰らっておるわ。それさえも悟れぬ馬鹿者か。」

暖かな心と、一見冷たく言い放たれた言葉が、閉ざした心の壁を、打ち砕く。

(あ・・・。 温かい・・・。)

「信じる心は力となる。 答えが出るまで揺るがない事だな。」
不意に、始原の悪魔が言った言葉が思い出される。

愚者の舞い 2-41

（揺るがない・・・信じる心・・・。）

「あいつは死にたがる奴を好まない。 命の重さを良く知っているからだ。」

（命の・・・重さ・・・。）

いくつもの心が、ミカを温かく包み込んでいるのが分かる。

その中でも、一番小さな温かさに触れてみた。

それはルーケの心だった。

ミカを心配し、助けようと思っている。

だが、それはこの中で、誰よりも小さな温かさだった。

ただ、自分の信念に従って、必死に助けようとしている心は、よく伝わった。

ルーケは言わば、赤の他人。

それなのに、必死に助けようとしている、その気持ちが嬉しく思えた。

次に、ほぼ同じ大きさの3つの温かさに触れてみた。

それはクーナ、ルパ、メレンダの心。

3人とも、同じくらい自分の事を心配していた。

その気持ちは、凄く嬉しかった。

だけど・・・と、ミカは、一番大きな温かさに、触れる事を恐れた。残るはアクティースだけ。

一番温かく、炎のように熱い心。

その温かさは、ミカなど一瞬で焼き尽くしそうな激しさも持ち合わせていた。

もし、アクティースに拒絶されたら。

そんな不安が、触れる事に恐れを抱かせる。

しかしそれを自覚した時、ミカは自分で自分がおかしくなった。死のうとしていたのに、何を恐れるのかと。

死ぬ前に全てをハッキリさせたい、ミカはそう決心して、アクティースの心に触れた。

温かった、誰よりも。

そしてその心は、悲しみにも満ちていた。

どんなに愛しても、どんなに好きになっても、自分より先に消え行く命。

だからと言う訳ではないが、同じように悲しみと寿命を持つメガロスに惹かれた。

極一部分であろうが、そんな悲しみが確かに感じられた。

そしてそれは・・・。

（アクティース様・・・私に心を・・・。）

ミカは、無防備に開け放たれた心に、身を委ねた。

ルーケはミカの心が受け入れたと察知した瞬間、思わず思考が声に出た。

「治れっ!!」

その声に反応したように、ミカの体を強烈な赤い光が包み込み、視界を奪い去る。

（うおお!?!）

確かに声に出た筈の、叫び。

だが、口から声になって出た感じがまったくしない。

何が起きているのか全く分からぬまま、ルーケは熱く感じる光に耐えた。

やがて光が消え失せ、視界が戻って来た時。

ミカは安らかな、寝息を立てていた。

「・・・成功・・・した?」

自分のやった事なのだが、まったく実感が湧かず、ルーケは呆然とミカを見やる。

「よくぞやった。お前は人間にしては、ほんに良くやった。褒めてつかわそう。」

（本当に、俺がやったのか？）

そんな疑問が湧き、アクティースを見ようとして、まだ、胸がズッシリと圧し掛かっている事に気が付き、どうにかしようとした瞬間、急に巫女3人が前のめりに倒れたので、支えていたルーケを下敷きに折り重なる。

「ぐおお・・・お・・・」

重い、と、口走りそうに成って、なんとか飲み込む。

相手はまだ若い（と、ルーケは思い込んでいる）女性達なのだ。

重いと言ったら、女性だけに傷付くだろう・・・と、思ったのだが。一向に3人はどいてくれない。

3人は想いを込め過ぎて、ルパとメレンダは気を失っていたのだ。かろうじてクーナは意識があったが、精神疲労で朦朧としていた。

「やれやれ、力みすぎじゃ。」

アクティースは苦笑いしながら、ルパとメレンダを丁寧にどけて、彼女達の寝具に横たわらせる。

「ふむ。お前への褒美は、そのままの体勢でどうじゃ？」

意地悪くアクティースがそう言うと、ルーケは返答に困った。

既にクーナ1人とは言え、朦朧として押し掛かっているので実に重い。

だが、下敷きになった時にクーナの方を向いたため、半開きになった膝の間に見える、その奥の白い布が目眩しい。

しかも、重い体は非常に柔らかい部分が押し付けられていた。

確かに、褒美としては十分かもしれない。

気高く、優しく、美しいクーナの・・・。

そんな邪な心を癒しの玉を通じて感じたクーナは、覚醒すると同時に跳ね起きた。

玉をしっかりと握りしめたまま。

「クーナ、そのままできてやれ。褒美に欲しいそうじゃ。」

真顔で、それでいて笑いを堪えるように目を細めてアクティースがそう言うと、2人は即座に、同時に反応した。

「えええ！？ そんな事言っていないですよアクティース様！！」

「冗談じゃありません！ そんなふしだらな！」

「ホホホ。 では、シッカリと抱き締め……。」

ドサ。 と不意に、今度はルーケが倒れた。

「……いやだ、私ったら……そんなに重かったかしら……？」

「いや、こ奴は元々魔力が少ないようじゃ。 それなのに、軸にな
ってしまったからの。 今まで意識のあった方が不思議じゃな。

オスの本能かもしれんがの、クーナに抱かれておったでな。」

「……アクティース様、怒りますよ？」

「おお、怖い。 クーナが怒ると怖いからのお。」

歩み寄りながらそう言いつつ、アクティースは優しくルーケを軽々と抱き上げた。

「アクティース様？ どちらへ？」

今までの冒険者のように捨てはしないだろうが……と、不安がよぎる。

「今日の行いは、まさしく勇者と言って良いからの。 わらわ自ら
添い寝して、労ってやろう。 ホホホホ。」

「さ……左様でございますか。」

思わず、笑顔が引きつるクーナである。

クーナは翌朝の事に思いを馳せつつ、癒しの玉を自分が持っていた
事に安堵した。

ただ、死んでいたらどうにも出来ないであろうが。

そして翌朝、クーナの予想は見事に命中する事になる。

第二章 迷走する運命 完

第3章へと続く

<http://ncode.syosetu.com/n6120>

g/

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0676g/>

悲しき勇者 異説 愚者の舞い 第2章

2010年10月10日20時37分発行